の見地より敵主陣地の偵察、攻撃部署の決定、諸隊の展開、爾後の攻撃準備等を考へれば、一刻も速に警戒陣地を奪取することが緊要である。固より1、2案者の言ふ不利はあるが、師團長の企圖に對し拂曉時に於て攻撃準備の整然たることは最も緊要であつて、他の些少なる不利の爲に之に支障を來たすが如きは斷じて不可である。尚企圖の祕匿の如きは夜間の機動により十分其目的を達成することが出來る。

B、部署に就て

大要次の二案がある。

1案　砲兵を增加せず概して現態勢を以て攻撃せんとするもの

2案　砲兵を增加し概して現態勢を以て攻撃せんとするもの

右兩案者の理由を要約すれば次の如くである。

1案者の理由

敵の警戒陣地は堅固でない、故に砲兵の增加を要しない。且我が重砲を過早に敵に暴露するは兵力祕匿上不利である。

2案者の理由

敵の警戒陣地は成る程陣地其ものは堅固ではないが、第一項に述べたる如く準備せる砲兵火の有力なる支援があるのであるから、之が攻略には相當の困難を覺悟しなければならない。而して若準備不完全なる現在布陣しある劣勢なる砲兵を以て敵の準備せる優勢なる砲兵に對するときは、多大なる損害を受け、折角我が優勢なる砲兵を有しながら各個に撃破せらるるの不利に陷り、戰鬪の初期より砲兵は受動の位置に立つことになる。故に斷然全力を展開し一擧に警戒陣地を奪取することが緊要である。

說明

右1案者の述ぶるところも一理ありと認めるが、遺憾ながら砲兵戰鬪の重大なる要訣を忘却して居る。卽ち砲兵は當初より優勢なる火力を以て先制を確保することが特

に必要である。今若現に布陣しある砲兵のみを以て準備ある三十門内外の優勢なる敵砲兵に對せんか、各個に制壓せらるるの虞があり、折角我は優勢なる砲兵を有しながら、逐次其戰鬪力を擊破せらるるの不利に陷るのである。宜しく初より優勢なる砲兵を使用し、積極的に主動の位置を占め、且迅速に陣地を奪取すべきである。

尙一部の答解に於て砲兵の全力を直に統一指揮せしむる案があるが、之は時間を遲延し、且狀況に適合しない。卽ち目下布陣せる砲兵は、恰も配屬砲兵の如く、依然右縱隊前衛及左縱隊の編組に在らしめ、增加すべき砲兵を統一して主として右縱隊前衛に協力せしむると共に、敵の攻勢を阻止するの準備に在らしむるを要する。

其他第一線部隊の部署に就いても研究すべき事項があるが、問題の主眼點でないから、原案に就いて研究することを希望する。

四、主陣地の攻擊部署の大要に就て

主陣地に對する攻擊部署は、警戒陣地を奪取し諸偵察を行ひたる結果始めて決定すべき事項であつて、言はば將來の問題で、全然腹案事項である。唯其著眼を研究する見地より出題したのであるから、誤解のないやうに希望する。

從つて細部に亙り之を論述するは、反つて誤解を來す虞があり、又確定し得べきものでもないから、主要なる事項に就てのみ其概要を研究することにしよう。

A、攻擊の重點に就て

次の二案がある。

1案　敵陣地の右翼に指向し包圍殲滅を企圖するもの

此案者は概ね笠松山を夜襲し之を奪取する考察である。

2案　古坂東方高地に指向せんとするもの

1案者の主なる理由

笠松山の敵陣地は凸角を成形しして居るから、夜襲を以て之を奪取することは必ず

しも不可能でない。而して之を奪取せば敵の右翼を包圍席巻し其退路を遮斷するこ
とが出來るから、本案を可とする。

2 案者の主なる理由

古坂東方高地は敵陣地の要點である。而して我が歩、砲兵の協同特に砲火の集中が容易であるから、該高地に攻撃の重點を指向するを可とする。敵の右翼を包圍することは望むところであるが、地形堅固にして、且笠松山の陣地は第一項に於て研究した如く敵の本陣地なるべく、敵は之を極力保持すべきが故に、單に一部隊の夜襲を以て之を奪取することは困難である。従つて其夜襲の成功を前提として師團の攻撃を決することの適當ならざるは、自明の理である。

說明

右兩案を比較するに、第一案は確かに卓拔なる案であつて、原則の理想に合致して居る。然し玆に考慮すべき件は、其實行性如何の問題である。卽ち本案は笠松山を夜間に奪取し得ることを前提としなければならない。笠松山は既に述べたるが如く敵主陣地の右翼に於て最も重要なる據點である。然るに今より警戒陣地攻撃を開始し更に進んで夜襲の準備及實行が完全に遂行出來るであらうか。縱ひ或る程度まで實行が出來たとしても、敵が極力其保持に努むるは當然であるから、之が成功を確保するまでには至るまい。尙該方面の地形は堅固であるから、包圍殲滅の語は壯であるが、戰鬪は輒軟に陷り、戰況の發展は決して容易ではない。

故に本狀況に於ては、我が優勢なる火力を發揮し敵陣地の要點を奪取するを主眼として攻撃の重點を決定するを適當とする。卽ち概ね第二案に同意である。

機動により敵に陣地を放棄せしめ或は之を包圍殲滅することは、戰鬪綱要に示してある如く、極めて緊要である。然し狀況特に敵情、地形の如何に拘はらず常に之を適用せんとするが如きは適當でない。宜しく戰況特に戰場の地形、敵軍の素質等を考察して原則を翫味すべきである。

B、兵力部署の大要及砲兵に與ふる任務に就て

イ、兵力部署の大要

第一線の兵力部署は概ね主力方面に四乃至六大隊を使用し、助攻方面に二乃至三大隊を使用する案が最も多い。

攻撃の重點に思ひきつて優勢なる兵力を使用することは、兵力部署の最大要訣である。特に本狀況は正面攻撃であるから、此著眼が一層必要である。故に主攻方面の兵力を四乃至五大隊とする案には同意し難い。又縱ひ其兵力を六箇大隊としたる案に於ても、之に過大なる戰鬪正面を與ふることは適當でない。宜しく古坂高地正面に六箇大隊を使用すべきである。

山砲を各翼隊に配屬することは、概ね全員一致の考案で、出題者も同意である。然し少數ではあるが、山砲を效力射準備射撃間砲兵隊として統一し歩兵の攻撃開始と共に配屬する案がある。本案は一見巧妙にして策ある考案の如くであるが、配屬砲兵と

して歩、砲兵協同の完全なる實を擧ぐることが困難となるから、同意し難い。原案では山砲各一中隊を各翼隊に分屬して一見兵力を分散したる觀あるも、左右兩翼隊方面共地形上山砲を必要とするのみならず、主力方面は我が主力砲兵の火力の集中最も容易にして、特に此正面に配屬砲兵の兵力を大ならしむる必要を認めないからである。

ロ、砲兵の部署

砲兵隊の兵力部署は、山砲を除きたる野砲、重砲の全力に飛行隊の一部及氣球を配屬したる考案が多數であつて、出題者に於ても之に同意である。然し其主力の陣地を西部青野ヶ原に選定したる案稍多きは遺憾である。一體攻撃砲兵の陣地は、火力の機動を拘束せられざる限り勉めて敵に近接せしめ、戰鬪の終始に亙り陣地を變換することなく有效なる射撃を實施し得ることが緊要である。

明拂曉の攻撃の爲に夜間を利用して陣地を敵に近く推進し得る本狀況に於ては原案の如く勉めて陣地を前方に出すを可とする。

○特に我が觀測地帶は地形上敵の警戒陣地附近に選定せらるるを以て、放列陣地を勉めて之に近接せしむる著眼を必要とする。

ろ、砲兵に與ふる任務の概要

諸君の案は各人各樣で、之を分類することは困難であるが、一般に任務が過度に詳細に失し、機動の餘裕なく、甚だしきは砲兵隊長の部署すべき事項まで立入つた案が非常に多い。

此の如く詳細に任務を示すことは無いではないが、之は敵陣地の狀況及特に設備、我が攻撃準備の程度等の如何に關するものであつて、本狀況の如く敵陣地は特に堅固ならず、又迅速に攻撃を準備すべき場合に、徒らに憶測的に任務を始めより詳細に示すことは適當でない。反つて砲兵隊の活動の自由を拘束し、命令の作爲徹底を複雜困難ならしめ、軍隊の行動を鈍重ならしむる不利に陷る。然し師團長の企圖特に歩、砲兵の協同に緊要なる事項及砲兵の戰鬪指導の基調となるべき事項等は之を明示するを要する。又砲兵には再三述ぶる如く準備の時間を與ふることが必要であるから、爲し得る限り準備すべき任務等を示すことが必要である。

以上の諸件を考へ且戰鬪綱要に示しある砲兵に與ふる任務の原則を熟讀すれば、本狀況に於ては、效力射準備射撃開始時機竝其時間、歩兵に直接協同すべき兵力、時機、決戰時に於ける火力增加、敵の攻勢阻止等を、原案に記しあるが如く示せば、概ね其要求を充足することが出來る。諸君の案に就て見るに、火力の運用に於て重點の成形に不徹底なるところがある。兵力卽ち火力の集結力と其轉換の迅速なることとは砲兵獨特の性能である。本狀況の如く敵陣地の正面を突破せんとするが如き場合に於ては、要すれば全力を以て攻撃の重點方面に協同し得る如くすることが極めて緊要である。

五、結　言

師團の戰鬪指導に就いては以上の說明のみでは不十分で、尙研究すべき事項が數多あるが、前にも述べた如く、爾餘の研究項目は敵情を偵察した後でなければ確定出來ない事項であつて、今之を論ずるも空理に陷り、反つて誤解を生ずる虞があり、且出題の主眼が前述の如くであるから、之を以て說明を終ることにした。尙原案の說明は既に總評と共にしておいたから、他は當初に於て述べたる如く原案に依つて研究せられんことを切望する。

原案

別紙要圖(附圖第八)ノ如シ

第八想定 (二五二)

所要地圖 二十萬分一 名古屋、岐阜、彦根東部、御在所山、彦根西部、近江八幡
五萬分一

一、其主力ヲ以テ上野—水口—八日市—彦根道ヲ北進セル南軍第一師團(1KB、1AA、1FM(偵)及其他所要ノ部隊ヲ配屬セラル)ハ七月一日正午以來犬上川左岸地區ノ敵陣地攻擊中ナリ

二、同日午後四時迄ニ師團長ハ左ノコトヲ知ル

1 敵ハ敦賀方面ヨリ南下シ六月二十九日以來逐次犬上川左岸地區ニ進出シ目下步兵六、七大隊、騎兵五、六中隊、砲二十七、八門ニ達セルカ如ク其配備ノ景況別紙要圖(附圖第九)ノ如シ

2 師團ノ戰況左ノ如シ

右翼隊　平柳、小八木ノ線ニ展開シ主力ヲ以テ松尾寺北側高地ニ向ヒ攻撃セシカ酉明寺西側ノ敵砲兵ノ斜射ヲ被リ攻撃進展セス午後三時頃漸ク祇園、北蚊野ノ線ニ進出セシカ松尾寺北側ノ敵陣地ノ火力就中巧ニ配備セラレタル自動火器ノ效力偉大ニシテ損害續出シ爾後戰鬪交綏ニ陷ル

左翼隊　沖、下八木、吉田ノ線ニ展開シ重點ヲ常安寺高地ニ指向スルヤ如ク攻撃セシカ敵砲兵殊ニ尼子東側附近ノ側防砲兵ノ爲大ナル損害ヲ被リ午後二時辛ウシテ堅井、東出、西出、八町咨東端ノ線ニ進出セシカ爾後更ニ熾烈ナル敵ノ自動火器ノ射撃ヲ受ケ攻撃頓挫シ戰鬪交綏ニ陷ル

砲兵隊　敵砲兵ノ爲大ナル損害ヲ被リ殊ニ我ハ良好ナル觀測所ニ乏シキヲ以テ火力ノ發揚十分ナラス

午後四時ニ於ケル師團ノ態勢別紙要圖(附圖第九)ノ如シ

3　飛行機及其他ノ報告ニ依レハ歩兵約六大隊、砲十數門ノ敵ノ一縱隊ハ敦賀—彦根道ヲ南下中ニシテ午後三時三十分其先頭ヲ以テ木之本ニ達セリト

三、右ノ狀況ニ依リ師團長ハ本夜夜間攻撃ニ依リ敵陣地ヲ奪取シ明朝ノ攻撃ヲ準備スルニ決シ夫々諸隊ニ命スルトコロアリ

注意

1　森林ハ矮小疎散ニシテ展望及射撃ヲ妨ケス

2　水田及池ハ乾涸シアリ

3　河川ハ到ル處徒渉シ得

4　平地上ノ片點線路ハ野砲ノ通過ヲ許ス
5　琵琶湖ハ使用シ得ス

問題

第一師團長ノ企圖ニ基ク部署要圖

總評

一、概評

八月初旬迄に受領したる答解數は二百五十餘通に及び盛夏の候尚撓まず戰術の研究に精進せらるる諸官の意氣を壯とする。答案の内容に至りては、時に著意の適當ならざるもの或は時日の關係等に依り研究不十分の點あるものありと雖、何れも熱心眞面目なるを認め、欣快の情を覺える。

本問題の研究の主眼は明早朝の戰鬪を有利に導く爲如何に夜間攻撃を實施し且如何

に兵力を移動集結すべきかである。

諸官の案を大別すれば左の諸案となる。

第一案

1　本夜全力又は主力を以て雨降野以東の敵陣地を奪取したる後右翼を西明寺、常安寺高地北端の線に進めて明朝の攻撃を準備せんとするもの

2　本夜全力又は主力を以て上記の敵陣地奪取の後一部を西明寺、常安寺高地北端の線に進め主力を中山道方面に集結して明朝の攻撃を準備せんとするもの

第二案　全力を以て敵陣地を奪取したる後敏滿寺、下之郷の線又は犬上川の線に進出して明朝の戰鬪を準備せんとするもの

第三案　一部を以て敵陣地の要點を奪取し主力を中山道方面に集結して明朝の攻撃を準備せんとするもの

第四案　一部を以て敵陣地の要點を奪取し明拂曉主力を以て現在の敵を山地方面に向ひ攻撃し敵増加部隊の來著に先だち之を撃滅せんとするもの

第五案　一意前面の敵陣地を奪取することのみを答解せるもの

第一案、第二案は何れも本夜速に敵陣地の大部を奪取し有利なる態勢を以て明朝敵の後續隊と戰はんとするもので、一見徹底せる案の如く考へられるが、尚研究すべき十分の餘地がある。

第四案及第五案は何れも狀況を輕視し、殊に第五案は全く敵の後續部隊の來著に就いて考慮を拂はざるか、或は之に對する判斷の正鵠を失するものである。

第四案者中一部を鳥居本附近の隘路口に進め敵後續部隊の來著を阻止せんとせるものがある。以下說明する敵情判斷に照し適當と認め難いが其企圖心は賞すべきである。

第三案は概ね洗練せられた案であるが、其實施法に於て研究を要するものがある。

以下細部に就て研究するが、以上の如く諸案に別れたる原因は、敵情判斷の如何に依ることが大であるから、敵情判斷に就ては稍、詳細に研究することとする。

二、敵情判斷に就て

敵の後續部隊に關する判斷の適當ならざるものがある、殊に若干の者は全然之に對する觀察をして居らぬと思はれる形跡のあるものがあるが、實に本夜行ふ夜間攻撃は、明朝敵の増加部隊との戰鬪を有利に導くといふことを條件とすべきで、此條件を度外視した夜間攻撃は、危險千萬なるものと謂はねばならぬ。

然らば木之本に達せる敵は今後如何に行動するであらうか。又此増加隊を合した場合に於て前面の敵は如何に活動するであらうか。凡そ敵情を判斷するに方りては、戰鬪綱要第五に示せる如く諸種の場合を考究することが必要である。而して「敵情就中其企圖ハ多クノ場合不明ナルヘシ」雖戰術上至當ナル行動及其爲シ得ヘキ動作等ヲ攻究セハ之カ推定上大ナル過誤ナキヲ得ヘシ」と示せるは特に味ふべきところである。

卽ち之を本狀況に照すに、犬上河畔に於ける敵陣地は、其配備竝本日の戰鬪振り等から考へて、後續隊の來著を待つてする決戰の陣地である。之が爲敵の後續部隊は成るべく速に彦根附近に進出し、主力部隊に合するに勉むるであらう。此進出に就ての判斷が各案區々になつて居る、或者は午後十時頃には彦根に進出し直に戰線に增加するであらうと觀察し、或者は正子頃迄に、或者は拂曉迄に、又或者は拂曉以後に到著すべしと判斷して居るが、何れも極めて漠然たる判斷で、確乎たる基礎の考がない樣に思はれる。勿論敵は各個擊破を恐れ一時も速に主力部隊に合する如く努力するであらう。然し本之本から彦根迄は尙七里餘もあるので、此間を一時間六粁の速度を以て押通すことも出來まいから、正當に判斷して彦根附近進出は午後十時乃至正子の間と見ることが出來る。然し到著した許りの部隊を直に夜間戰線に加入し又は夜間戰鬪の渦中に投入するといふこともあるまい。卽ち現陣地と相俟つて明朝の戰鬪を準備したる上明朝攻勢に轉ずるものと思はれる。然らば明朝敵は如何なる

態度を以て攻擊して來るであらうか、豫め研究して置くことが必要である。敵の戰鬪指導は主力部隊の陣地の儼存すると否とに依り異なること勿論である。隨つて是を次の如く分類して研究することが出來る。

第一、常安寺附近の高地及荒神山を保持する場合

之は敵の最も希望し同時に我の最も苦痛とする場合である。此場合に於ては敵は自己の欲する如く攻勢移轉が出來る。卽ち尼子、下之鄕方面より西南面して我を後方連絡線以外に壓迫することも、或は中山道方面より南方に壓迫することも、又荒神山東側地區より我を東南方に壓迫することも出來るが、唯最後の案は攻勢方面主陣地と離れ戰線の擴大を來すので、特別の狀況でない限り採らないであらう。

第二、常安寺附近の高地を我に奪取せられたる場合

之は敵の爲不利なる場合で、此際は已むを得ず左翼を敏滿寺又は下之鄕附近の陣地に托して中山道方面より攻勢に轉ずるであらう。此場合荒神山を據點として東南面し

て攻撃するのは、第一の場合に比し敵の爲更に不利である。卽ち第一の場合の如く常安寺高地を確保する間は琵琶湖を背後にして戰ふも敢て危險と稱する譯にいかぬが、一たび常安寺高地を奪取せられたら、此攻勢は頗る危險であると謂はねばならぬ。

第三、荒神山を我に奪取せられたる場合

此場合は、敵の戰闘指導に多少の影響はあるかも知れぬが、常安寺の高地を保持してさへ居れば、第一の場合と大體に於て變りがない。唯荒神山東側地區から東南面する攻撃が成立せぬのみである。

第四、常安寺附近の高地及荒神山共に我に奪取せられたる場合

此場合は敵の爲最も不利なる場合である。卽ち敵は敏滿寺高地に翼を托して中山道方面より出撃するの一途あるのみである。玆に一言したいのは、我より見たる荒神山の價値である。無論之を手に入れたら手に入れぬより良いにはきまつて居るが、抑、此廣大なる正面に於て常安寺高地も取り荒神山も取るといふことが、果して机上に考へる如く有利であらうか、是此場合に於て特に考慮すべきで、却て兵力分離の弊に陷り敵に突破せらるるの因を爲すものである。

第五、其他の場合

犬上川の線に後退して我を邀撃する如きは敵に特別の事情なき限り行ふことはあるまい。

以上研究するところに依り、此際敵として採るべき最良の策に就ては大約判定することが出來ると思ふ。

現在前面に在る敵は本夜大體に於て配備の變更を行ふが如きことはあるまい。是敵の後續隊を彦根附近に進出せしむる爲には、現在の陣地を極力確保するを要するからである。併し明朝後續隊の出撃に際しては、前面の敵の一部は之と合して行動を共にすることあるべきを覺悟して居らねばならぬ。

判決

第八想定

敵は本夜極力現陣地の確保に勉め後續隊の來著を待ちて明朝より攻勢に轉ずるなら
ん其重點を指向すべき方面は常安寺附近の高地を保有し得ば中山道若は尼子方面なる
べく同高地を我に奪取せられたる場合は中山道方面なるべし

三、夜間攻撃の爲の兵力及目標の決定に就て

兵力と目標の決定とは不離の關係を有するを以て、同時に研究することとする。
諸官の案を大別すれば左の通りである。

第一案　師團の全力を以て速に當面の全陣地を奪取せんとするもの
第二案　師團の主力を以て敵陣地の大部を奪取せんとするもの
　其一　常安寺以東の高地を奪取せんとするもの
　其二　常安寺高地及其以西を奪取せんとするもの
第三案　師團の一部を以て敵陣地中の要點を奪取せんとするもの
　其一　松尾寺北側高地を奪取せんとするもの
　其二　常安寺高地を奪取せんとするもの
　其三　下之郷を奪取せんとするもの

夜間攻撃に任ずる兵力及目標の決定は、明朝に於ける戰鬪指導と極めて重大なる關
係を有するが故に、十分なる研究を要する。此事項を解決する爲考慮すべきは、明朝
に於ける彼我一般の態勢を觀察し、殊に我は最も有利なる態勢を以て敵を撃つといふ
ことである。第一案は所謂各個撃破の法に依り本夜中に前面の敵を屠り明日敵後續隊
と戰はんとするもので、一見旗幟鮮明成功の公算も多い樣であるが、併し靜思したな
らば、果して一夜の中に斯ることが遂行し得らるるであらうか。抑〻夜間の攻撃は晝
間攻撃と其性質を全然異にして居るので、晝間の如く全正面に亙つて攻撃する如きは
困難である。縱ひ成功しても、兵力を分離し、連絡を失し、或は錯誤を生じ、隊伍の
整頓の爲多くの時間を要して、遂には翌日の戰鬪に支障を生ずるものである。之を過

去の戰史に徴するも明であつて、彼の三塡石山の夜襲に於ても、幾多の錯誤はあつたが、第十師團が隊伍の整理の爲翌日一日を要して軍主力の前進に著しく遲れたるが如きは其一例である。從つて日沒直後夜襲を決行し成功したとしても、明拂曉迄に態勢を整理し以て南下する敵に對應することとは期し得られない。況んや不成功の場合に於てをやである。縱ひ局部毎に成功しても、全般の成功を得ず戰線膠著して拔き差しならぬ樣になつた場合に於ては、果してどうであらうか。之を要するに本案は其成否の如何に拘はらず、明朝に於ける戰鬪準備に不都合を來すものと謂はねばならぬ。

第二案も亦第一案と略ゝ同一の利害を有するが、唯第一案に比し有利とする點は、敵の增加隊に對し一部を以て對應し得ることである。併し夜間攻擊には成功しても、拂曉以後の戰鬪に敗れたら、何の爲の夜間攻擊ぞやである。殊に松尾寺北方高地及△469.0高地に向つてする攻擊は、地形險難なるが上に、敵の陣地設備堅固なるを以て、大なる犧牲を覺悟せねばならぬのみならず、豫想する明日の主戰場とは隔絕して、努力の大なるに比しあまりに價値が少い。常安寺高地及其以西の陣地を攻擊するものは前者に比すれば攻擊容易である。

第三案は明朝の戰鬪指導を第一に考慮したものである。卽ち戰鬪綱要第百四十三の第二項にあることを、狀況は相違するが、適用すべきものであると思ふ。

以上の外荒神山に對し騎兵又は步兵の一部を以て攻擊せしめたものが多數あつたが、其著意に於ては同意であるが、稍ゝ過望とも思へるし、又明朝の戰鬪の爲價値が少いので、成否を考慮せず騎兵部隊に任せることにした方が適當である。併し此案者の企圖心の旺盛なることは賞すべきである。

以上研究するところに依り、師團の全力又は主力を以て敵陣地の全部又は大部に向つて夜間攻擊を行ふは適當でない。卽ち明拂曉新銳の敵と決戰を交ふるに有利なる態勢を取り得る如く本夜敵陣地中の要點のみを奪取する案を、適當と認める。之が爲敵陣地の要點中先づ第一に指を屈すべきは、言ふ迄もなく常安寺附近の高地である。敵

情判斷の部に於ても述べたる如く、此高地は敵の爲重要なるのみならず我の爲にも亦重要である。此高地の本夜我が有に歸すると否とが明朝の戰鬪に大なる關係があることは、地形を一瞥しても直に首肯せらるるところである。殊に本日我が砲兵の活動の不十分なりしは、良好なる觀測所を有せなかつたのに原因することが大であるので、明日の爲是非共此有利なる觀測所を我が有に歸するやうにせねばならぬ。敵も亦有ゆる手段を講じて該高地の保持に勉むることと思はるるが、しかく重要なる地點であるだけそれだけ奪取したい。△203.6高地は、常安寺高地と密接なる關係を有するを以て、同時に併せ攻撃するを有利とする。此等の高地が我が有に歸したなら、松尾寺附近の敵は自然に撤退するの已むなきに至るであらう。下之郷、尼子附近を奪取せんとするは少數の案者であるが、之は全般の關係上適當でない。

茲に更に一言したいのは、夜間攻撃の實施の困難であることや攻撃直後の軍隊の狀態等を全く考慮に入れず、攻撃後直に兵力轉用等と極めてあつさり考へて居る者の多いことである。前記の戰例に照し十分腦裏に印象せられんことを望む。

夜間の攻撃目標に於て「其縱深ハ通常晝間ニ比シ限定セラルルモノトス」とは戰鬪綱要第百四十七の示すところである。然るに松尾寺北側高地及△469.0高地を攻撃せる部隊を左に方向變換せしめながら西明寺高地北端の線迄進出せしめたものがあるけれども、此山地内を、而も夜間未知の土地に於て、敵の抵抗に會ひながら、進出しようとするは過望である。又敵陣地奪取後甚しきは犬上川の線に進出して攻撃準備を整へよとするが如きは、寧ろ無謀と謂ふべきではなからうか。勿論狀況に依つては斯ることの全然出來ぬといふこともあるまいが、苟くも我が師團に對して本日巧なる戰鬪をした敵が果して之を許すや否やである。併し此夜間攻撃は、普通行ふものと少しく其性質を異にするところがあり、敵の第一線のみを奪取して滿足すべきではない、出來得る限り明朝迄地歩を擴張すべきである。攻撃目標を以上の如く考察し、又明朝出來得る限り强大なる兵力を以て敵と決戰を行はんが爲には、本夜の攻撃に使用する兵力

は之を最小限にせねばならぬ。併し過度に減少することは却て攻撃失敗の原因となるので、攻撃目標並其強度等を顧慮して、之に適する兵力を指向すべきである。之が爲豊間の指揮關係を變更し或は新に必要なる部隊を配屬せねばならぬ。

四、夜間攻撃の方式に就て

夜間攻撃を奇襲的に實施すべきか或は强襲的に實施すべきかに就ては、敵情特に其素質、裝備、陣地設備、守兵の狀態、天候、氣象、地形、明暗の度等を顧慮して決定すべきであるが、奏功の要訣は周到なる準備の下に不意に敵に肉薄し白兵を揮ひ一擧に決戰を求むるに在る。即ち奇襲に依るを本旨とする。殊に本研究の如く敵陣地の要點のみを奪取せんとし、且此間に於て主力の移動集結を行はんとするが如き場合に於ては益、然りとする。諸官の案も亦大部分奇襲を以てせんとするもので、同意するところである。然し之を過去の戰史に徵するに、眞に奇襲を以て成功したる例は比較的乏しく、奇襲變じて强襲となり、或は初より强襲を企圖せるものが多い。特に近時火器及照明機關の發達に伴ひ益、此傾向を助長せらるべきは疑ふの餘地がない。故に本狀況に於ては、奇襲に依るを本旨とするが、要すれば强襲に移り得る如く豫め準備するを要する。

若干案者の如く初から火器の威力を以て敵陣地を强襲せんとするは、敵の注意を此方面に牽制し、却て他部隊の動作を容易ならしむるの利益はあるかも知れぬが、我が企圖を暴露して、夜間攻撃其物の成功の公算は少い。故に此法は本夜の狀況に不適當である。

五、夜間攻撃（突入）時刻の選定に就て

突入の時刻に就て諸官の案は種々に別れて居る。即ち薄暮に乘じて行はんとするもの、日沒直後に於て行はんとするもの、丸時又は午時を期して行はんとするもの、及

正子又は其以後に於て行はんとするもの等である。

日沒直後又は薄暮に乘じて突入せんとするは、成るべく速に敵陣地を奪取して明朝の攻撃を準備する爲の時間の餘裕を得んとするに在る。併し過早に敵陣地を奪取するときは敵に恢復攻撃の時間を與へ、之に應ずる爲逐次後方部隊を戰渦の中に投入し、遂に收集すべからざるに至る虞がある。攻撃に用ふる兵力の愈〻大なるに從ひ益〻然りである。午後九時又は十時とする案は、準備時間に多少の利益はあるけれども、其害は前案と大差がない。既に研究せるところに依り疑義はないと思ふが、若狀況已むを得ず本夜全力又は主力を以て夜間攻撃を實施せねばならぬと假定すれば、突入時刻は早い方がよいことは言ふ迄もない。

正子又は其以後に於て突入せんとするものは、多くは一部を以てする夜襲案者である。之は準備時間の餘裕を得る外我が企圖を秘匿し隱密に行動し敵の警戒の虛に乘じて突入し得る利益を有する。然し拂曉に近く突入せんとするものは、態勢を整理して爾後の用に應ずる爲の時間の餘裕を有せぬ。殊に一旦失敗して再擧の已むなきに至つたとき益〻然りである。故に準備も十分に出來、我が企圖を祕し、且敵の警戒の虛に乘じて突入し、若失敗せる際に於ても再擧の時間を有し、明朝迄に地歩を擴張し且態勢整理の時間の餘裕を有する如く、概ね正子前後に突入する案に同意する。

地區毎に突入時刻を異にせる案者があつたが、之は同意し難い。何となれば一方面に夜襲を受けたら、他の方面皆警戒を嚴にして準備を整へるので、遲れて攻撃する部隊は多くは失敗するからである。

尙突入時刻の選定に就ては、戰鬪綱要第百四十五を參照せられんことを希望する。

六、砲兵の用法に就て

砲兵は、本夜狀況に依り歩兵の夜間攻撃に協力し、又明朝師團主力の戰鬪を有利に導く爲、晝間より豫め準備するところに從ひ夜間陣地を變換すべきである。是晝間敵

の爲苦しめられたるに拘はらず依然現陣地より夜間攻撃或は明朝の戰鬪に協力せんとするは、再び晝間の不利を繰返すのみなるが故である。而して夜間攻撃に協力するは一部の砲兵にて可なるべく、主力は之を主決戰方面に集め、極力明朝の攻撃を準備すべきである。

夜間攻撃に於ける砲兵の用法に就ては戰鬪綱要第百四十四及第百五十一に示せる如くである。本狀況に於ても攻撃は勉めて歩兵のみにて行ひ、砲兵は歩兵の敵陣地奪取後敵後方部隊の來援を阻止する爲か或は我が攻撃を妨害すべしと豫想する敵を制壓するに止むるを可とする。而して攻撃奏功せし地點を確保する爲か又は火力を以て敵を制壓して突入せんとするが如き場合に於ては、動もすれば砲兵の夜間射撃は友軍に危害を及す虞あるを以て、高級指揮官は其任務を明示し、且十分なる準備を遂げしめ、又歩、砲兵の協調を綿密周到ならしむるを要する。

七、明朝の爲の攻撃準備に就て

常安寺及其東南方高地攻略後明朝主力を我が右翼方面に保持して敵を西北方に向ひ壓迫せんとする案は、敵陣地殊に常安寺高地の奪取を前提とするもので、若此夜間攻撃にして不成功に終らんか、師團は全く豫期に反する戰鬪をせねばならぬこととなるであらう。又右の高地奪取後重點を下之郷方面に指向するものは、中山道方面よりする敵の增援部隊に左側面を衝かれる虞がある。故に以上二案共何れも適當なる案と認むることが出來ぬ。然らば如何にすべきか。敵情判斷の項に於て研究せる如く、中山道方面又は尼子方面より出撃すべしと思はるる敵の後續隊及之と行動を共にすべき敵を一擧に撃滅する爲、本夜出來得る限りの兵力を中山道方面に集結して攻撃準備を整ふべきである。而して此兵力集結は常安寺高地に對する夜間攻撃の成否に拘はらず實施すべきである。兵力移動竝集結の時機は、我が企圖を暴露せざる爲過早なるべからず

ざると共に、又拂曉時の展開を顧慮し之が機に遲れざる如くすることが必要である。從つて集結完了の時刻は午前一、二時の頃を可とするであらう。其地點は何れの方面にも機動の餘地ある如く愛知川町北方地區を適當とする。明拂曉時に於ける展開線竝重點を指向すべき方向は、兵力集結間に於て得たる最新の狀況に基き決定して可なりであるが、腹案としては概定し置くべきであらう。狀況豫想に反せざる限り其線は現在第二聯隊及騎兵支援歩兵大隊の占領せる線とし、重點は中山道西側地區とするが適當である。兵力移動を敵に察知せられざる爲警戒及掩護の處置を講ずることが必要である。

八、騎兵の用法に就て

騎兵隊は極力前面の敵を攻撃し、殊に荒神山は本夜之を奪取する如く勉めしめるを可とするけれども、騎兵に夜襲を以て同高地を奪取せしめることに就ては、多くの望をかくることは出來ない。又之が爲に支援歩兵大隊を使用せる者があるが、晝間中山道に近く戰鬪して居る此支援隊を夜間荒神山に向はしめるのも策の得たるものである まい。寧ろ此大隊は明朝中山道方面よりする我が攻撃部隊の第一線として使用する方が適當である。卽ち主決戰方面には出來得る限りの兵力を集めることが肝要である。又騎兵隊は我が主力の夜間移動の動作を祕掩し且展開を掩護せしむべきである。之が爲一部を以て移動部隊と交代し或は敵の注意を牽制する爲陽動を行ふを必要とする。併し夜間の陽動は却て我が企圖を暴露するの虞があるので、特に愼重なる考慮と綿密なる準備とを緊要とするは、戰鬪綱要第百五十二の示すところである。

九、迂回隊に就て

一部隊を東方山地方面に迂回せしめたる著意は同意するところであるが、之が爲必要以上に大なるものを以てするは同意し難いところである。蓋し迂回隊は其行動を敵

に察知せられず巧に所望の地點に進出することが出來たら奇功を奏するものである
が、行動途中一たび敵に發見せられんか其價値の大半を失するのみならず、山地に於
ては敵の一部の爲阻止せられ遂に全く用をなさざるに至ることがあるからである。明
朝は一兵でも多く主決戰場に使用したいので、迂回隊を派遣をするならば眞に必要の
最小限に止めたい。從つて一大隊又は其以上の兵力を派遣せるものには同意し難い。

十、工兵の用法に就て

工兵は有力なる一部を夜間攻撃部隊に配屬することが必要である。戰闘綱要第百四
十四に「夜間ノ攻撃ハ主トシテ歩兵ノ任スルトコロナリ」とあるが、此中には當然工
兵の一部が附せられて居るべきものと解釋するが至當である。敵陣地の強度は夜に入
ると共に增大し、障碍物等も新に設置せらるるのであるから、歩兵の突撃に際し此等
障碍を排除し、或は奪取せる陣地を確保する爲諸種の作業に任じ、又は交通路の設備
に任ずる等、工兵は重要なる幾多の仕事がある。併し主力は依然師團長直轄使用し砲
兵の援助其他機動的の企圖に供するが適當である。

原　案

別紙要圖（附圖第十）ノ如シ

所用地圖　二十萬分一　名古屋、山田、京都及大阪、和歌山、
五萬分一　吉野山、山上ヶ嶽、五條、高野山、姫路

一、京阪地方ヲ領有スヘキ任務ヲ有スル西軍第一軍（三師團基幹）ハ和歌浦及湯淺港ニ上陸ノ後大阪平地ニ進出シ駿遠地方ヨリ前進セシ兵力略、同等ノ敵ト八月一日以來赤坂城跡（富田林町東南方四粁）東南側地區ヨリ錦郡、高藏寺附近ヲ經テ鳳町（堺市南方四粁）附近ニ亙ル線ニ於テ戰鬪中ニシテ勝敗決セス戰鬪漸ク交綏ス

第一軍ニ策應スヘキ獨立第五師團ハ京都方向ヨリ前進セシ初、劣勢ノ敵ト加古川河畔ニ輕戰ヲ交ヘ八月五日朝追擊ニ移レリ

二、第一軍ニ屬スル第一師團ハ紀ノ川河谷ヲ東進シ五日正午戰列部隊ヲ以テ橋本町、九度山町、妙寺町間ノ地區（主力）及高野山附近ニ、輜重ヲ以テ名手市場、岩出町間ノ地區ニ到著シ大休止中ナリ

同時稍〻前師團長ハ左記諸情報ヲ知得スルト共ニ軍司令官ヨリ第一師團ハ大和支隊（5i(-III)、1/2K、I/2A、½1/2P、DTL ノ一部）ヲ併セ指揮シ吉野川河谷ニ向ヒ行動スル敵ニ對シ軍ノ作戰ヲ容易ナラシメ併セテ第六師團ノ橋本町、名手市場附近進出ヲ掩護スヘキ任務ヲ受領シ五條町附近ニ於テ防禦スルニ決ス

1　約一師團ノ敵ハ奈良方向ヨリ南下シ午前十一時各其先頭柳本及田原本町ヲ通過南進セリ

別ニ上野町方向ヨリ名張町ヲ經テ前進セシ敵ハ歩兵八、九大隊、砲三十門內外ナルモノノ如ク午前十時三十分萩原ニ進入シ續イテ松山町方向ニ前進セリ又同時頃敵ノ一縱隊ハ伊勢街道上高見峠ヲ西進中ナルヲ

認メシモ其兵力詳ナラス

2 大和支隊ハ當初同方面ノ敵ニ對シ有利ノ戰鬪ヲ見タルモ敵兵ノ增加ニ伴ヒ後退ノ已ムナキニ至リ目下主力ヲ以テ土佐、御所町南側高地ノ線、一部ヲ以テ上市町東北側地區ニ於テ敵ヲ支持シツツアリ

3 第六師團ハ天候妨ナケレハ七日午後ヨリ八日夕刻ニ亙リ和歌山市附近ニ上陸スル豫定ナリ

4 五萬分一圖上片點線路ハ野砲ノ通過ニ支障ナク特ニ險峻ナル地部ヲ除ケハ重砲ノ通過モ許ス部分多シ

金剛山以北大和、河內國境線ノ左右各約二粁ノ地帶ハ密林、斷絶部相錯綜シ又同地帶ヲ橫斷スル諸道路ハ悉ク荒廢シ共ニ部隊ノ行動至難ナリ

右ノ外高地上ノ森林ハ大部分矮小疎散ナリ

5 吉野川ハ五條町東側(三(四))粁附近ヨリ九度山町間ニ於テ諸所徒涉場アリ

三、第一師團(駄馬)ヘ大和支隊ノ外左記部隊ヲ配屬セラレアリ

十五榴一大隊
飛行一中隊(偵察)
無線電信一小隊 (概ネ師團戰列部隊ノ位置ニ在リ但架橋
野戰電信一中隊 材料中隊ハ輜重ト行動ヲ共ニシアリ
架橋材料一中隊

備考 大休止地ニ於ケル諸隊ノ位置ハ隨意トス

問題

五條町附近第一師團防禦ノ爲地形判斷要圖

但部署ヲ示スニハ部隊號ヲ附スルヲ要ス

總評竝說明

時方に三伏酷暑の候而も山地防禦といふあまり氣乘りのせぬ研究問題であるに拘らず、熱心なる多數の答解が集まつたのは、出題者の誠に欣快とするところである。

諸君の案は頗る多種多様であつて、此等に對し一々研究するは、却て主要なる著眼を輕視し、理解を困難ならしめる虞あるを以て、主として其代表的考案に就て研究を進め、他は各自の答解と原案とを比較研究せられんことを希望する。

一、決戰か持久か

師團が決戰防禦をするか持久の策に出づるかは、五日正午師團長が防禦の決心をする時に極めるべきであつたが、研究の都合上態と想定には記述しなかつたことを斷つて置く。諸君の案を見るに大體次の様である。

第一案　決戰を企圖するもの（約四割）

第二案　持久防禦を爲すもの（約四割五分）

第三案　兩者不明なるもの（約一割五分）

此ことを研究するに方り次の事項を考察して見よう。

1　彼我戰況一般の觀察

彼我兩軍主力たる大阪平地の會戰は、兵力、態勢概ね五分五分なると地形の關係とに依り、遽に著しい變化があらうとは判斷し得ない。山陽道方面に作戰する我が獨立第五師團は、爾後大阪附近に進出するには相當の日子を要するが、兎に角今朝より追擊に移つたのであるから、時日の經過と共に我は有利に戰況を進め得ると言へる。丁度此時敵の二箇師團が軍主力の右側に現出したのである。卽ち敵は山陽道方面の不利なる影響を直接感受しない前に速に成功しようとして努力するであらう。

2 任務の解釋及將來第六師團の使用方面の觀察

師團の任務は一は軍の作戰を容易ならしめ他は友軍の進出を掩護するに在る。後者は本來消極的(實施方法は別)性質を有するが、前者は何とでも解釋出來る。卽ち進んで敵を攻擊するも可、止つて防禦し而も決戰の意志を常に離さないのも其一つ、絕對持久に依り二倍の敵を支持し以て軍主力方面に惡影響を及さしめないのも亦其一つである。そこで如何にするやは、所謂當時の狀況に依つて決定すべきであるが、出來る限り積極的に之を解決することの必要であるのは勿論である。

第六師團の使用方面に就ては、軍司令官から何等示されて居ない。玆に第一師團長として却つて一層の重い責任を感ずるところがあるではなからうか。師團は第六師團の增加を當てに出來ぬ、自力で終始敵と戰はねばならぬのである。それよりも尙大切な考は、軍司令官をして、第六師團を、利さめ少き大阪平地若は吉野川河谷の消極的增加に使用せしめることなく、第一師團の決戰に依り收め得たる成果を速に擴大する如く積極的に奈良平地方面に使用せしめ、以て東方に退路を有する敵主力に對し三方面よりする大規模の外線作戰を行ひ、一擧に敵を擊滅するを以て上策とすること是である。

指揮官たる者は其上級指揮官をして全般の戰鬪指導を有利且容易ならしむる如く努力せねばならぬ、言は簡單であるが、吾人の常に念頭より離してはならぬ事柄である。任務に牴觸せぬからとて消極に陷るは適當でない。軍司令官が、軍の側背掩護といふことを命ぜずして、「軍ノ作戰ヲ容易ナラシムヘシ」と命令せし、其心中を深く忖度せねばならぬ。

3 地形の觀察

五條附近は決戰でも持久でも陣地の取り方次第で何れでも出來る地形である。此ことに關しては後に陣地線の部で述べる。

之を要するに、防禦の爲地形を判斷するに決戰か持久かの方針を明記しない第三案

は、悪く言へば所謂骨拔きであつて、之では部下が命令を貰うても適切なる活動は出來ぬ。斯ることは獨斷に委するとて棄てておくべきものではない。

第二案は前述の如く師團の任務遂行に關し命令に違犯するところは一つもないが、爲し得る限り任務を積極的に解決するといふ點に於て缺くるところがある。又三日も四日も持久し得るや否や、敵は必ずや猛烈に攻撃し來り自然に我は決戰を强ひられることになるであらう。第一案は、敵は僅に二倍の優勢に過ぎず、地形の利用、火力の發揚其他に依り、遮二無二來る敵に對しては勝算あるのみならず、軍全般の將來を考へるときは任務に對し最も忠實なりとするもので、同意するところである。勝算云々に關しては追々述べる。

二、師團當面の敵情判斷

敵は攻撃を急いで行ふであらうといふ考は、前に述べたところで誰しも異存はあるまい。此ことと地形とを併せ見るときは、諸官の殆んど全部が言はるるやうに、敵の主力は吉野川右岸に行動するものと判斷するを至當とする。實際彼我とも吉野川左岸に優勢を占め得たとしても、右岸に於けるものに比し其價値はずつと少い。諸官の内敵の主力が川の南側地區に來るものと判斷せしは二人に過ぎぬ。之も何か或る事を深く思ひ過ぎた誤と思ふ。

次に敵の攻撃方法として、吉野川の兩岸地區を概ね同時に攻撃せんとするものと、先づ左岸地區に於て相當程度の成功を收めたる機を利用し一氣に右岸地區に決戰せんとするものとの、二樣の考察がある。此兩者は防者の遣り方にも依ることであるが、後者は時間を要し狀況に適しないのと、兵力を分離するの不利があるから、前者に依る公算大なりと謂ひ得る。

三、地形の觀察

先づ軍との中間地區には想定記述の如く金剛山一帶の障碍地帶を左に控へ、右方には黒瀧川左岸の扇形山、武士ヶ峯、乘鞍嶽、七霞山外幾多の高山重疊し、師團の爲自然に兩翼を依托せしめ、其中間には吉野川の縱斷するあり、而も同河は、五條町附近及其以西我が領有地區内に於ては交通比較的容易なるに反し、敵の行動する範圍内に於ては通過至難であるから、地形一般の關係は我に利點多きを覺える。而して今一つ著眼すべきは、城山(下市町南方七粁)、高嶽、栃原嶽の線以西丹生川以東の地區は、山地として稀に見る交通便利な處で、大小幾多の道路が縱橫に走り、部隊の移動、連繫等容易なる地區なること是である。

五條町東北側地區は低いから之を主陣地帶とするならば兩翼の關係を適當にして之を强くする必要がある。

前項の敵情判斷と今の地形一般の觀察とに基き、決戰防禦の爲如何に陣地線及部署を決定するかと言ふことになる。

四、陣地線及兵力部署

1、陣地線に就て

陣地線の取り方に就て諸君の考案中主要なるものを掲げる。而して各案とも金剛山に左翼を托することは一致してゐる。

第一案　上市町、高取山、土佐、名柄の線

第二案　高取山、戸毛、名柄の線

第三案　下市町、戸毛南側高地、名柄の線

第四案　十日市、東阿田(下市町西方三粁)、重坂峠、西佐味の線

第五案　銀峯山若は生子(五條南方四粁)より不動堂(五條東方四粁)、重坂峠、水野西方地區に亙る線

第六案　櫃ヶ嶽、高嶽、栃原嶽、五條東北側地區、△937.8の線

第七案　靈安寺(五條南側)東南方高地若は神野より五條町、金剛山に亙る線

第八案　防城峯、△443.9高地、山原(五條西方二粁)、大澤寺の線

第九案　七霞山、戀野(五條西南四粁)、行者杉の線

第十案　高野山、橋本、金剛山の線

卽ち左翼は皆金剛山の險に托してゐるが、中央及右翼方面は百人百色の感がある。決戰か持久か其他防禦の遣り方、敵情判斷、地形觀察に因つて、斯く多種多樣となつたのであらう。

第一、第二案は我が大和支隊の線若は其附近であつて、そこまで出得るや否やは疑問と謂ふべく、又縱ひ進出し得たとしても遭遇戰を强ひられるであらう。尙又敵は近く後方に平地を控へてゐるから、兵力使用の自由を得ることとなる。

第三案も時間が不足で準備に缺けるところがあるであらう。殊に又此案中持久するものがあるが適當でない、下市町附近が破れ易く直に背後に危險を感ずるからである。

第四案、第五案は兩翼を後退して敵の主攻を受け易き方面を突出してゐるので不可である。卽ち重坂峠方面は決して堅固とは謂へない。

第八案者は割合に多い。而して其大部分は持久であつて、相當の理由はあると思ふ。併し吉野川右岸地區は弱い嫌があり、陣地前大部分の交通便利な處を敵に與へることになる。又第六師團を此方面に使用するとしたら、後退に失し地域が無い。

第九案殊に第十案は、何の必要あつて斯く右翼方面を後退したのか判斷に苦しむ。之では吉野川河谷よりする積極的企圖は永久に出來ない樣に見える。又左翼の後退に從ひ軍主力方面に波及するところがないでもない。

第七案は決戰とも持久ともどつちつかずである。卽ち持久の爲には右翼が敵の瞰制を受けて弱く此方面より破れる虞があり、且決戰の爲には地域に乏しい嫌がある。

第六案は決して理想的であるとは謂へぬが、防禦の目的に照し配備を適切にし且火力配置を適當にすれば、師團長の企圖する決戰防禦を爲すに適良の陣地と思ふ。此陣

地線は、持久正面たる吉野川左岸に於て、黒瀧川左岸の高地帶及城山、高嶽、栃原嶽等の高山地帶なるを以て地形上堅固であつて、優勢の敵を支へ得べく、且十日市以北の交通便利なる地區を後方に控へてゐるから、少數兵力を以てしても兵力の融通性がある。吉野川の徒渉能否の關係も亦我を利し敵を不利ならしめ得ることとなる。

敵の主攻を受けさうである五條町東北側地區を後退し、久留野西北方高地及下市町西側地區を張出すことが、此際重要なる著眼でなければならぬ。特に下市町西方地區を堅固ならしめるときは、敵は凹角内に入るの不利を醫せんが爲には勢ひ遙に上流地區より吉野川左岸地區に相當な兵力を支分せねばならぬ（右岸よりする攻撃は吉野川の爲不能である）。優勢な敵に對し勝たんが爲、有力なる敵を連繫困難なる吉野川左岸地區に牽制することが特に肝要である。此ことに就いては第五項に就ても述べる。

元來白紙的に言へば防禦陣地一般の形は敵の進路に直交せる凸弧形をなすのが自然であらう。然し之に地形、防者の企圖、友軍關係等が加味されて種々なる形を呈するのである。卽ち師團の防禦は山地防禦であつて、特種の企圖を有し地形を十分利用せんが爲には堅固にして而も必要な處はうんと張出すことが必要であつて、結局全般の形は不規則であつても陣地が强ければ良いのである。

2　兵力部署に就て

「交通便利ナルトキハ各地區ニ備フヘキ兵力ヲ節約シ總豫備隊ノ兵力ヲ大ニシ云々」とは戰鬪綱要第三百八に示されてある。然し此際は彼我の主決戰場は略ゝ決定し得べく、且地形其ものも堅固でないから、吉野川右岸地區には相當有力な部隊を用ふる必要がある。大なる機動を許さず勢ひ火力發揚を主とする本防禦に於て特に然りである。

吉野川左岸に用ふべき兵力に就て、諸君の案中には、全然之なきもの、歩兵一中隊のもの、一大隊のもの、二三大隊のもの、一旅團のもの、七大隊半のもの等あるが、之も各自防禦の主義方針、敵情判斷、我が企圖等より來た結果であるから、多過ぎる

とか少な過ぎるとか謂ひ得るものではない。之に就ては原案を見て貰ふが、先づ歩兵三大隊位が適當であらう。併し成るべく少いのを希望する。其他各地區には獨立して戰鬪し得る編組を必要とする。右翼方面は特に然りである。地區の區分も亦種々雜多であるが、一指揮官に過大の正面を擔任せしめたり、吉野川兩岸地區を一地區としたる如きは、常識から云うてもあまり感心出來ぬ。

騎兵の用法に就ては、陣地一部の守備竝翼側の警戒等に用ふるのと、總豫備として控置するもの等あるが、敵を擊退して直に自由な追擊行動を許す地形ならば後者を可とするが、此際は之を望み得ないのと、陣地最右翼方面は抵抗力を附與せる騎兵の防禦に適し、且天ノ川河谷の警戒等の爲、第一線右翼方面を擔任せしめるを適當とする。

五、特に著意すべき件

歩兵十四大隊、砲兵五大隊を以て二十六、七大隊と思はれる敵に對し決戰防禦を爲すには、口でばかり強さうなことを言つて居てはいかぬ。即ち二倍に垂んとする敵に勝たんが爲には次の注意を必要とする。

1　敵の兵力の成るべく多くを吉野川左岸地區に牽制することは本防禦に於て絶對必要である。

元來決戰防禦は地形を利用する戰法である。即ち此場合、下市町西方高地の陣地をうんと張出すことの必要は前に述べたところであるが、吉野川の橋梁を破壞して敵後方の連絡を不可能ならしめ、名實共に兵力を分離せしめることも有效である。其他吉野川右岸部隊は、止つて敵を待つことなく、相當の兵力をして當初攻勢的に前進せしめ敵の誘引、企圖察知、持久等の諸目的を達することが必要である。

2　火力の發揚

是亦優勢な敵を破る爲重要な事項であつて、多く述べる必要はない。殊に五條町東北地區に對しては歩、砲兵の十分な集中火を準備する必要がある。

3　機動の活用

火力を主とする防禦と反對のやうであるが、實戰に於ては理窟以外に乘ずべき機會が幾らもある。縱ひ正面限定せるときと雖、好機を看破して敵の不意に乘じ奇襲することは大に勉めねばならぬ。山地なればこそ特に然りである。此ことは戰鬪綱要第三百八に新に示されたことである。縱ひ持久のときでも然りである。

六、結　言

先づ容解に關する注意を述べると、諸君の作業中持久を爲すもので次の樣なことを判決に書いてあるものがある。

若戰鬪有利に進展するに於ては攻勢を取る

敵兵過失を犯さば……

後續部隊（若は第六師團）の來著を待ちて……

軍主力方面の戰況有利に進展せば……

如何なる防禦を爲すかしつかり腹をきめねばならぬ師團長としては、あまり感心した話ではない。殊に第三の如き、後續部隊ありとても、第六師團を東方に使用すると示されてはゐないではないか。其他大和支隊をして後退後第一線を擔任せしめる案もあるが、その適當でないことは明であらう。

本問題に對する答解の講評竝說明は之で止めるが、まだ〳〵山地防禦に就ては盡してゐない。また講評も前屢〻斷つた如く其人の著想に基く理由が明瞭でないから、直に可否を判定し得ない。深入りしても價値がないことになる。唯地形判斷と云へば線と兵力部署との研究なりと早合點せぬことが必要であつて、答解には一本の線で現されても其因つて來るところは頗る廣況であつて、いろ〳〵な條項を考へ之を地形に當てはめて以て最善なりとする方策を決るのであつて、眞に地形上の見地よりする狀況判斷でなければならぬと謂ひたいのである。

原案

別紙要圖（附圖第十一）ノ通リ

第十想定 〔二五四〕

所要地圖 二十萬分一 京都及大阪、和歌山
五萬分一 大阪東南部、同西南部、五條、岸和田

一、和歌山沿岸ニ上陸セル敵ヲ撃攘スヘキ任務ヲ有スル北軍第一師團（山砲兵第一聯隊第一大隊、同聯隊段列一部、野戰高射砲二隊、偵察飛行一中隊、無線電信一小隊ヲ配屬セラル）ハ舞鶴地方ヨリ京都ヲ經テ南下シ九月一日午後一時頃各縱隊ノ先頭ヲ以テ大和川北岸ノ線ニ達セリ

二、此時迄ニ師團長ハ昨三十一日午後紀伊見峠ヲ通過セル歩兵約十大隊、砲三十數門ヲ基幹トスル敵カ本朝來大和川左岸道明寺附近ニ陣地占領中ナルヲ知リ速ニ之ヲ攻撃スル目的ヲ以テ右縱隊ヲシテ直ニ堺北端附近ノ敵ニ對シ攻撃ヲ開始セシメ爾餘ノ諸隊ヲ平野鄉町及八尾町ノ線ニ開進ノ

配置ニ就カシメ午後三時頃迄ニ概ネ左記諸狀況ヲ知リ明拂曉敵ヲ攻撃スルニ決セリ

イ、午後三時頃迄ニ知得セル敵陣地ノ狀態及同時頃ニ於ケル師團ノ態勢

別紙要圖(附圖第十二)ノ如シ

ロ、諜報ニ依レハ新ニ歩兵三、四大隊、砲十數門ヲ搭載セル敵ノ一船團

ハ和歌山沿岸ニ向ヒ航行中ニシテ本夕頃ニハ同地ニ到著スヘシト云フ

ハ、師團ニ增加セラルヘキ歩兵第五聯隊ハ明二日夕迄ニハ到著スル筈

ニ、此附近一帶ノ河川、池沼ハ徒渉容易ニシテ水田ハ乾涸シアリ森林ハ矮小疎散ニシテ通視及射撃ヲ妨ケス又部落ハ多ク不燃性物料ヨリ成ル

問題

第一師團攻撃ニ關スル腹案要圖

總評

十月上旬迄に受領したる答案は二百八十通に近く、諸官の熱烈なる意氣に接して愉快に堪へず、多大の興味を以て各自の作業を拜見してゐる。

本問題の主眼は、敵情判斷に關する一般の研究が往々淺薄なるものあるを痛感してゐるので、特に此點に就て諸官の反省を促し、研究を具體的ならしめたいと思つた點に在る。而して作業中此判斷に對する考慮は一般に不十分であつて、直に攻撃腹案の起案に著手せりと認めらるるものが多く、出題者が滿足する程度に此點を苦心研究してある作業は僅に數枚に過ぎない。從つて敵の指揮官にして卓越なる統帥者であつたならば明拂曉と共に師團は極めて不利なる戰況に陷るべく豫想される作業が、過半數である。

以下項を逐うて研究を進める。

一、敵情判斷に就て

問題の要圖を見て、大和川右岸の敵が何者であるかといふ點に就ては大多數の諸官は研究してあるが、堺市附近の敵に就て研究した作業は僅に數枚に過ぎないと見受けられる。此點重ねて諸官の反省を求める次第である。勿論一應は總ての諸君が觀察して居られるのであるが、「もつと深刻に、もつと具體的に、此等の敵部隊の目的及其將來の行動に就て、戰況の推移に伴うて、判斷せねばならぬ。」といふのである。

大和川右岸の敵は前進陣地のやうでもあり、本陣地のやうでもある。之を直に前進陣地と斷定するのは過早である。なるほど本陣地としては正面甚だ過廣となるのみならず、地形も左程堅固ではないが、相當な兵力を之に使用し更に前方には警戒陣地さへでも出してゐる點から觀れば、北軍の攻擊要領の如何に依つては、此儘頑張つて本陣地たらしむることも不可能ではない。蓋し敵の第一の企圖は、北軍にして萬一此陣地に對して相當の處置をすることなく漫然主力を以て左翼を包圍しようとするが如き場合には、直に起つて其右翼方面より我を大阪市に壓迫する如く出擊するに在る。增加隊の來著を待つまでもない。此際大和川右岸の陣地は出擊の據點となるものである。從つて敵は之を本陣地の右翼として保持したいのは萬々であるが、北軍が至當に行動すれば、先づ之が擊退を圖るに決つてゐるから、從つて多くの兵力を配置せねばならぬ。增加隊の來著前に獨力決戰の勇氣があれば無論之を敢てするであらう。實際其積りで之を堅固に保持する考でゐるのかも知れない。同時に、之は少しく過望だと諦めて、萬一北軍が過失を犯したら出擊しようと云ふ位の考で、相當有力な前進陣地を出してゐるのかも知れない。愼重な敵であつたら採用しさうな案である。そこで敵としては、此陣地を失へば、先づ第一の出擊企圖は挫折する譯であるが、それでも尙北軍が極端に其主力を西方に移動し左側背に向つて迂回しようとするが如き場合は、道明寺、藤井寺方面から其退路に迫る如く出擊することがないとも限らぬ。

道明寺方面數線に亘る陣地は、大和川右岸陣地と關聯して判斷せねばならぬこと勿論である。愼重なる敵であつたら、之を本陣地とし、第一の出擊企圖挫折の場合之に據つて右翼を保持し、左翼方面から攻勢を企圖するに至るであらうし、放膽なる敵であつたら、之を豫備陣地とし、大和川右岸陣地を擊退せられた場合之に據つて右翼を收拾し、更に第二の企圖即ち中央正面又は左翼方面から攻勢を指導するであらう。

堺市附近の敵は何者であらうか、無意味にこんな處に居る筈はない。而も砲兵まで持つてゐる。敵の左翼側は解放してあるから北軍の迂回、包圍を阻止するものであらうといふ判斷は直ぐつく。事實大多數の諸官は玆に著意されてある。然し之だけでは足りない、もつと考へて見ねばならぬ。そして「之が後退するに就ては、何れの方向に、何れの地線まで後退するであらうか。敵の師團長は此部隊に如何なる命令を與へてゐるであらうか。」といふところまで突込んで、考察して見ねばならぬ。之まで考察して置けば、明朝になつて意外な戰況に驚く氣遣なしといふ譯になる。蓋し敵の第一の出擊企圖は前述の通右翼方面より出て我を大阪市に壓迫するに在るが、第二の企圖は、爲し得れば、一部を現陣地に殘置し、主力を夜暗に移動して西高野街道方面より東北面して展開し、師團を生駒山系に壓迫する如く出擊するに在るであらう。北軍にして此點に著意せず、堺市附近の敵を急追して一部を深く西高野街道方向に迂回せしめることなく、明拂曉漫然敵陣地の正面に近く展開し、僅に豫備隊、騎兵隊及少數の迂回部隊を以て此方面に手當する程度の部署を以て臨まば、敵の此出擊企圖は確に成功するであらう。卽ち堺市附近の敵は單に迂回阻止の任務を有するに止らず、實に此第二の出擊企圖の據點として配置されたものと觀るべきである。從つて此敵の爾後の行動が問題である。海岸方面へ後退するものと判斷する案、西高野街道方向に後退するものと判斷する案等種々あるが、之は前述の觀察から聯想すれば明瞭である。極力逐次の抵抗を試み、成るべくは仁德帝陵附近又は中百舌鳥村西方地區に停止し、此處に明拂曉迄頑張つて、主力の轉用を掩護するかも

知れぬ。之が爲には更に兵力を增加されるかも知れぬ。右縱隊が譯なく之を遠くに驅逐し得る如く想像するのは誤である。縱ひ敵に主力轉用の放膽なる企圖なき場合に在りても、此敵は左側背掩護の爲爾後已むを得ざるも逐次東百舌鳥村附近に於て更に抵抗し、最後には大草村西方高地に據つて我が迂回を極力阻止するに努力するであらう。若海岸方面に後退せんか、我が迂回部隊は一部を之に殘し主力を以て西高野街道方面に深く侵入し得べく、又黒山村、平尾村方向に後退せんか、我が迂回部隊は更に其外翼より側背に迫り得るのであるから、何れも敵としては採らぬところであらう。斯く判斷し來れば、此部隊の後退方向には數線の豫備陣地を持つてゐるかも知れぬ。少くも最後の抵抗線には若干の工事があるであらう。

之と關聯して大草村西方高地と敵主陣地左翼との中間卽ち野田村附近、黒山村附近にも若干の工事があるものと覺悟せねばならぬ。又敵の主力轉用の場合を豫想せば、主陣地の左翼と中百舌鳥村との中間卽ち西村附近にも何等かの施設を覺悟すべきである。これだけの覺悟と豫想とを以て迂回せしむべきものは斷乎として迂回せしむるのである。判斷徒に入りて臆病になることは勿論禁物であるが、不用意に行動して敵に制せられはならぬ。

敵騎兵隊爾後の行動に就ても各種の判斷があるが、之は先づ本日中は堺部隊の退却及爾後の抵抗を極力援助し、明拂曉以後は敵主力出擊企圖の如何により近く主陣地の右翼方面又は左側背の掩護に任ずるであらう。而して爾後戰況に依り適時海岸方面に移動し增加隊の進出掩護に當るであらう。唯敵が全然出擊の企圖を捨て最初より增加隊の來著を待つ場合に於ては、騎兵隊も亦明拂曉以後當初より海岸方面に在りて直接增加隊の進出掩護に當ることとなるやも知れない。斯く判斷し來れば判決は自然に覺知せらるるであらう。

判決

敵は勉めて其右翼方面より師團を大阪市に壓迫する如く出擊せんとすべく此企圖挫

折せらるるに至らば其主力を西高野街道に轉用し師團を生駒山系に壓迫する如く出撃を試むべし

而して此第一、第二の企圖共に挫折せらるるに至らば火力を以て我を制壓したる後増加隊の來著を待ちて其左翼方面より攻勢に轉ずるなるべし

而して戰況之を許せば増加隊の來著後と雖第一、第二の企圖を試むることあるべし

二、攻撃方針に就て

敵情を以上の如く具體的に判斷し來れば、師團が採用すべき攻撃の方針は自然確乎たる基礎の上に樹立せらるるのであるが、順序として主要なる各案に就て論究して見る。

第一案　主力を以て敵の右翼を攻撃するもの

第二案　主力を堺市方面に移動し敵の左側背に向ひ攻撃するもの

第三案　主力を以て敵の中央正面を攻撃するもの

第四案　有力なる一部隊を以て敵の左側背を脅威せしめ主力を以て敵の左翼を包圍攻撃するもの

其内容に至つては千差萬別であるが、方針を大別すれば以上の如くなる様である。

第一案は「右翼は大して堅固でない様だし、殊に敵の増加隊來著後のことを顧慮せばあまり重點を西方に指向することは危險だ。」といふ様な判斷に基くやうであるが、本案は地形の觀察當を得ざる案である。此山地に而も數線に施設せる陣地に向つて力攻してゐては、到底増加隊の來著前に敵を撃退することは出來ないのみならず、増加隊來著後に於ては、漸次敵の爲道明寺、國分附近の窮屈なる谷地に壓迫せらるるに至るであらう。況んや敵にして其第二の出撃企圖を敢行せんか、師團主力は明拂曉直に悲慘なる態勢に陷るに至るであらう。

第二案は極めて放膽なる企圖で、敵の第一の出撃企圖に對しては甚だ危險であるが、

第二、第三の攻勢に對しては全く之を封殺し、一擧に勝を制し得るものである。唯此場合は明拂曉西高野街道方面に於て直に彼我主力の遭遇戰が惹起する場合を豫想せねばならぬが、此點に想到せられた作業者が二〇八名中僅に二、三氏に過ぎないのは遺憾である。其他の大部は單に漫然と敵の左側背に迂回し敵を陣地より撤退せしむる位の考の樣である。併しながら本案は敵の正面出擊に對抗し得る手段なきのみならず、師團主力は大阪灣を背にして、一步誤れば敵に其退路を遮斷せらるべく、而も敵は其左側背方面に逐次抵抗し得べき地形を有するに對し、我は何等托すべき地形なく、大和橋東方の高地を奪取し得たる場合に於ても、該高地の威力は藤井寺以西の地區に對しては到底及ばないのである。唯本案は敵の素質如何に依りては十分に成立すべく、國軍としては此種放膽なる企圖を斷行すべき場合屢〻あるべきを附言する。

第三案は大丈夫の案である。それだけ攻擊進捗は意の如く行くまい。負くることもあるまいが勝つことも難かしい、お互に增加隊の來著を待つて勝敗を決する案である。

國軍の戰法はこんなものではない。

第四案は、敵の第一の出擊企圖に對しても相當の處置を講じ、第二の企圖も之を封殺し、遂に現陣地に固著するの外なきに至らしめ、而も勉めて其外翼を包圍して、敵增加隊來著以前に極力攻擊の進捗を圖らうとするものである。素質同等の敵に對しては正に本案の外に採るべき途はないのである。唯其攻擊指導の腹案をして克く此方針に副ふ如くならしめねばならぬ。特に敵の右翼正面を攻擊すべき翼隊の行動及砲兵の運用はよほど考へねばならぬ。

三、敵の右翼方面に對する處置に就て

大和川右岸の敵は、以上の研究に依りて判斷せらるる如く、一刻も速に之を擊退する必要がある。寧ろ午後三時迄師團長が之に著手せざるは誤であると斷言してよい位である。主力砲兵を展開し有力なる一部の步兵を進めて速に之を驅逐すべきである。

殆ど過半數の諸官は夜襲を試みてゐる様だが、前進陣地といへば何でも夜襲といふ觀念は單純である、夜襲の弊害に想到せられたい。晝間堂々と遣れるものは遣るべし。距離の關係上彼我の砲兵戰を交ふることなく我が主力砲兵は敵の夫れに比し地形上有利なる射撃を敵に加へ得るから、速に攻撃を開始するがよい。若夫れ之に對して何等の壓力を加ふることなくして漫然明拂曉主攻を敵の左翼方面に指向せんとするに至つては、其危險なること更めて言ふまでもない。

敵の右側背に對し一部の迂回隊を使用された案が多い。主攻を此方面に指向する案に在りては一應理由もあるが、主攻を敵の左翼方面に指向しながら此迂回を試みるものが意外に多いのは、甚だ遺憾である。師團の兵力にはそんな餘裕はない筈だ。主攻を左翼に指向すれば正面は危險になるので、之に十分の手當を要する。そんな有り餘つた兵力があるなれば、正面を堅くするか或は右側支隊を有力にすべきである。本案は研究が眞劍でないと思ふ。師團は敵主力を富田林谷地に壓迫すれば足りる。葛城山系に敵を西方から壓迫すれば十分である。此迂回隊は何等の必要のないものである。尤も奉天會戰に倣つて敵の素質を同等ならざるものとして研究する場合は問題は別である。

四、敵の中央正面に對する處置に就て

主攻を敵の右翼に向くる場合には、少くも其豫備隊は最初西方よりする敵の攻勢を顧慮して位置せしむべきであるのに、之を最初より深く東方山系の中に投じた案がある。之は敵を無視した案と謂はねばならぬ。

主攻を敵の左翼又は左側背に向くる案にして、中央正面に僅に騎兵を殘し又は僅小の歩兵を殘置するだけのものがあるが、是亦敵を無視した案である。此正面に於ける敵主力の出撃に對しては、少くも歩兵三大隊に砲兵二大隊分の火力を用意し、尙豫備隊をも直に之に應じ得るの關係位置に在らしめねば、思切つて敵の左翼を攻撃し得な

い。克く此正面の廣さと地形とを考察せられたい。

五、敵の左側背に對する處置に就て

敵の左側背に對しては、本夕堺市附近の敵を急追する點に就ては異論ないが、爾後其追撃部隊たる右縦隊の用法は各種各別で、主力を師團主力方面に引揚ぐるもの、平尾村方面に迫らせるもの、海岸方面に遠く派遣して敵増加隊の進出を妨害せしめるもの、西高野街道方向より深く敵の左側背に脅威を加ふるもの等が、其代表案である。

右縦隊の主力又は半部を師團主力方面に引揚ぐる案は、攻撃重點の兵力を勉めて増大するの意味に於て、慥かに一理あるも、此方面に關する敵情判斷が樂觀に過ぎる嫌あるのみならず、之では敵陣地の左側背に強壓を加へて攻撃進捗を迅速ならしめることは出來ない。穩當の樣ではあるが、眞劍な考案とは謂へない。

主力又は半部を敵の左翼に近く平尾村方向に進むる案は良い思著さであるが、惜むらくは技が小さい。飽つと深く遠く外翼に迫つた方が、敵としては應じにくいのである。

海岸方面に主力又は約半部を進める案は、敵増加隊の進出を騎兵隊だけで妨害せしめては不安であるといふ考だと思はれるが、敵増加隊の來著は、如何に敵に有利に見ても、明日午後に其先頭大隊が到達する位のもので、之に對して我が騎兵隊が適當に行動すれば、更に數時間を遲滯せしめ、遂に彼我増加隊の戰場到著を概ね同時頃とすることは不可能のことではあるまい。特に敵騎の行動を前述の如く判斷し得らるる狀況なるに於て益〻然りと謂へる。果して然らば、今から直ぐに一大隊以上の歩兵を本戰場より割くことは惜しいことになる。今は一兵も多く本戰に使用すべき時である。

以上の如く判斷せば、右縦隊は、それを其儘右側支隊として、當面の敵を急追し、其主力を以て極力西高野街道方向に迫り、敵主力の行動に依つて、或は其主力の轉用を阻止し、或は遠く左側背に强壓を加へて、師團主力の攻撃進捗を迅速ならしむる如

く、極めて活潑に行動せしむべきである。萬一當面の敵にして海岸方面又は平尾村方面に後退するに至らば、我に取つて甚だ有利であつて、一部を割いて之に當らしめ、主力は斷乎として西高野街道方面に侵入せねばならぬ。

六、騎兵隊の用法に就て

敵増加隊の到著が我が増加隊の夫れに比し著しく速なるときは、戰況に依りては、師團は不利なる事態に陷ることなしとしない。仍つて我が騎兵隊は、速に海岸方面を遠く和歌山方向に侵入し敵増加隊の進出を妨害せしむる必要がある。萬一敵騎の主力にして此侵入を阻止する如き場合に在りては、之に一中隊位の支援歩兵をも配屬せねばならない。

併しながら此侵入行動は今直に開始するには及ばない。本夕は右縱隊の追撃に協力し、極力當面の敵を遠く壓迫することに努力し、夜暗に入りて後海岸方面に移動するを要する。而して此騎兵は敵騎にして敵情判斷の部に於て述べたるが如く行動する場合に於ては、或は敵騎の爲に退路を阻止せられ腹背敵を受くるの苦境に陷ることなしとしない。騎兵隊長は、宜しく海岸方面一般の地形特に道路網の關係を研究し、不覺を取らない樣十分に用意を整へて、此重任を果すの覺悟が必要である。

七、砲兵隊の用法に就て

主力砲兵の任務は、本攻撃に於て左右兩方面の敵の出撃を阻止すること、右側支隊方面に於て彼我主力の遭遇戰を惹起する場合直に之に應じ得ること、敵左翼方面に對する主攻撃に十分に協力することは是である。從つて主力を概ね戰場の中央附近に配置し、各一部を其左右に配し、決戰が何れに生起するも直に其大部の砲火を之に指向し得る必要がある。而して此見地よりして勉めて統一指揮を圖らねばならぬが、右側支隊方面のみは其行動の性質上依然之を歩兵部隊に配屬し、山砲一中隊は明拂曉當初よ

り主攻部隊に之を配属して之を歩兵砲的に使用せしむるがよい。又此附近の地形上観測所に乏しさを以て、其準備に就ては成るべく速に著手せしむるの注意を要する。

八、結言

最後に重ねて一言する、「問題を貫つたら先づ十分に敵情を判断すべし。然る後徐ろに自己の對策を起案すべし。」と。

原案

方針

師團ハ卽時右縱隊ヲシテ堺市附近ノ敵ヲ追撃シ勉メテ西高野街道方面ヨリ敵ノ左側背ヲ脅威セシメ左縱隊ノ一部ヲシテ其正面大和川右岸ノ敵ヲ撃退セシメ明拂曉主力ヲ以テ敵ノ左翼ヲ攻撃シ之ヲ富田林谷地ニ壓迫殲滅セントス

指導要領

一、攻撃ノ重點ハ眞福寺附近トス

二、右側支隊(舊右縱隊タル歩兵二大隊、山砲兵二中隊、工兵一小隊)ヲシテ當面ノ敵ヲ急追シ勉メテ西高野街道方面ヨリ明拂曉迄ニ成ルヘク深ク敵ノ左側背ニ迫ラシメ爾後錦郡村西方高地方向ニ迂回シ敵ノ退路ヲ遮斷セシム

已ムヲ得サルモ西高野街道方面ヨリスル敵ノ出撃ヲ阻止セシム

三、騎兵隊ヲシテ先ツ右側支隊ノ追撃ニ協力セシメ爾後和歌山方向ニ前進シ敵增加隊ノ北進ヲ極力妨害セシム

三、左縱隊ヨリ歩兵三大隊、山砲兵一中隊ヲシテ其正面大和川右岸ノ敵ニ對シ卽時攻撃ヲ實施セシメ之ヲ驅逐セシム

此際野砲兵二大隊ヲ老原、八尾木、恩智ノ線ニ展開シテ此攻撃ニ協力セシメ爾餘

ノ諸隊ヲシテ敵ノ出撃ニ對シ準備セシム

四、薄暮ニ乘シ中央縱隊及左縱隊ノ各一部ヲシテ敵ノ警戒部隊ヲ驅逐シ敵主陣地ノ偵察及師團主力移動ノ掩護ニ任セシム但砲兵ノ陣地偵察及諸準備ノ爲卽時捜索據點ヲ阿保、小川ノ線ニ推進ス

五、日沒後直ニ左縱隊主力ヲ中央縱隊方面ニ移動シ爾後拂曉攻撃ノ爲概ネ左記ノ如ク展開ス

イ、右翼隊(歩兵五大隊、山砲兵一中隊、工兵一小隊)ヲシテ伊賀以西ノ敵ニ對シ野遠、新堂、丹下ノ線ニ展開セシム

ロ、左翼隊(歩兵三大隊)ヲシテ伊賀東北方陣地以東ノ敵ニ對シ一部ヲ以テ小山附近ニ、主力ヲ以テ大和川右岸大井橋附近ヨリ高井田附近ニ亙ル間ニ展開セシム

ハ、兩翼隊ノ戰鬪地境ハ六反西端、伊賀東端、喜志村西方標高一〇四高地ノ線トス

ニ、砲兵隊(野砲兵三大隊)ヲシテ主力ヲ以テ田井城、阿保、小川、大堀、三宅村ノ地區ニ、一部ヲ以テ本鄕及其東南地區ニ陣地ヲ占領シ左記ノ如ク火力ヲ準備セシム

飛行機三機ヲ配屬ス

砲兵制壓ノ爲　初期全火力　決戰時約一大隊分

右翼隊直協ノ爲　初期約二大隊分　決戰時全火力

左翼隊直協ノ爲　約一大隊分

出撃阻止ノ爲左記地區ニ各約二大隊分

金田、眞福寺間

向野、藤井寺間

藤井寺、道明寺間

ホ、豫備隊(歩兵二大隊、工兵隊主力)ハ先ッ東瓜破、川邊、長原附近ニ位置シ左

右兩方面ヨリスル敵ノ出撃ニ對シ準備セシメ爾後攻撃ノ進捗ニ伴ヒ逐次右翼隊ノ右側後ニ移動セシム

六、明拂曉砲兵隊ヲシテ效力射準備射撃約一時間、爾後主力砲兵制壓約三十分ヲ實施セシメタル後直ニ兩翼隊ノ攻撃前進ヲ命シ右翼隊ハ極力敵ノ左翼ヲ包圍シツツ富田林西方高地線ニ向ヒ進出セシメ左翼隊ハ敵ノ正面ヲ壓迫シテ喜志村西方高地ヨリ五字ヶ峯ニ亙ル線ニ進出セシメ右側支隊ト策應シテ敵主力ヲ富田林谷地ニ捕捉殲滅ス

此間敵若主力ヲ以テ左翼隊正面ニ出撃シ來ラハ直ニ主力砲兵ノ阻止射撃及豫備隊ノ使用ニ依リテ極力之ヲ阻止シ右側支隊及右翼隊ヲシテ依然敵主力ノ左側背ヲ攻撃セシム敵若夜暗ヲ利用シ主力ヲ西高野街道方面ニ轉用シ明拂曉我カ右翼方面ニ出撃シ來ラハ直ニ右側支隊、右翼隊及豫備隊ヲ以テ之ニ指向シ主力砲兵ノ協力ヲ得テ之ト決戰シ左翼隊ヲ以テ速ニ埴生村臺地ニ向ヒ攻撃前進セシメ敵主力ヲ狹山池附近ニ捕捉殲滅ス

七、增加隊ハ有ユル手段ヲ講シテ急行セシメ岸和田方向ヨリ北進スヘキ敵增加隊ヲ攻撃セシム萬一敵增加隊ニシテ長野町方向ニ進出スル場合ニ在リテハ速ニ主力ノ戰鬪ニ參加セシメ以テ包圍ノ成果ヲ擴大ス

所要地圖 二十萬分一 名古屋、岐阜、京都大阪
五萬分一 彦根東部、彦根西部、御在所山、近江八幡

一、大阪ヲ根據トセル西軍第一軍（三師團半ヲ基幹トス）ハ九月二十九日來三瀧川ノ線ニ於テ尾濃平地方向ヨリ前進セル略、同等ノ敵ト遭遇戰ヲ交ヘ爾後戰鬪交綏ノ狀態ニ在リ

二、西軍第一師團〔2i2i(-3i)ヲ欠キ1AA、2AA、1FMs（偵察）DLT（一小）等ヲ屬セラル〕ハ敦賀方向ノ敵ニ對シ軍ノ作戰ヲ容易ナラシムヘキ任務ヲ以テ京都方向ヨリ前進シ十月一日正午來概シテ愛知川ノ線ニ於テ約一師團ノ敵ト遭遇シ戰鬪我ニ有利ナラス特ニ其右翼隊方面ハ逐次戰線ヲ後退スルノ已ムナキニ至レリ

午後八時頃ニ於ケル彼我一般ノ態勢竝戰鬪經過ノ概要別紙要圖（附圖第十三）ノ如シ

三、午後九時迄ニ第一師團長ノ知得セル諸狀況左ノ如シ

1 師團當面ノ敵情大ナル變化ナシ

2 軍ハ明二日拂曉ヨリ前面ノ敵ニ對シ攻擊ヲ開始ス

3 信スヘキ情報ニ依レハ歩兵約一旅團ヲ基幹トセル諸兵連合ノ敵ハ本日早朝太田町（岐阜東方約二十五粁）ヲ發シ西進シ夕刻垂井、赤坂及其東方地區ニ宿營セルモノノ如ク爾後前進ノ模樣ナシ

4 師團ノ後續部隊タル歩兵第二旅團（3i 欠）及獨立山砲兵第一大隊（½RSt ヲ屬ス）ハ本一日正午大津ヲ發シ急行シ午後八時頃ヨリ逐次武佐附近ニ到著シ午後十時頃迄ニハ同地附近ニ集結ヲ完了スル筈

注意

平時調査其他ニ依リ日下判明シアル湖東平地ノ概況次ノ如シ

イ　戰場一帶ノ森林ハ矮小疎散ニシテ展望、射撃ヲ妨ケス

ロ　諸水流ハ概シテ諸兵ノ通過ヲ許ス

ハ　水田ハ乾涸シ諸兵ノ通過ニ支障ナシ

ニ　五萬分一地形圖上片點線路ハ野砲ノ通過容易ニシテ二條實線路ハ自動車ノ通過ヲ許ス

ホ　村落ハ滿洲ノモノニ同シ

ヘ　彼我兩軍ノ素質、編制及裝備ハ概シテ同等ナルモノノ如シ

ト　鐵道ハ彼我共ニ使用シ得サル狀況ニ在リ

チ　琵琶湖上ハ顧慮ヲ要セス

問題

十月一日午後九時ニ於ケル西軍第一師團長ノ決心及處置

總評竝說明

決心に就て

一、全般に關する考案

軍方面に於ては、明朝より更に前面の敵に對し攻撃を開始する筈であるが、數日來彼我共に勝利の曙光をも認め得ざりしことなれば、北伊勢平地の戰況が、明日果して決勝的の結果に到著し得るや否やは、今遽に逆睹し難いところである。而して該方面に於て軍は比較的地形の恩惠に浴して居るから、若干成功の望多きに似たりと判斷し得られる節がないでもないが、想定に現れた狀況のみに依つて、玆に斷定的判斷を下すことは、先づ不可能のことである。

之に反して湖東平地の戰況は、何人の眼に映ずるところも同樣に、敵に有利で、我

は稍〻受太刀の姿に在りと謂はねばなるまい。只我が師團は本夜增援隊の到著に依つて、今後の戰鬪指導其宜しきに適ふときに於てのみ、敵に對して有利の地位を占め、戰況の好展を辿り得るの可能性を有するに至つたのである。

伊勢、湖東兩戰場に於ける戰況一般の判斷は以上の如くで、之を綜合的に考ふるときは、伊勢平地方面に對戰しつつある彼我兩軍主力が、更に運命を開拓せんとする爲には、直接軍主力方面に於て敵に徹底的强打を與ふるか、又は狀況若此の如き戰力の自信を抱懷し得ないとすれば、他に勝算確實なる方策を講ぜなければならぬのは勿論で、是に於て彼我共に著眼せねばならぬところは卽ち湖東平地方面に於ける戰況の動きである。然るに十月一日の狀況に於ては、遺憾ながら我が軍に對し實に悲觀的の事態を招來したのである。從つて將來軍が其戰力を培養すべき威力を有せずとせば、勢ひ軍は、時日を敵に假すことなく、準備の能ふ限り速に攻擊を再興するの策に出づるに如かざるは、理の當然とするところである。軍の攻擊再興が、一般態勢上勝算確實

と判斷して明日決行せらるるにせよ、敵情の變化を洞察して時日の遷延の害を看破せるにせよ(此ことは次項に於て改めて研究せん)、將た又師團方面の戰況の重大化と其推移とを懸念せる結果にせよ、軍の迅速なる攻擊再興は、明に一の明斷と謂ふことが出來る樣である。

軍主力方面の活動は、湖東平地方面自體の戰況に直接に影響はあるまいが、間接的に師團の動靜と相關的に關係を結び得るものと謂ふことが出來る。

1　湖東平地作戰の軍主力に對する感響に就て

湖東平地作戰の價値は、彼我共に重大なる關係を有することは勿論であるが、特に我が軍に對しては、暫く之を消極的の立場に於てといはなければならぬ。何となれば、我が師團は敵を擊破して敵軍の背後に侵入せざる以上、敵軍主力に對し大なる感響を與へ得ざるに反し、湖東平地に對する敵軍の侵入は、既に我が軍に對し大なる脅威である、此際師團の戰敗は、延いて軍の背後に强烈なる苦痛を與ふるのみな

らず、或は全然軍を覆滅的の運命に陥らしむる結果となるかも知れぬからである。

此見地に於て、軍若伊勢平地方面に勝利の確信なきものとせば、縦ひ一部を此方面に割くも、尚且湖東平地に於ける苦境即ち軍作戦遂行の癌を除去せねばならぬ程の価値を持つものである。然るに軍が此擧に出でざるところを考察するに、軍は此方面に一部を増援して受動的、否ざるも逐次的、而も微温的に、戦勝の基を固めるよりも、伊勢平地方面の作戦に多くの期待を把握し戦勝を暗示しあるやにも思はれ、此方面に對しては師團を當てて十分なりとの信念を抱持しあるものの様である。

以上の如くで、當戦場は軍全般として消極的であるが、敵に取つては、積極的立場に於て更に重大なる意義を持つものである。而も當戦場に於て敵は有利の戦況を進展せしめつつある現況なるに於て益〻然りである。一般作業者中此點に迄深刻な考察を遂げた者が僅少であることは遺憾である。

先づ彼我會戦の推移を顧みるに、尾濃平地、大阪平地の兩方面より作戦する兩軍とし

て、各種の狀況に依り其主決戦場を伊勢、湖東何れの平地に選ぶべきかは、勿論今より遽に判斷し難しとするところではあるが、既に伊勢平地に於て兩軍が會戦を交へたる結果より判斷するに、敵は作戦開始の當初に於ては、稍〻立遅れの感がある様にも思はれる。而して今や伊勢平地に兩軍主力相結んで解けざる狀態に於て取組みある現況に於て、湖東平地に於て縦ひ一時的にもせよ有利の立場に一歩踏み出した敵としては、此方面より運命の開拓に邁進し來るべしとは判斷に難くない。

2　大垣方面敵後續兵團の使用方面に關する判斷

既に考察を遂げたるところよりして、大垣方面の敵は伊勢、湖東何れの方面に使用せらるべきや。諸官の案を大別するに、次の二案に歸著する。

1　軍主力方面に使用せらるべしとなす案

2　師團當面に使用せらるべしとなす案

勿論以上二案の外には出でぬであらう。而して第一案の理由の主とするところは、

戰術の原則たる決勝を期する爲には徹底的優勝を期するの兵力を決戰方面に集中するの原則に論據を置くもので、此趣旨に就ては必ずしも不可と謂ふことは出來ぬのである。是戰鬪失敗の原因は、多くの場合、此原則の適用に徹底を缺くが故であること、今更述ぶる必要もない位多くの戰例を有するからである。

併しながら、既に說述した如く、湖東平地方面本日の狀況は敵の戰勝の確實性を暗示し、而も一般戰略的關係に於て重大性を加へたので、重要方面は今や湖東平地に推移しあるに似てゐる。又伊勢平地一般の態勢より考ふるも、該方面に更に混成一旅團の兵力を注入するよりも、寧ろ狀況の推移に順應し戰勝の公算比較的多く、而も其結果が將來に及す效果の偉大なる方面に使用するの策に出づるならんとの判斷が妥當であるとするならば、是卽ち一般論を超越し原則を知つて更に之を活用せるものと謂ひ得るので、此點に於て出題者は概して第二案に同意するものである。併しながら、全然第二案のみと斷定を下し得ないのは勿論で、是軍方面に於ける敵主力軍自體の受けたる感響は事實對者の判斷を許さないものがあるのと、想定の表現よりして遺憾ながら窺知することが困難である。而して師團の立場としては、敵の後續兵團が湖東平地方面に使用せらるることを前提として今後の決心の資料とするときは、大過なきを期し得るのである。

二、師團正面の戰況判斷

湖東平地方面に於ける戰況の判斷に就ては、作業者の案は大體に於て三案に別れる。其一は師團の戰況を甚しく悲觀せるもので、一は樂觀に過ぐるもの、他は其中庸を持するものである。斯く判斷の別るる原因は、要するに彼我本日の戰鬪經過に伴ふ現況に直面しての感受性、地形的觀察の相違、彼我增援部隊に對する見解如何に在るもの様である。悲觀案者は、敵は本夜更に猛烈なる攻擊を續行すべきが自然で、敵の攻擊に對しては、我は甚しく苦境に陷るべしと判斷せるものであつて、本日の戰鬪に於て、敵の拂うた努力、態勢の混亂等を顧慮外とし、地形的觀察を輕視せし傾あるのみ

ならず、増援隊の來著に伴ふ我が態勢の挽回を考慮せぬ結果陥りし過失の様である。尚此案者に於ては、敵が後續部隊を期待しつつあるべしとの心理に立入つてまで考慮を遂げたものとは思はれぬ。

飜つて師團本日の遭遇戰は、優勢の敵に對し、正午以來大に努力を重ねたが、遂に右翼隊方面の戰況思はしからず愛知川左岸地區に後退するの已むなき至つて、戰況は概して我に不利となつた形勢であるとはいへ、師團の現況は、概して愛知川左岸の要地を確保し得て、敵は愛知川の線に阻止せられ、活動中止の狀態であり、晝間比較的順調な戰鬪經過を辿りし攻撃に一頓挫を來した様である。而して彼我全般の狀態特に地形的觀察に於ても、我は今遽に甚しき苦境に陥るべしとも思はれぬ。而も我には既に増加部隊たる歩兵第二旅團主力、山砲兵大隊の到著せるあつて、玆に新なる戰鬪指導の計畫を樹立して敵に對し得るの狀態となつた。

敵は本日に於ける戰勝の結果を擴大せんが爲には、夜に至るも尚引續き力攻すべきが自然的勢であるかに見え、愛知川の線に停止し敢て積極的行動に出でぬのは稍、不思議なるが如く感ぜらるると雖、本日の戰鬪の結果より考ふるも、敵として隨分無理押の戰鬪繼續を敢行し、尚第一線に出した兵力も相當大であるので、晝間に於ける順調なる戰況の繼續性、所謂勢なるものも一頓挫を來せるにはあらざるなきか、加ふるに、我が増加隊が既に戰場に到著するものと判斷せば、敵としても、玆に混亂せる部隊の整頓をするの煩もあるであらう。從つて敵の行動を必ずしも無爲無能とのみ非難することは出來ない次第である。

此の如く考察を遂ぐるときは、師團が愛知川左岸の要地に踏止まり得たる以上、本夜中に敵より手もなく撃退せらるべしとも思はれぬ。

之を要するに、本戰況は、我は不利の立場に在ることは容認せねばなるまいが、既に夜に入り態勢整理の餘裕も生じ、尚且増援隊も既に戰場に到著せしことなれば、樂觀に坐することは固より許すまいが、一も二もなく悲觀に沈まねばならぬ戰況でもあ

るまい。否師團としては、自今暫くの間は、新鋭なる後續部隊を得て、形似上下に亙り有利の態勢となつたのである。昨非今是の狀況轉換の此機に於ける師團長の決心こそは、全般の狀況に照し實に重大性を加へたものであつて、時刻を遷延するに從うて再び敵をして有利の態勢に立たしむることを覺悟せねばならぬ。

三、敵の企圖判斷

敵後續兵團が湖東平地方面に來るべきことに就ては、既に研究せるが如くである。而して該敵が何時頃當戰場に現出すべきやは、固より不明であるが、併し出來得る限り急行するであらう。とはいふものの、長途の行軍の後赤坂附近に宿營せしことなれば、先づ以て本夜半頃に同地を出發するならんとの判斷が正當である。或は更に遲れて出發するやも測られぬ。さうして若正子十二時頃に出發するものとせば、當戰場に現出するは早くも先づ明日午前十時頃になるであらうと思はれる。併しながら現今の如き交通機關の進歩發達せる時代に於ては、或は高速輸送機關等を利用して一部隊を急速に戰場に輸送すべきことも考慮して置くことが必要である。作業者中には先づ以て、此判斷が甚しく樂觀に過ぎるものが尠くない。敵後續兵團の戰場到著を前述の如く判斷せば、敵として、今や師團が全力を掌握せんとする現況に於て、夕刻頃よりの戰況の進展思はしからざるに鑑み、餘りに無謀猪突的なる企圖に出づることは萬あるまい。何となれば、既に著々として成功を收めつつある敵としては、此際一たび失敗して取返しのつかざる境地に陷ることは欲せざるべく、從つて、放膽と謂はんよりは、寧ろ著實なる企圖に基いて、逐次戰勝の基礎を鞏固になしつつ、增加部隊を合一したる後、完全に我を捕捉するを是とすることは、此の如き軍隊の心理である。本夕以後敵が遮二無二我に對して突進し來らざりしところの因も亦此邊に在るのではなからうか。從つて、本夜尙一部の攻擊を受くることは有り得べき狀況ではあるが、眞面目の攻擊は明拂曉後に企圖せらるるものと判斷するのが至當である。

然らば、「敵は明拂曉後何れの方面に主攻擊を向け、如何に攻擊を指導すべきや。」の

考察を遂げねばならぬ。

敵が我が左翼方面に重點を指向することは、晝間攻撃の奏功せざる方面にして、加ふるに重點變更の煩を生ずるのみでなく、假りに我が左翼方面は撃破し得たりとするも、尚後方には觀音寺山なる堅固なる高地を有し、我若該高地を保持せんか、全般の關係上觀音寺山、箕作山及其東方地區は一陣地線をなすのみならず、我をして一時受動的に陷らしめ得るではあらうが、其反面に於ては我をして極めて有利に爾後の戰鬪を指導せしむる可能性を享受せしめ、敵が縱ひ一倍半の兵力を擁するにせよ、若此堅固なる正面に主力を以て衝突せし機に乘じ其左翼に向ひ攻勢に轉ぜらるることとなれば、敵も勝算確實なりとの保證は出來ぬであらう。

次に八日市方面に對し、放膽なる迂回、包圍を斷行することは、最初に述べた如く敵に有利でない計りでなく、旭附近、和田山附近の要點が我が有に在る間は、敵の右翼方面に甚しき弱點を成形するに至り、大なる危險を包藏するを以て、敵として斷行し得ぬ筈であらう。

以上を綜合判斷するに、敵として先づ最も採用するに似たる重點方向は旭附近の要地の奪取ではなからうか。若敵にして此附近の要地を奪取し得たりとせば、我が左翼方面は全然琵琶湖中に壓迫せらるるの形となり、同高地の占領は敵後續部隊の到著後の戰鬪指導に極めて有利なる保證を與ふるの結果となるからである。

本夜敵として大に顧慮せねばならぬことは、我が師團が全力を集結し得ることである。從つて、敵としても態勢の整理建直しを忽諸に附し得ない。若旭附近に重點を指向するものとせば、從來の態勢を基礎とするものにして、態勢整理及爾後の攻撃實行も絶對可能の範圍に屬するものと觀ることが出來る。

以上判斷の如く敵が攻撃を企圖する場合に於ては、其左右兩翼に對する我が企圖に對應する相當の手當を爲すであらう。又既に研究した如く、我が師團が左翼を後退して作戰する場合に應ずることも顧慮するであらうが、敵として後續部隊來著迄に戰場

を制し得る要點を獲得することに努むる必要上、戰鬪正面の關係は過大の兵力を何れの方面に對しても充當し難く、從つて其兩翼に弱點を成形することは免れぬ。此點が今後に於ける師團の作戰指導の根本となるのであり、師團長の決心の著眼も此敵の弱點に乘ずることに基礎を置かねばなるまい。

四、師團爾後の戰鬪指導

師團の戰鬪遂行は、敵に就て既に攻究を遂げた如きことゝは全然其軌を異にせねばならぬ。蓋し今や軍方面に於ては明二日より前面の敵に對し攻勢を企圖するのと、敵の後方には有力なる後續部隊があるのであるから、該敵が若一たび軍方面に前進する場合に於ては、成るべく速に當戰場に重大なる戰況の變化を卷起し、以て軍方面の攻勢に力強き感響を與ふることが必要であり、又我が豫想通り該敵が當戰場に前進する場合に於ては、敵に向つてする決戰の强要は迅速を要し、其戰鬪參加に先だちて前面の敵を擊破せねばならぬ要求が頗る濃厚である。

此見地に於て師團の攻擊開始は瞬速を要し、絕對成功を確信して敵の死命を制し得る方面に攻擊重點を指向すると同時に、本日の沮喪せる軍隊の志氣を飽くまで高潮せしむる徹底的攻擊方式を採用せねばならぬと云ふ結論に到著するのである。

1　攻擊開始時機に就て

敵に對し何時攻擊開始を爲すべきやと云ふ問題であるが、本夜夜間攻擊を決行すべきや、或は明拂曉攻擊を行ふべきや。作業者の案も大要左の二案がある。

一、夜襲案

二、拂曉攻擊案

第一案は攻擊開始を迅速ならしむる趣旨には全然合するのであるが、師團の現狀に於ては、態勢の整理でもせなければ、今遽に夜間攻擊を行ふと云ふ譯にもいかない。從つて我が後續部隊を戰線の某部に注入して其目的を達成するか、又は敵線の備なき方面例へば其左翼方面に向つて攻擊を行はしむることになるが、本日戰場に急行

せる部隊が、本夜直に夜間攻撃を行ふことは、先づ難中の難といふも過言ではあるまいと思ふ。此際明瞭な地形、地物等があつて、之に藉すに時間の餘裕を與へ得て、實行に可能性があるとすれば別問題である。又敵の左翼方面と雖、要圖に示されてある様に全然開放されてあるものと考ふるのも亦誤である。

勿論晝間の戰鬪が比較的順調であり、加ふるに兵力が比較的多く、一部の夜襲に依り敵の一角を突破するか、又は虛隙部に投じ、爾後此點より有力なる一部を突進せしめ得る兵力を把握しあるが如き格別の場合ならば、別個の問題である。

本狀況に於ける夜間攻撃は、其主旨と旺盛なる攻撃精神竝夜間攻撃を愛好するところの觀念に對しては、大に讃意を表する次第であるが、實行の點に於て同意し兼ねるのである。併しながら、敵の左翼が一の弱點であり之に對し一部を投入することの必要ありとの洞察力に對しては、其目的の如何に關せず同意を表する次第であるが、此部隊とても、恰適の部隊を充當するにあらざれば不成功に終るべきことは勿論である。

以上の如くにして夜襲は大體に於て實行不可能との結論に到著したが、然らば概して拂曉攻撃を以て可とすべきは明である。拂曉攻撃開始の時刻に關しては、戰線の整理と深き關係を持つが故に、次に戰線の整理に就て研究することにする。

2　戰線の整理に就て

戰線整理に關する作業者の思想は大要次の二案である。

一、根本的に戰線を整理して作戰を指導せんとする案

二、現在態勢を基礎として戰線を整理せんとする案

第一案は戰線を整理し戰鬪正面を適當に緊縮する爲、「一部の戰線例せば左翼隊方面を箕作山、觀音寺山の線に後退し、徹底的に重點を右翼方面に集結して、敵の左翼を包圍しよう。」とする案であるが、此指導法は戰術の研究としてよく議論せらるる問題である。理論上から見たならば、一部の戰線を後退し之に依つて我は兵力の節

約が出來るし、重點の變更も可能となるのである。從つて實行して何等支障はない計りでなく、綜合的に言うても、玆が運用の妙の存するところで、指揮官の卓越、軍隊の精銳等が敵に比し絶對的に優越を確信し得る場合に於ては、大に推奨すべき方策である、又戰鬪綱要も此の如き卓越せる指揮法を奬勵して居る次第であるが、偖て本想定に現れたる如く敵軍の素質、裝備が我と同等なる條件のもとに、而も晝間の戰鬪概して我に有利ならざりし師團の戰鬪志氣の半面に思を及すときは、玆に軍隊の精神的の動き所謂戰場心理の影響が戰鬪場裡に及す恐るべきものあることに留意し、單純に理論に囚はれず、他に現況に處する良方策を立て得るや否やの考察を遂げたる後でなければ、戰線の後退と云ふことは成るべく避けた方が宜しい。勿論一部戰線の後退を狀況の如何に論なく絶對に否定するものではないことは勿論である。本狀況に於て此の如き暗夜、全然敵に我が企圖を祕匿しつつ比較的混亂せる部隊の後退を爲し遂げ、希望の地點に停止し得べきことは過望であるが、縱しんば

其困難なる軍隊の駈引が出來得たとしても、明拂曉迄に新なる攻擊準備を整然たらしめることの出來ぬことは、先づ肯定出來るであらう。又敵が之に對し對策を講ぜぬと斷定することも、錯誤の基となるではあるまいか。又折角有利なる高地の前方に進出し砲兵使用の爲有利なる態勢に在るのを放棄して、我は比較的砲兵の使用困難であつて而も逐次戰鬪の進展に伴ひ敵の砲兵使用を有利ならしめるの公算大なる方面に決戰場を選ぶことは、戰鬪力を遺憾なく發揮せしめ得る良策ではあるまい。殊に本攻擊指導に於て、師團の有力なる一部を守勢に立たしむるところに、精神的に大なる缺陷を包藏する樣にも思はれ、此際飽くまで軍隊の志氣を高潮せしめつつ攻擊を指導するを要する方針に動搖を來す虞ありと謂はねばなるまい。

以上の說明で明なる如く、本狀況に於ては戰線の整理を徹底的に行ふことは寧ろ有利でない。從つて現態勢を基礎として、攻擊態勢の建直しを巧に工夫するの方策を講ずる方が、賢明な策である。

第十一想定

3　主決戰方面の確定

主決戰方面の確定は、本決心に於て最も重要なる點であるからして、比較的詳細に亙りて研究を遂げたいと思ふ。作業者の案は大要左の三案に別れる。

一、右翼八日市町方面、或は更に東方地區

二、中央方面

三、左翼方面

以上の如くで、其大多數を占むるものは第一、第三案である。師團現在の態勢は、稍〻側面陣地を成形し、而も我が左翼は、敵の指向兵力の關係及本日の戰鬪經過から判斷して安全の狀況に在り、又我が右外翼方面は、概して我が勢力範圍に在つて行動の自由を占めあるを以て、敵主力の側面に對し、八日市町東方地區より成るべく敵の背後に迫り得る如く攻勢を企圖することは、確に有力なる一案であること、既に述べたる如くである。併しながら、我が左翼を現在線に留むることを前提とせば、師團の戰鬪正面は頗る廣大となり、此方面の決戰兵力に所望の戰力を附與することは、現況に於ては不可能である。從つて他正面例せば左翼方面より必要の兵力を抽出せねばならぬ。兵力の抽出は、現況必ずしも不可能ではあるまいが、此の如くするときは、敵も亦之に對應する兵力の餘裕を生ずるの不利があり、加ふるに此の如き攻擊方向は、單に敵を其退路の方向に壓迫するのみなので、縱しんば一步を讓り、敵に對し攻擊の初動に於て一擊を加へ之を擊退し得たとするも、少くも我は遠く常安寺高地の線位迄進出せざる以上、敵の後續部隊に對應することは出來ず、遂には攻擊の中途に於て敵に支持せられ、本戰場に於ける決勝戰の結果を結ぶことが出來ぬ樣になるであらう。

戰鬪綱要は、敵の翼側若は側背に向ひ包圍を行ふ如く攻勢に轉ずることの極めて有利であることを敎へ、本狀況に於ては其實行は確に之を可能とするけれども、敵の不意に乘じ一氣呵成に戰鬪の決を結ぶ必要ある本狀況には順應し難い。故に無條件

に同意を表し兼ねる案である。

第二案は、中央方面より突進せんとするもので、所謂正面攻撃である。此方面は敵の重點に對し我も亦重點を指向するものであつて、卽ち力を以て力を制するものである。戰場全般の關係特に敵戰線の間隙部竝地形的恩惠は、我に有利にして、逐次戰況を好展せしむべきことは肯定し得るが、飜つて敵後續部隊の現出を考ふるとき、而も兵力の絕對優勢を期し得ざる師團としては、迅速なる發展を豫期し得ざる方面であつて、文字通り正面攻撃の弊に陷るべく、此際望ましき攻撃方面でないことは、容認せねばなるまい。

第三案として殘された案は、卽ち左翼方面より敵の右翼に對し强壓を加へ、敵の退路を遮斷し、湖東平地に敵を殲滅せんとする案である。

本案は確に放膽なる案であつて、我も亦大なる危險を覺悟せなければならぬ。卽ち攻撃奏功に先だちて旭附近の高地を敵に奪取されたならば、我が戰線は全然分斷されて主力の退路は遮斷せられるのである、而して我は比較的廣き地域に亙り敵を壓迫せざるべからざるに對し、敵は旭附近の高地の奪取に依つて其目的を達し得ることが是である。故に絕對的に旭附近の要地を敵に委せざる覺悟が必要であると同時に、次の諸項に關する討究を必要とする。

一、迅速なる戰況の進展を策せんが爲十分なる戰力を左翼方面に集中發揮し得るや

二、敵の我が背後に向ひてする脅威を除去し得るや

三、敵に我が企圖を察知せらるるときは敵も亦之に對する處置を講ずるが故に縱ひ若干の成功を納め得たりとするも所望の結果を期し得ざる懸念あり

四、敵增援部隊の來著に先だち敵を敗退に導くこと可能なりや若事志に違ふ場合如何

以上の如き懸念があるから、是等の對策を攻究して、其害を排除し、成果を確認し

得るとせば、出題者は本案に對し全然同意を表するに吝ならざるものである。旭附近は、夕刻既に敵に一撃を加へ之を撃退し得たると、既に此附近には陣地を準備しつつあつた關係上、本夜之を保持することは困難ではあるまい。又相當の兵力を此方面に充當せんか、地形の關係よりするも、明朝迄に一溜もなく敵に蹴散らされやうとも思はれぬ。

敵が我が判斷の如く重點を指向し來るものとせば、我が左翼方面に對して現在以上の兵力を充當することは先づ之なかるべしと判斷することが出來る。從つて我は先づ一旅團の兵力を主決戰方面に使用し得たなれば滿足が出來る。而も砲兵力は其大部を此方面に指向することが必要である。然るときは、地形の關係上先づ以て敵に徹底的に打撃を加へ、迅速なる戰況の進展を望み得るものとなすことが出來る。而して師團の現狀及增援隊の關係は概して其望を滿足せしむることが可能である。第二は敵の我が右側背に向ふ脅威であるが、箕作山の存在と我が準備とに依つて可能である。而も敵も此方面に多數部隊を指向し得ぬことは既に研究した如くであるからして、右側背は先づ以て安全と見て間違はあるまい。

第三は我が企圖の祕匿であるが、地形の關係上我が企圖の祕匿は容易である。蓋し北五個莊村方面にせよ、八幡村方面にせよ、兵力を移動するに際しては、全然敵に我が企圖を祕匿し得る地形であり、而も本夜間を利用し得るの特典を享有するからである。併しながら、單に之のみにては滿足し得ることは出來ぬから、更に積極的の工夫を運らすことの必要がある。該工夫とは何ぞやと云ふに、そは敵の左側背に向ひ有力なる一部隊を放つて活躍せしむることである。敵の左側背は、既に研究せし如く、師團の主決戰方面として、又敵の現態勢に於ける危險翼として、敵としては可なり神經を尖らしある方面である。故に此方面に一部隊を放つことは、隨分敵に痛手を與ふることは確實である。だが此の如く一部隊を分離使用することに就ては、異論もあるであらう。卽ち一は決戰方面の兵力を寡弱ならしむるの結果を伴ふ

ことであつて、大に顧慮せねばならぬ一事項である。又一は此の如き任務に服する部隊は、能く時機を逸せず活躍し得て主力との連繫を保持することが困難であり、爲に兵力分散の弊に陷ることである。而して某時機迄は企圖を祕匿し、一たび立てば勇猛且一氣呵成に敵に殺倒し得るの實力を有せしむると同時に、敵が之に對應するとするも時機を失する關係位置を保たしめねばならぬ等、之が使用は困難なる要素を多分に持つてゐる。併しながら此部隊の派遣に就ては、其著想と效果とは何人も容認するであらう。只決戰方面の兵力減少、協同連繫竝好機投入の困難、各個撃破の害等との輕重の比較問題である。第一項の點は原則上容認し得るが、他は使用者の戰術眼識と訓練程度との問題である。出題者は、此問題の解決は、今暫く議論を離れて、寧ろ戰鬪綱要が所謂機動竝特別任務を以てする一部隊の派遣等を小害を排して斷行することを推奬せる精神に則りて判決を求むるを策の得たるものとし、右側支隊として一部を派遣し、成るべく遠く且深く敵の背後に向はしめ、一は企圖の祕匿に資し、一は主攻撃方面に對し時機、態勢、竝力に於て有效なる協力を爲さしめ、兩々相俟つて多大の期待を爲し得ることを確信するものである。

是に於て最後に敵の後續兵團到著前に前面の敵に甚大なる打撃を與ふることを得るやの問題であるが、前述の如く部署するときは、敵に我が企圖を祕匿して主決戰方面に概して所望の戰力を發揮し得べく、右側支隊の突進は決戰方面に對し遽に好感響を與ふるに至るであらう。更に詳しく述べれば、元來敵は準備周到なる防禦陣地を構築せるものでなく、攻撃經過中の一停止姿勢である、故に一たび其戰術戰略的の中樞に强打を被らば、如何とも仕難き運命に陷るであらうと判斷して誤でなからう。特に我が砲兵は、敵に比して絕對的有利なる地形的觀測所を有してゐるのみでなく、極めて輕快なる山砲を裝備したことは、一大强味である。次に考ふべきことは敵線の薄弱部は何れに暴露しあるかの問題である。元來決戰を企圖する戰鬪正面としては彼我共に稍〻過廣に亙りあるは事實である。是本日の遭遇戰に於て彼我何

れも急速なる戰勝に躁り、互に其側翼の包圍に努めたる結果不知不識の間に正面過廣の弊に陷つたのである。故に本夜中には當然整理せられねばならぬ問題である。否ざれば、敵は其企圖する重點方面即ち中央に於て十分の戰鬪力を發揮することは出來得ない。とは云ひながら、玆に敵として自己の欲するが如く正面を短縮し得ざる三つの懊惱を持つてゐる。其一は左翼を我に暴露することを避けざるべからざること、其二は其正面を短縮し得る地形的恩澤に惠まれざること、其三は其右翼に於ても同樣の慮あることである。從つて思ふ存分徹底した部署を企圖することは出來ぬのである。之には更に無形的要素の働きのあることを忘れてはならぬ。即ち有力なる後續兵團を有するが如き軍隊は、得て陷り易き心理作用である。「窮して初めて悟り身を捨てて生道を見出すものであり、此に初めて放膽も生れ徹底も期し得るのである。」と云ふことが眞理であるとすれば、此敵の心理を捉ふることも極めて緊要である。勿論本夜敵が態勢の整理に全力を盡すべきことは判斷に苦しくないが、

本日の態勢を根柢より覆すことは出來ない狀況である。卽ち現下暴露せる敵の弱點は某程度の補修工夫は疑さるべきも、全然之を除去することは不可能である。其弱點は敵の左右兩翼に於て暴露し、加ふるに遽に除去し得ざる危險は其右翼に在る。以上の點を綜合するときは、師團は晝間の戰鬪意の如くならず稍、受動消極に陷りしとはいへ、今や狀況一變し而も自由に重點變更を可能ならしめ得る地形的利益と態勢の自由とを保有し得て、加ふるに急襲的に敵に乘じ得る立場に在るから、師團の企圖する決戰方面は十分に其成功を自信し得ることが出來ると謂はねばならぬ。縱ひ決戰中途にして敵增援隊が到著したりとするも、荒神山を我が手中に收むることが出來れば、敵の隘路進出に對し相當砲兵威力を及し得るから、遽に混亂に陷るの虞はないのである。

說明が稍、長くなつた嫌があるが、主決戰場を左翼方面に選定せねばならぬ精神は解し得たものと思ふ。

4 拂曉攻撃の方法(攻撃開始の時刻)に就て

本攻撃に於て、攻撃開始時刻の選定は、極めて重要なる關係を持つてゐる。態勢の整理に多くの時間を要するときは、勢ひ攻撃準備も相對的に遲緩する理であるから、明朝早く攻撃を開始することの出來ぬのは當然である。けれども智慧を絞り工夫を凝し以て部署を巧にするときは、態勢の整理、攻撃の準備は存外に迅速に行ふことの出來得る望がある。又各隊は存分に地形を熟知して居り、新來の歩兵第四聯隊と雖其使用方面に特別の注意をしたなれば、攻撃の準備もさまで困難ではあるまい。一方に於ては本攻撃は敵の不意に乘ずることが絶對の要求である。可なり多數の案者が拂曉と共に攻撃せんと企圖した如く、「敵も亦師團が拂曉時に攻撃開始を爲すべしと判斷すべき公算は、相當に大である。」と云ふ考案は、申らずとするも概して遠からざるものであらう。故に本攻撃は其攻撃開始に於ても敵の豫想外に出で、以て急襲の效果を十分に收めねばならぬ。之が爲には準備の出來得る限り、實行の可能

なる範圍に早く攻撃開始時刻を選定することが必要である。以上の見地に基き出題者は時刻を黎明直前と決定し、攻撃の方法を半夜襲的に行ひ、拂曉と同時に敵に壓迫を加へ得る如くすることが可であると信ずるのである。さらばといふて、午前四時半前に攻撃開始をすることは、實行に稍〻無理を生ずる嫌があるのと、右側支隊の攻撃開始が主力方面より甚しく遲れ、其成果を十分に收め得ぬ懸念がある計りでなく、夜間攻撃の不利を享受することになる。本攻撃に於ては既に述べた如く右側支隊の活躍に相當期待する關係上、午前四時半とした次第である。

答解者中單純且茫漠たる考のもとに「拂曉攻撃」といへば其企圖を明瞭に盡し得たりとなす者が多數にあるが、戰鬪綱要の精神に則つて適當と認め難いのである。又一部の作業者に於て、「我は砲兵力(數及地形的)に於て敵に優越を占めてゐるから、本攻撃開始の時刻は、砲兵を有利に使用し得る如く決定するを以て奏功の要訣とする。」との論據のもとに、拂曉後砲火を以て敵を制壓したる後、攻撃開始を爲さんと

する向もあるが、其意見は理論として特に傾聴に値するところであり、陣地攻撃等の場合に於ては、狀況に依り成立すべき理由であるが、本狀況に於ては、動もすれば敵に機先を制せらるるの虞があるのと、急襲の精神に違背するのみでなく、敵後續兵團の關係上奏功を迅速ならしむる所謂時間的觀念に於て缺くるところあるを以て、同意を表することが出來ない。

處置に就て

決心に伴ふところの處置は、其決心の精神を圓滿、確實而も迅速に實行に移し得る如くでなくてはならぬ。故に決心が縱しんば卓拔でなくても、決心遂行に對する信念が牢固であり、其處置するところが正當であり、之を實行に移して些の齟齬を來すことがなかつたなれば、戰鬪は終始出來得るものである。從つて戰術の一進歩と認め得るのである。卽ち決心は命令の企圖であり、處置は各部隊に課する任務となつて表現せらるるものである。言葉を換へるならば、決心は決心問題の中樞ではあるが、處置は其五體なのである。從つて恰も人體に於て五體の發育が完全でなかつたならば十分なる活躍を望み得ないと同樣に、處置の適否は直に軍隊の活動に影響を及すものである。是に於てか、吾人は、決心の正鵠を失せざる戰術能力の向上進歩を圖ることは勿論必要なことには相違ないが、處置を決心に順應せしむる爲の練磨を積まねば、實用に迂遠である。本問題に於て作業者中に決心に就ては概して同意すべきものも尠くなかつたが、其處置の之に伴はざるものの比較的多かつたのは遺憾である。將來に亙り其練磨を熱望して已まぬ次第である。

次に述べるところのものは、出題者の原案に伴ふ處置に就ての說明である。故に決心が全然異なる案者との比較討究を試みんとすることは困難であり、稍〻冗長に亙る嫌があるが、各項を別ちて說明することにする。

一、戰鬪正面の整理に就て

攻撃に於ける戦闘正面は、敵線の突破威力の保持に必要なる限度より過度ならしむることは忌むべきことである。併しながら敵を包圍せんとする企圖を有するときは、勢ひ正面の擴張は免れざるところで、素質劣惡の敵に對する場合の如き特に然りである。又敵陣地の堅否は大なる關係を有する。本狀況に於ては、敵は堅固なる陣地を占領せるにあらざると、我は敵の右翼を包圍する企圖を有すると、一方に於ては砲兵力が敵に優るの關係上、若干正面を擴張することは許容し得るところであるが、某限度を有するのは當然で、八日市町より東海道線に跨つた戦闘正面を以て攻撃を爲さんとするが如きは無謀も極まれりである。此の如きは眞に戦術常識の缺如を暴露したもので、何等の創意もなく、又工夫も凝すことなく、單に現態勢を以て平平等戦線到る處薄弱、眞に重點と認むべきものを成形し得ない。從つて其不可なるや勿論である。本日の態勢は、若干敵に強要せられ自然的に缺陷を暴露してをり、明拂曉の攻撃に際しては、巧に之が修正を要することは既に述べた如くである。此邊の手腕の差異が明日の戦闘の成果に影響するのではあるまいか。

是に於てか師團が左翼方面より重點を指向せんとせば、攻撃正面を適當に整理し、爾他の方面に對しては特別の工夫を運らし、敵の包圍に應ずるの手段に出でねばならぬのである。原案に於ては、此見地に立脚して、戦闘正面を旭附近から東海道鐵道線に亙る正面としたのである。併しながら八日市町方面に對し敵が相當強力な壓迫を加ふべき虞もあり、其行動は可なり師團の背後に痛痒を與ふるが故に、此等の惱みを除去せんが爲には、特別に一部隊を之に充當するの必要がある。該部隊をも攻勢的に使用せば、戦闘正面擴大の害を伴ふの虞あるが故に、最小限に止めて守勢を取らしめ、狀況之を許すに至りて主力方面に直接連繫して積極的行動に出でしむるのである。

二、兵力部署に就て

兵力部署に關しては、依然として現在態勢を甚しく改變しないで攻撃態勢に移り、而も攻撃力を十分發揮し得る如き工夫を要するのである。

1　右翼隊及右側掩護隊

旭方面は、豫想する敵の主攻撃正面で、兵力の移動は絶對不可能であると同時に、此方面は左翼隊の攻撃に十分なる協力を保ちて攻撃を遂行せしめねばならぬから、此聯隊は旅團長に直接指揮せしめて右翼隊と爲すを適當と認めるのである。

次は既に前項に於て述べたところである八日市町方面の部隊である。此方面は狀況上整理を可能ならしむるのと、重點方面に充當すべき兵力を把握せんが爲、特別の工夫を要する。卽ち III/2i を充當し、優勢なる敵に對しては、全然之を阻止して師團の側背を安全ならしめる。此部隊は敵を壓迫し得る狀況に於ては、奮然立つて主力方面に協力すべきは勿論であるが、任務上右翼隊長の指揮下を脫せしめ、寧ろ右側掩護隊として獨立せしめ、一は其行動を容易ならしめ、一は右翼隊長をして任務を單一ならしめて專念攻撃遂行に全能を發揮せしむる樣に、使用するを可とする。併し此部隊が一たび攻勢に出でた後は、寧ろ右翼隊と密に協同せしめる必要が濃厚であるのと、右翼隊の戰鬪力を十分ならしむる爲、右翼隊長の指揮下に入らしむるを可とする。敵の我が右翼に對する强壓乃至は包圍に對して、單なる右側掩護隊の消極的行動に依つて滿足し得るものと考ふることは、誤の基をなすものである。卽ち敵の積極的企圖に對しては、我も亦積極的方策を講ずることが必要であり、既に述べたところの右側支隊なるものは、間接に右側掩護隊と深き關係を有することを忘れてはならない。

2　左翼隊に就て

左翼隊には步兵第二旅團を充當する。此の如くせば、決戰場に建制の部隊を使用し得るのみならず、左翼隊の攻撃準備を迅速ならしめ得るものである。此方面の第一線に六箇大隊の完全旅團を充當することは、最も望ましき次第なのであるが、右側支隊を强力ならしむる爲、勢ひ一大隊を缺かざるべからざるに至るは又已むを得ざるところである。從つて其戰力補充の意味をも含めて、山砲大隊の大部を左翼隊に

配屬し、強大なる突進力を附與せしむるの著意に出でなければならない。此方面に對しては砲兵力の大部をして終始協力せしむることは極めて必要である。

3　右側支隊及騎兵聯隊の使用に就て

右側支隊を設けて敵の背後に活躍せしむるの必要なることに就ては、既に數次說明せるとろであるが、此部隊は師團の戰鬪に於て特に重大なる意義を有するが故に、其行動は敵に全然祕匿せねばならぬ。之が爲其進路は佐久良川に沿うて前進せしめたならば、前進も容易であり、敵より機に先だちて發見せらるるの公算も尠いであらうし、又主力の攻擊時機に對する協同に機を逸するやうなこともないであらう。此部隊には成るべく從來戰鬪せる部隊を使用するを可とするが、兵力に餘裕なき狀況であるから、新來の一部を充當することにした。

山砲の一部を配屬することは、其之に期待するところの大なるに鑑み當然である。騎兵聯隊は、寧ろ現在地に在らしめて師團の右側掩護隊及右側支隊の行動の掩護に任ぜしめ、右側支隊が愛知川右岸に進出するを得たなれば、騎兵聯隊も愛知川進出の可能性も大になるから、其際に於ては右側支隊を併せ指揮せしめた方が宜しい。騎兵隊を師團の左側に活躍せしむることは、著眼としては可であるが、狀況上其移動は許すまいし、縱しんば移動し得たとしても、我が企圖を暴露し、否ずんば時機を失するに至るであらう。而して右側に使用したのと同樣の結果になるであらう。故に師團の右側に使用するを適當と認める。

4　戰鬪地境に就て

戰鬪地境を從前通りと爲すは、師團が敵を包圍殲滅せんとする企圖に合致せざるもので、宜しく更に自然的に包圍を成形し得るやう確定せねばならぬ。從つて更に東北方に向つて延伸することが必要である。然らば如何に定むべきやは、要するに兩翼隊の任務と將來の豫想戰鬪經過所謂我が希望する戰況の發展に順應する如く之を

定め、各部隊の行動をして其需ふところを知らしむるを要するのである。明日の攻撃は、其形に於て攻勢移轉に似て居り、其實質に於て遭遇戰に髣髴たるところがある。遭遇戰の場合に於ては往々戰鬪地境を定むることなく各部隊の爾後前進すべき方向のみを示すこともあるが、本狀況に於ては之を明確に指示し得るのみならず、確定せざるべからざるものがある。

此場合前述せるが如く包圍を自然的に成形せしむる爲に東北方に向はしむることは戰鬪地境確定の大體觀念ではあるが、之が詳細なる決定は、實に各部隊の任務達成を容易ならしむることに依つて解決せなければならぬ。卽ち右翼隊は、優勢なるべき敵に對し極めて勇敢に攻擊を敢行すべき性質を有するが故に、遮二無二其一般方向に奮進せしむることが必要である。而して其終局に於ては、本戰場の某要點を奪取せしむるに於て滿足せねばならぬ。之が爲常安寺高地を其戰鬪地域內に包含せしむるを要する。次に左翼隊は、其以北の地區に於て極めて自由に包圍を敢行し得せしむる爲には、極めて自由而も自然的に機動の餘地を與ふる如くにする必要がある。從つて常安寺高地の奪取の如きは之を餘所に見て、大に驥足を伸さしめねばならぬのである。此見地に於て概して築瀨北端、市南端、西出南端、圓城寺南端を連ぬる線を以て戰鬪地境と定むるを適當と認めるものである。

以上の如くして一方右側支隊は常に敵の左側背後に行動して、右翼隊の戰鬪に伴うて敵に對し終始態勢上の優越を占め得るから、常安寺高地方面に對し絕えず緊密なる協同の實を發揮し得るのである。斯くて右側支隊東方高地方面の獲得は敵に對して大なる脅威である。

本研究に於て各案者が只漫然と鐵道線又は主要なる道路等に著意して戰鬪地境を定めた如きは、時に適當なこともあるが、本狀況に照し餘りに輕率な定め方である。

右側支隊、右側掩護隊と右翼隊との間には、戰鬪地境を定むる必要を認めない。

此際砲兵の用法に關して著意せねばならぬことは、次の諸件である。

(一) 成るべく現在の陣地を變換せざること

(二) 主決戰方面即ち左翼隊方面に主火力を發揚すること

(三) 狀況之を要する場合に於ては右翼隊正面に對しても相等有效なる火力を指向し得ること即ち砲兵火力の大部は師團の戰鬪正面に於て適時適所に指向し得ること の要求大なること

(四) 戰鬪經過に伴ふ任務の達成は最初の陣地を變更することなく遂行し得ること

(五) 一部の砲兵は彦根方面より する敵增加兵團の進出に適時對應し得るの可能性を保有し得ること

第一の要求は、勿論他の要求を充足する爲の必要上已むを得ないとすれば致し方もないが、本狀況に於ては大體に於て可能のやうである。唯八日市附近の砲兵の大部は之を南五個莊村方面に移さねばならぬ。

第二の要求は前述の如き陣地の選定に於て目的を達成し得られる。

第三の要求は師團の戰鬪正面が適當に緊縮せられあると、觀測所が適當である關係上、戰線の中央後に主力砲兵を集むるならば、其希望を滿足せしめ得るものと信ずる。

第四は本戰鬪遂行の爲絕對的の要求であり、迅速なる戰鬪遂行を主義とする以上已むなき希望である。而して本地形に於ては、地上觀測所が良好であるので、現在の火砲に對しては相當の信賴が置けると思ふ。勿論地上觀測の不備を補ふ手段として空中觀測は必要であるから、砲兵任務の飛行機を砲兵隊に協力せしめねばならぬ。以上の如くするも步兵との緊密なる協同連繫に遺憾なからしむる要求に缺陷の生起せぬ保證は出來ぬ。そこは配屬山砲が可なり多いので、大して顧慮を要せぬと信ずる。

山砲の配屬に關しては、既に說明したところであるが、步兵と密接に協同せしむる

爲には是非之が配屬を必要とし、又之を可能とする狀況である。併しながら陣地の選定、觀測所の關係及砲兵の經濟的使用等の立場から、最初の內は砲兵隊長をして共陣地及火力の運用等に當らしむることを要する。勿論適時第一線隊長の要求に對しては十分應じ得ること及適時推進し得るの準備に遺憾の點があつてはならぬ。野砲兵第九中隊の位置は現在地附近が最も適當である。此砲兵は主決戰方面に對し極めて好都合であり、左翼方面の戰況の進展に伴うて直に敵線の側背に進出し得るの可能性を有する。又萬一彦根方面に對し對應せねばならぬ狀況を生じた場合には勿論のこと、敵を側背より火制し得る狀況を現出した場合等に於ては、極めて有效に使用し得る。若夫れ各種の戰況の波瀾を豫想せる場合一部步兵掩護のもとに荒神山附近に陣地を變換せば、同高地の價値を利用して相當の活躍を期待し得る。以上の如くで第九中隊は第五の要求に應じ得る態勢に在るものと信ずる。敵增援隊が到著せる如き場合に山砲の一部も之に應じ得ることを期待出來るからして、此こ

とは第九中隊に委して心配はないのである。

6　豫備隊の兵力及用法

本戰鬪指導の爲には、相當有力なる豫備を把握し置き、戰況の進展に應じて適時戰果の擴張に使用することが必要である。特に本狀況は敵增援部隊を豫期するのであるから益〻然りである。豫備隊の位置は、狀況上師團の左側方面である。併し現在の第一線部隊を集結せねばならない。何れの部隊を以て充てるかは各案者に依り勿論各種各樣であるが、現に研究した如く、出題者は步兵第二聯隊主力を後方に集結して豫備たらしめんとするものである。其抽出時機も亦大に考慮を要する。餘りに抽出過早であると、我が企圖を暴露する結果を招き易いのと、後方掩護部隊の配備の虛に對し敵に乘ずべき機會を與へぬとも限らぬ。故に集結可能の最小限度に之を遲らす方が宜しい。先づ午前一時を期して戰線を後退せしめたなればよいと思ふ。集結位置は八日市西方で、成るべく近く、戰線の影響を被らないことを顧慮し、糠

塚附近が適當であらう。第二聯隊としては混雜豫防、第三大隊との連繫等準備と實行とに大に手腕を要する。集結完了後は成るべく迅速に師團の左側に移さねばならぬが、先づ一大隊毎に集結地より逐次前進せしめ、師團の戰鬪開始に應ぜしめねばならぬ。

7　部隊の移動に關する特別の注意事項

左翼に重點を成形する爲に特に著意せねばならぬことは、東海道鐵道に沿ふ湖岸道即ち朝鮮人街道に相當多數の部隊を行進せしむることである。若該道路に故障を來すが如きことあらんか、師團の企圖は根本的に覆される虞がある。從つて師團としては、之が行進に關して規定を爲し、又參謀を派して行進の整理等に任ぜしむることが必要である。又天空に對しても其掩護の處置を講ぜねばならぬ。是等の件は單に部隊の行進のみではなく、將來師團の補給の見地からも重要である。

右側支隊に關する件に就ては既に說明せし如くである。

8　野戰高射砲隊の使用に就て

野戰高射砲隊も成るべく現在地に於て任務達成が出來れば結構であるが、重點を左翼に移轉した關係上、第二野戰高射砲隊は左翼に移す必要がある。又朝鮮人街道の掩護の必要なることは前項說明の通りである。併し其移動は拂曉前に陣地變換を完了し得ればよいのである。

9　飛行中隊の用法に就て

彼我兩軍が近く相對峙してゐる本狀況に於ては、敵軍飛行機の當戰場にする活躍をも豫期せねばならぬ。

飛行中隊は師團全般の戰鬪指導の爲に使用し、又左翼隊に對する協力、更に右側支隊との連絡も閑却は出來ない。是等は主として師團の指揮連絡機の任ずるところである。

砲兵隊は地上觀測極めて有利なる本狀況に於ても、情報の蒐集、射擊の觀測、指導

等の爲一部飛行機の協力を必要とする。先づ三機を以てせば滿足し得るであらう。

敵後續部隊の來著の狀況を知ることは、師團の戰鬪指導に特別の關係を有するが故に、之が搜索を等閑に附する譯にはいかぬ。

此の如く飛行機の使用に關する慾望は多いのであるが、さて飛行中隊に此の如く多くの任務を課すると云ふことは、實際問題としては不可能に近いことである。何となれば、飛行機は、戰鬪長期に及ぶときは發動機の手入、取付等の爲事實中隊の全機を完全に使用し得られるものでなく、又各機に悉く任務を課するが如きことも出來得ない相談である、殊に空中勤務者の疲勞等をも十分に顧慮せねばならない。使用時間等も技術的見地より見るときは眞に僅少時間に過ぎぬからである。本狀況に於ては、師團に對し本日の決戰は最も重大な意義を有するのと、戰鬪初期であると云ふ關係竝研究上から、重要であり而も必要とする任務を課した次第であるから、將來飛行機に任務を課する場合には、此ことを念頭に置いて、飛行隊を使用せられんことを希望する。飛行機に關する常識的說明は他日に讓ることにする。

10　通信、連絡に就て

電話通信は現在架設しあるものを補足することは勿論であるが、其他必要とするものは成るべく迅速に連絡せしめねばならぬ。卽ち本狀況に於ては、師團司令部と兩旅團、右側掩護隊、砲兵隊、豫備隊間を連絡することが必要である。騎兵隊は右側掩護隊と連絡せしめる。右側支隊との連絡は無線に依る外副通信の準備を必要とする。師團として通信連絡に關する研究は六かしい問題で、無線波長の配當、空地連絡竝暗號の規定等相當複雜な規定を必要とするのであるが、今玆に說明することは省略する。

軍との通信は無線小隊及野戰電信隊等に依ることは勿論である。

11　其他の研究は省略する。

原案

第十一想定

決心

師團ハ本夜重點ヲ左翼ニ轉換シ明拂曉攻擊ヲ開始シ敵後續兵團ノ到著ニ先タチ前面ノ敵ヲ湖東平地ニ包圍殲滅セントス

處置

一、歩兵第四聯隊第一大隊（$\frac{1}{3}$iA、$\frac{1}{2}$1BA$_s$、無線機一ヲ屬ス）ヲ右側支隊ト爲シ本夜午後十時現在地出發上羽田、川合ヲ經テ佐久良川ニ沿ヒテ山上ニ向ヒ前進シ敵ノ不意ニ乘シ百濟寺方向ニ進出シ敵ノ背後ヲ攻擊セシム

二、騎兵聯隊（一部欠）ハ本夜現在地ニ在リテ師團ノ右側ヲ警戒スルト同時ニ右側支隊ノ行動ヲ掩護シ明拂曉師團ノ攻擊ニ際シテハ右側支隊ノ成果ヲ利用シ成ルヘク速ニ愛知川右岸地區ニ進出シ爾後右側支隊ヲ併セ指揮シ敵ノ背後ヲ擾亂セシム

三、歩兵第二聯隊第三大隊（$\frac{1}{3}$iA、7A ヲ屬ス）ハ右側掩護隊トナリ八日市及其西方高地ヲ占領シ師團ノ右側ヲ掩護セシム主力ノ戰況進展ニ伴ヒ適時前面ノ敵ヲ攻擊シ爾後右翼隊長ノ指揮ヲ受ケシム

四、歩兵第二聯隊（III、$\frac{1}{3}$iA 欠）ハ暫ク現在地ヲ固守シ明二日午前一時現在線ヲ撤シ糠塚附近ニ集結シ師團ノ豫備タラシム（集結完了後一大隊毎ニ逐次前進シテ師團ノ左側ニ移ラシム）

五、歩兵第一旅團（2i ヲ欠キ $\frac{1}{16}$1K、1BA$_s$（$-\frac{1}{2}$）ヲ屬ス）ハ自今右翼隊トナリ本夜現在線ヲ固守シ明二日午前四時半當面ノ敵ヲ攻擊セシム

六、歩兵第二旅團（I.$\frac{1}{3}$iA/4i ヲ欠キ $\frac{1}{16}$1K、IBA$_s$（-1）、$\frac{1}{4}$1P ヲ屬ス）ハ自今左翼隊トナリ本夜現在線ニ攻擊ノ諸準備ヲ完了シ明二日午前四時半敵ノ右翼ヲ包圍スル如ク攻擊セシム

七、兩翼隊ノ戰鬪地境ヲ左ノ如ク變更ス

築瀨北端、市南端、西出南端、圓城寺南端ヲ連ヌル線

八、野砲兵第一聯隊（第七中隊欠）ハ主力ヲ以テ新堂、宮莊、佐生以西ノ地區ニ、一部

ヲ以テ能登川東北地區ニ陣地ヲ占領シ其主火力ヲ左翼隊正面ニ、狀況之ヲ要スレハ右翼隊正面ニ指向シ得ル如ク火力ヲ準備シ主トシテ左翼隊ノ戰鬪ニ協力セシム

戰鬪初期山砲兵大隊ノ陣地進入及射撃ヲ區處セシム

九、工兵大隊(一部欠)ハ自今砲兵隊ノ陣地占領ヲ援助シ爾後主力ヲ以テ左翼隊ノ戰場作業ニ任セシム

一〇、第二野戰高射砲隊ハ能登川附近ニ陣地ヲ變換シテ、第一野戰高射砲隊ハ現在地ニ在リテ防空ニ任セシム

一一、安樂寺—須田—下豐浦道ノ通過順序ヲ左ノ如ク規定ス

歩兵第二旅團司令部、4i(-I.$\frac{1}{2}$iA)、IBA$_{II}$(-I)、2AA、2i(-III.$\frac{1}{2}$iA)

一二、飛行中隊ハ師團ノ指揮連絡、砲兵任務ニ服シ一部ヲ以テ赤坂方向ノ敵情捜索ニ任セシム

一三、師團通信隊ハ師團司令部ヲ基點トシ兩翼隊、右側支隊、右側掩護隊、砲兵隊、豫備隊間ノ連絡ニ任セシム

一四、無線小隊ハ軍トノ連絡ニ任セシム

無線機一ヲ右側支隊ニ配屬ス

一五、大行李、輜重略ス

一六、軍司令官ニ決心、處置ノ大要ヲ報告ス

一七、其他省略

第十一想定

第十二想定

所要地圖　二十萬分一　岐阜、名古屋、京都及大阪、山田、和歌山
五萬分一　水口、京都東南部、同西南部、上野、奈良、大阪東北部
名張、櫻井、大阪東南部、高見山、吉野、五條

一、南勢沿岸ニ上陸セシ第一軍（三師團ヲ基幹トス）ハ敦賀方向ヨリ湖東平地ヲ經テ南進シ雲出川左岸地區ニ陣地ヲ占領セル劣勢ナル敵ニ對シ攻撃準備中ナリ

二、奈良平地方面ヨリ第一軍ノ作戰ヲ容易ナラシムヘキ任務ヲ以テ紀ノ川河谷ヲ東進セシ第一師團（駄馬編制ニシテ IA、½RSt、1FM ラル）ハ彦根方向ヨリ前進セシ略、其他若干部隊ヲ配屬セ同等ノ敵ト十一月十日早朝御所町北方地區ニ於テ遭遇シ戰況有利ニ發展シ逐次敵ノ右翼ヲ包圍シツツ之ニ多大ノ損害ヲ與ヘシモ勝敗ヲ決スルニ至ラスシテ夜ニ入ル

三、師團長ハ現在ノ態勢ヲ以テ夜間攻撃ヲ續行スルニ決シ之ニ關シ部署スルトコロアリシカ正子迄ニ御所町北端ニ於テ左記狀況ヲ知得シ直ニ敵ヲ追撃スルニ決ス

イ、午後十時ヲ期シテ決行シタル夜襲ハ敵ノ頑強ナル抵抗ニ會シ大ナル成功ヲ收ムルニ至ラサリシモ各部隊ハ再度ノ攻撃ヲ準備スルト共ニ嚴ニ敵ト接觸ヲ保持シアリシカ正子稍、前敵兵退却ノ徵アルヲ察知シ直ニ獨斷追撃ニ移レリ正子ニ於ケル彼我一般ノ態勢概ネ別紙要圖（附圖第十四）ノ如シ

ロ、一師團ヲ下ラサル敵ハ彦根方向ヨリ南進中ニシテ本日日沒頃其先頭ヲ以テ八日市ニ達セリ

ハ、歩、騎兵ヨリ成ル敵ノ一部ハ請取峠（名張町南方約五里）附近ヲ占領

ゼル我カ後備部隊ト相對峙シアリ

ニ、我カ第一軍ハ明十一日朝攻撃ヲ開始スル豫定ナリ

ホ、新ニ師團ニ配屬セラレタル歩兵第五聯隊ハ紀ノ川河谷ヲ急行中ニシテ本日午後五時其先頭ヲ以テ粉河町東端ヲ通過セリ

ヘ、地形ノ概況

奈良平地ニ於ケル河川、溝渠及水田ハ諸兵ノ通過容易ナリ

森林ハ部隊ノ運動ヲ妨ケス又片點線路ハ野砲ノ通過ヲ許ス但山地ヲ通スルモノハ若干ノ工事ヲ要ス

問題

第一師團追撃部署

正子ニ於ケル處置ト爾後ノ腹案トヲ區別シ要圖ヲ以テ答解スヘシ

總評

時恰も秋季演習の爲多忙なりしに拘らず答解者二百餘名の多きに達せしは、國軍の爲慶賀に堪へず、出題者の大に滿足するところである。而して本問題に對する答解者の考案たるや實に多種多樣であるから、各案に就き研究することは到底其煩に堪へざるを以て、單に概評に止める。從つて各案者は各人の答案と對照し研究せられんことを希望する。

一、敵情判斷に就て

凡そ或種の策案を立てんとせば先づ敵情を判斷せねばならぬ、又敵情判斷を爲すには其都度目的が存するのであることは、諸官の既に熟知せらるるところである。卽ち追撃の方針を確立し部署を決定するには、先づ師團當面の敵の退却に關し的確なる判

斷を行ひ、以て其弱點を看破し、之に乘じ最も有利なる追擊を行ひ、以て敵を捕捉殲滅せねばならぬ。

師團當面の敵は其本軍の側背を安全ならしむる爲積極的行動に出で、師團の御所町附近の隘路進出に乘じ猛烈なる攻勢を取つたのである。然るに本日の遭遇戰に於ては師團を隘路內に壓迫することが出來ず、却て逐次其右翼を包圍せられて、日沒頃迄に多大の損害を受けて高田町南方の平地に押し返へされ、玆に敵軍當初の積極的企圖は明に挫折したのである。加之我が增加部隊は遲くも明日午前中には古市方面に進出し敵の側背に迫り得るの態勢に在るを以て、敵が明日現戰場に於て攻擊を行ふことは、頗る不利であるから、速に此不利なる態勢から脫逃し、爾後の攻勢を企圖する爲、退却を敢行したのである。敵軍退却の動機は以上の如くなるが故に、其退却は計畫的のもので、所謂隨意退却と認むべきものである。併しながら、午後十時に決行せし師團の夜襲が各方面に於て頑强なる抵抗に會したことから判斷すると、敵第一線部隊の撤

退は、其以後正子近くまでの間に開始せられたことは明である。從つて師團の各部隊の獨斷追擊は、敵軍主力の退却開始後遲くも二時間以內に決行せられたのであるから、敵の退却は夜間に於て隨意に行はれたりと雖、我に肉迫せられ、甚だ困難なる狀態に在つて、且隊伍も相當に混亂せることは、判斷に難くないのである。但幾何の程度に敵主力に肉迫して居るかと云ふことは不明であるが、師團は、夜間と雖猛烈放膽なる追擊を決行し、肉迫の度を緩めず、敵を壓迫をして益〻其退却を困難ならしむるの著意が肝要である。答解者中敵の退却動機及退却開始時機に關する判斷適切深刻ならざるため、其退却行動頗る容易なる如く判斷せしもの、或は頗る困難にして容易に捕捉し得る如く斷定せしものありしも、共に適當でないでない。現下に於ける敵の退却狀態が右の如くであるから、彼我一般の態勢竝地形上敵軍主力は現在の正面と直角の方向に退却する外はない。卽ち平地方面を先づ櫟本若は奈良附近の地區に退却せざるを得ないのである。併しながら、有力なる一部を萬難を排して櫻井方向に退却せしめんと勉むるこ

とは、櫻井—名張道の價値に鑑み、敵として至當のことである。然るに答解者中此判斷を缺き、敵が櫻井—名張道を開放する如く判斷せしものが比較的多かつたのは遺憾とするところである。

次に標本若は奈良附近の地區に退却せし敵主力の爾後に於ける行動及企圖を判斷することが緊要である。之が爲には是非共全般の戰略關係を研究せねばならぬ。

湖東平地を南進中なる敵の後續兵團は、雲出川河畔に在る其本軍が明日より約三師團より成る我が第一軍の攻撃を受けんとする狀況に鑑み、師團當面の敵が危機に瀕せざる限り本軍方面の戰鬪に參與するものと判斷するのが、戰略上至當である。而して此敵が本戰に參與する爲關方面に行動するや將又上野平地方面殊に青山峠方面より我が第一軍の左翼に向ふ如く行動するやは斷定し得ざるも、師團當面の敵が上野平地を確保することは、敵の爲當に其本軍の側背掩護の爲必要なるのみならず、右に述べた る增加兵團の行動を自由ならしむる爲にも緊要であるから、師團當面の敵は少くも上野平地を確保するに勉むるは明であると共に、若上野平地にも停止し得ざるが如き狀況を現出するに於ては、增加兵團の主力を師團の方面に分割することも敢て惜まぬであらう。答解者中敵增加兵團の主力が奈良方面に使用せらるる如く判斷せしもの比較的多數なりしは、戰略上の判斷に缺くるものにして、同意が出來ない。又敵本軍の背後連絡線は主として湖東平地を通ずる道路に設置せられて居ることは判斷に難くない、勿論北部伊勢平地を經て關ヶ原に通ずる道路にも一部の施設を有するならんも、今直に湖東平地の施設を撤することは到底不可能であるから、師團當面の敵は奈良平地より湖東平地の東南部に通ずる道路をも掩護せねばならぬのである。右の如く判斷するときは師團當面の敵は地形一般の觀察上奈良平地に停止し該平地に於て更に攻勢を企圖するの公算が有る。而して之が爲には一部を以て三輪附近の要地を確保せしめ主力は奈良附近の要地を占領して攻勢動作に出づるを至當とする。併しながら現戰場より奈良附近迄は五、六里に過ぎず且地形平易にして夜間と雖追撃動作比較的困難な

らざるのみならず、敵軍の退却甚だ困難なる現況に鑑みるときは、師團の追撃にして、猛烈果敢に行はれ且爾後順調に進捗するに於ては、敵主力が奈良平地に停止し得るの可能性は疑問たらざるを得ないのみならず、斯くすることは寧ろ我の欲するところである。故に師團當面の敵が奈良平地に於て後圖を策する公算小にして、上野平地に後退し該平地の確保に勉むると共に、一部を以て奈良、上野兩平地間の山地に於て歩々の抵抗を試み、且木津―朝宮―水口道を掩護せしむるを至當とする。奈良若は櫟本附近に退却せし敵主力が上野平地に退却する爲利用すべき道路は、概して櫟本―東山―月ヶ瀬―上野道及奈良―笠置―上野道の二あるも、地形特に道路の價値竝退却の狀態に想到せば、其大部は後者に依るものと判斷せらるるのである。

之を要するに師團當面の敵は夜暗を利用し隨意退却を企圖したが、師團各部隊の爲近く追躡せられ退却行動困難にして、其希望する奈良平地に於て後圖を策することは實施頗る困難にして、一擧上野平地に後退し該平地の確保に勉むる公算が最も大であ

る。答解者中敵の退却狀態に關し的確なる判斷を缺き、其全力を以て奈良附近に停止すべしと斷定したるもの比較的多數なりしは遺憾である。

二、追撃の方針及追撃目標に就て

追撃の方針とは、追撃目標を選定し、敵を急追して該線に到達する迄に追撃の主眼即ち速に敵を捕捉して殲滅する爲には如何に追撃を指導すべきやの大綱を定むるのである。而して追撃目標は、敵軍退却の動機及其狀態、退却開始の時機等を考慮し、容易に敵を捕捉し得る場合の外、勉めて遠き地點に選定すべきことは、原則の示すところである。而して前者は戰鬪の成果極めて大にして且戰場の後方近距離に於て敵を完全に包圍し得るが如き態勢を以て追撃に移り得るか、或は近く後方に大なる地障ありて一擧に之に向ひ敵を壓倒し得るが如き場合である。本狀況に於て師團の追撃は其初動に於て頗る有利にして、敵の退却は決して容易でないことは、既に研究した通りで

あるが、敵を近く完全に包圍し得るが如く有利でなく、戰鬪の成果も亦極めて大と謂ふことは出來ない、戰場の後方には木津川、名張川或は相當嶮難なる奈良東方の山地を有するも、大なる地障とは謂ひ難く、又戰場に近いとも謂へない、而も敵情判斷前項研究の如くであるから、戰場に近き地點に於て捕捉殲滅することは過望と謂はざるを得ないのみか、却て敵を逸するの虞がある。故に答解者中奈良附近又は其以南に追擊目標を選定せし案には同意が出來ない。寧ろ本狀況に於ては追擊目標は勉めて遠き地點に選定するを適當と認める。之が爲水口附近横田川の線に追擊目標を選定することは、大に望むところであるが、上野平地にも停止し得ざることは敵としては到底其苦痛に堪へぬところであるから、師團當面の敵は萬難を排し少くも上野附近の要地を保持しようとすべく、之が爲已むを得ざれば增加兵團主力の分割をも惜まざるべきは、敵情判斷に於て說明した如くであつて、而も敵增加兵團の該地到著は師團の進出に先だつものと判斷せらるるが故に、一擧に横田川の線に向ひ追擊することは適當で

ない。而して上野附近は、地形特に交通網の狀態を觀察するときは、奈良平地より上野平地に通ずる諸道路の集合點であるから、奈良平地に於て捕捉し得ざりし敵を捕へるには、最も有利なる地點である。加之第一軍方面の狀況切迫せるに鑑み、師團の該地附近進出は、敵本軍の側背に大なる脅威を與へ、且敵情判斷で逃ぺた如く敵增加兵團の行動特に進路を制限し得べく、明日開始せらるる第一軍の攻擊に有效なる協力を爲し得るのである。故に出題者は現下に於ける極めて有利なる追擊の初動を利用して敵主力に對する肉迫の度を益、擴大する如く敵を急追して、之をして奈良平地に停止するを得ざらしめ、且敵を奈良附近或は笠置附近の地區に於て捕捉するに勉めつつ上野に向ひ追擊し、該地附近に於て完全に捕捉殲滅の目的を達する如く其目標を選定し且追擊するを最も適當と認めるのである。而して尙既に逃ぺたる如く師團追擊の初動は有利にして敵主力に肉迫し敵の退却は困難なりと判斷し得るを以て、敵主力をして奈良附近に於て態勢を整頓するの餘裕を與へざるは勿論、地形特に交通網の狀態を併

せ考察せば、奈良方向に退却せし敵主力が同地附近に於て九十度に近き右旋回を爲しつつ上野に向ひ退却する時機に於て、或は爾後笠置附近の地障を通過するの時機に乘じ、諸方面より包圍して之を捕捉殲滅し得るの公算は相當ある。併しながら他面より觀察せば、敵主力に對する肉迫の程度明確でないばかりか、多少困難なりと云ふもの の敵の退却は大體に於て隨意退却であつて、而も夜間であるし、又既に研究した如く此敵が奈良平地に於て後圖を策することは困難にして已むを得ず一擧上野に退却する公算が最も大であるから、答解者の多數の案の如く奈良若は木津川に於て捕捉殲滅し得るものと斷定するのは、動もすれば敵を逸するに至るもので、適當でない。出題者は右に逃べた地點と時機とに於て捕捉殲滅の好機を捉ふる如く著意しつつ上野附近に向つて追擊し、此等綜合的成果を以て追擊の主眼を達成する如く方針を確立するのが本狀況に於て最も適當であると信ずる。

諸君の答解に於て、師團主力を以て先づ奈良附近に向ひ追擊し、爾後狀況に依り上野に向はんとするものあるも、此の如きは結局敵をして上野平地に後退し該平地を確保し得しむるものであつて、追擊の氣魄に於て缺くるところが夥しい。從つて出題者の同意し難いところである。

三、戰場追擊に就て

凡そ追擊は所謂戰場追擊と戰場外に於ける縱隊追擊とに區別するが、兩者の限界は固より劃然たるものでなく、戰場追擊の道程に於て縱隊追擊が準備せられるのである。而して師團の追擊は既に研究した方針に基き指導するのであるから、戰場及戰場外の追擊を敢行せねばならぬ。卽ち師團長は正子敵の退却、各部隊の獨斷追擊を知得したならば、直に所要の指示を爲して各部隊の追擊を統轄すると共に速に遠大なる縱隊追擊の腹案を確立して、各部隊が戰場追擊の目標線に到達する迄に、機を失せず之を命じ、以て敵に寸隙をも與へざることが肝要である。卽ち戰場追擊は戰鬪の延長連

續であると共に、又戰場外追擊の準備であるから、猛烈果敢に行はれつつある各部隊各個の獨斷追擊を阻害せざる程度に於て、爲し得る限り師團長の企圖に基き統制し、追擊の效果を益〻擴大すると共に、縱隊追擊を部署するに便なる如く指導せねばならぬ。故に戰場追擊に於て研究すべき主要なる事項は、各部隊の獨斷追擊を何れの地點迄如何なる程度に其行動を統轄するかに歸著する。之が爲には既に研究した敵情及地形の判斷を必要とする。

1　戰場追擊の限界

敵軍戰場離脫の狀況を觀察すると、地形特に交通網の狀態から見るも、又夜間に於ては第一線を撤退せる部隊を速に掌握するを要する點から言ふも、師團當面の敵は殘置部隊或は更に爾傍、雲梯の線に於ける一部の掩護下に、先づ八木附近の地區に集結したる後爾後の退却を部署すべく、又敵軍退却の動機及其狀態、退却開始の時機等に關しては前述の如くであり、師團各部隊の獨斷追擊は敵主力に近く追躡して行はれて

居るから、敵の退却は困難であつて相當に混亂して居るものと判斷し得る現況に鑑み、時機は夜間であるが、八木、高田の線までは猛烈果敢なる追擊を續行せしめて、該地附近に於ける敵の集結を妨害し、三輪方面に通ずる敵の退路を遮斷し、敵を捕捉殲滅するに勉めねばならぬ。又夜間の追擊は地形比較的平易であつても、自然道路及之に沿ふ地區に於て行はるるのみならず、動もすれば隊伍が紊亂し易いから、指揮官は特に部隊の掌握及連絡に勉むることが緊要である、八木、高田の線は地形特に交通網の關係上右の要件に適合し爾後の縱隊追擊を準備するに有利である、故に戰場追擊の限界線は八木、高田の線が適當である。答解者中八木、高田の線以北に選定したるものあるも、夜間に於ける部隊の掌握及連絡から言うて同意し難い。又現戰線附近より直に縱隊追擊に移る考案は、機宜に適せる各部隊の獨斷追擊の現況を無視し、追擊の主眼を沒却した作業である。

2　戰場追擊に於ける部署

夜間であつて而も各部隊は敵に近く獨斷追撃を決行しつつある現況であるから、著しき部署の變更は、却て追撃の氣勢を減殺し、敵に餘裕を與ふるもので、避けねばならぬ。諸官の答解に於て師團追撃の重點を右翼隊方面に移し櫻井方面に向ふ敵の退路を遮斷せんとするものは、既に研究せし敵情判斷に基き、敵をして櫻井—名張道を開放せざるを得ざらしめ、捕捉殲滅を容易ならしむる所以であつて、其著意には大に同意を表するのであるが、夜間追撃中の第一線より兵力を抽出して此要求を充足せんとするもので、巧妙に過ぎ、實施困難に陷り、之が爲却つて隊伍混亂し、且正面の强壓力を減殺して敵に脫逸の餘裕を與ふるものであるから、適當でない。故に右翼隊は概ね現在の態勢を以て追撃せしむるを可とするけれども、櫻井方面に向ふ敵の退路を遮斷する爲百方手段を講じなければならぬ。

櫻井—名張道方面に敵の一兵をも退却し得ざらしむることは、敵の奈良附近に於ける企圖を挫折し、且上野附近に於ける捕捉殲滅を容易ならしむべき第一歩である。此目的が達成せられたならば、奈良方面に退却する敵主力は其左側背に大なる脅威を受くるのみならず、上野平地の門戸を開放するに至るのである。故に右翼隊をして速に八木東方地區に進出せしむると共に、其一部及騎兵隊をして櫻井附近の陸路口を奪取せしむることが肝要である。師團の豫備隊を此目的に使用することは、却て戰機を逸するから、適當でない。又前記の目的達成を容易ならしめ且八木附近に於ける敵の集結を妨害する爲、戰場機動迅速にして且威力大なる砲兵隊の一部を以て、八木東端附近に交通遮斷射撃を實施せしむるを要する。但夜間であるから友軍に危害を及さざる爲右翼隊及中央隊とは特に緊密なる連絡を要するは勿論である。此際工兵隊は戰場一般の地形が平易で、歩兵の追撃行動を妨害するものがないから、其主方は砲兵爾後の前進援助及掩護に使用し、其一部を各翼隊に配屬せしむるを可とする。

四、縱隊追撃に就て

縦隊追撃は、既に研究したる追撃の方針に基き、戦場追撃に於ける効果を擴大し、敵を捕捉殲滅する爲の追撃部署卽ち主として縦隊區分及進路を研究するのが肝要である。

1　戰場追撃當初の部署

比較的集結し且進出に便なる部隊を以て速に追撃隊を編成し、敵を包圍し或は其退路を遮斷する如く使用することの緊要であることは、原則の明示するところである。從つて此際師團豫備隊は僅少なるも其使用に就ては大に研究を要する。諸官の答解には之を中央隊の正面若は左翼隊方面に使用し戰場追撃に任ぜんとするものが少くないが、既に追撃方針に於て研究した如く、當面の敵を捕捉殲滅することは戰場附近に於ては困難であつて、寧ろ爾後の縦隊追撃間に於て其機會が多いのであるから、敵の配備の手薄となり易い左翼方面より敵の後方に深く突入せしむることが肝要である。諸官の答解中には又之を櫻井附近の隘路口奪取に使用したのも少くないが、既に述べた

如く時機を失する虞大なるのみならず、該方面は敵の頑強なる抵抗を受くる公算が大であるから、深く侵入することは左翼方面に比し困難である。又師團豫備隊を以て戰場追撃に關係なく直に縦隊追撃を行はしむることは、八木、高田の線に進出する迄に於ける敵の抵抗竝該線附近に於ける部署變更に依り免れざる追撃の遲緩を補ひ、且敵主力の退路を遮斷して師團主力の爲追撃の進捗を圖り、敵の捕捉を容易ならしむる所以である。以上の理由に依り、師團豫備隊は、之に一部の砲兵を配屬し當初より追撃隊として敵の抵抗薄弱なりと判斷せらるる御所—王寺—木津道方面より追撃目標に向ひ前進せしむるを適當とする。騎兵隊の主力は敵を包圍し或は其退路を遮斷する如く使用するのが原則であつて、既に研究した如く、先づ右翼隊の一部と協力して櫻井附近の隘路を奪取せしむることが肝要であるが、爾後之を如何に使用するやは研究を要する。諸官の答解には、退路遮斷の目的を以て之を櫻井—萩原—笠置道方面若は櫻井—丹波市—奈良道方面に使用する考案が多いが、前者は道路網の關係では容易に敵主

力の退路に迫り得るやうでも、既に敵情判断に於て述べたる如く、該方面は敵の頑強なる抵抗を豫期せねばならぬ、又後者は敵の間隙を突破せんとするもので、概して正面追撃であるから、共に機動性を發揮し敵に先んじて其退路に進出するの可能性は少いのである。而して退路を遮斷せんが爲には、敵に先んじて月ノ瀬、笠置の線に進出し名張川の渡河點を占領するのが先決問題であることは、異存のないところであるから、最も迅速容易に該線に進出し得る方面に行動せしむることが緊要である。丹波市附近は、敵の配兵手薄となり易き方面であることは敵情判斷に依り明瞭であつて、而も笠置街道に通ずる數條の山徑を有するから、騎兵隊の主力は此方面に使用するのを最も適當と認める。而して之に一部の歩、砲兵を配屬することは、敵情判斷上其必要少く、寧ろ其特性發揮を阻碍するから、避くべきである。

2　戰場追撃後の部署

八木、高田の線に向ひ追撃した師團は、爾後主力を以て奈良—月ノ瀬—上野道を上

野町に向つて追撃せしむるを適當とする。何となれば、敵主力をして奈良附近に停止するを得ざらしめ、且奈良及笠置附近に於て爲し得る限り敵を捕捉するの好機を捉へつつ上野平地に進出するには、主力を此方面に保持し敵主力に强壓を加ふる如く追撃するを要するからである。

諸官の答解に於て師團主力を以て櫻井—名張—上野道或は櫟本—東山—月ノ瀬道方面より追撃する考案は、敵主力に對する强壓力を減殺し奈良附近の停止を可能ならしむるに至るもので、適當でない。

師團主力を以て正面より强壓を加ふると同時に成るべく廣く諸道路を利用し包圍的に追撃することが肝要である。殊に奈良、上野兩平地間の地形は山地であつて、歩々の抵抗を豫期しなければならないから、主力の正面よりする追撃を有利に進捗せしめ敵を捕捉殲滅する爲には櫻井—名張—上野道及櫻井—櫟木—東山—廣瀬—上野道には一部隊を前進せしむるを可とする。就中櫻井—名張—上野道方面には有力なる部隊を

前進せしめ、以て敵の退路を遮斷せしむるを適當とする。是等各部隊には山砲及工兵の一部を配屬すべきこと勿論である。而して山砲は其運動性に鑑み速に追擊隊長の指揮に入らしむるを要する。

五、增加部隊の使用に就て

增加部隊たる歩兵第五聯隊は急行中であるが、早くも明十一日朝でなければ御所町北方地區に到著することが出來ないのであるから、諸官の多數の考案の如く該隊を追擊隊として櫻井―名張―上野道若は奈良方面に使用することは適當でない。而して增加部隊は、敵若奈良附近に停止し後圖を策するが如き狀況に於ては、之を該方面に使用するを要するも、敵にして我が判斷の如く一擧上野平地に後退し該平地に占據するに至らば、捷路を經て速に上野平地に進出せしむることが必要であるが、諸官の如く今直に之を決することは過早である。宜しく先づ速に八木町附近に前進せしめたる後、

當時の狀況に應じ最も適切に使用するのが至當である。

附言

此問題は、夜間隨意退却を企圖せる敵に對し師團各部隊の獨斷追擊機宜に適し敵の退却相當困難なる場合に於ける夜間追擊を構成し、追擊目標、追擊指導の大綱竝戰場追擊限界の決定を主要なる研究項目としたのである。而して此等の決定に方つては、先づ詳密適切に全般の狀況特に敵情を判斷して其正鵠を得ると共に其弱點を看破することが緊要であることを、銘心されたいのである。

原案

方針

師團ハ敵ヲ捕捉殲滅スル目的ヲ以テ上野町ニ向ヒ追擊ス之ガ爲極力奈良、笠置間ノ地

區ニ於テ之ヲ捕捉スルニ勉ム

戰場追擊當初ニ於ケル處置

一、歩兵第四聯隊第三大隊(舊師團豫備隊)ニ騎兵ノ一部、山砲兵一中隊及工兵一小隊ヲ配屬シテ左追擊隊ト爲シ御所—王寺—郡山—木津—笠置—上野道方面ヨリ上野町ニ向ヒ追擊セシム

二、騎兵隊ノ主力ヲシテ右翼隊ノ一部ノ櫻井附近隘路口ノ奪取ニ協力セシメタル後丹波市、福住、東山、笠置ヲ經テ上野町ニ向ヒ追擊シ敵ノ退路ヲ遮斷セシム

三、右翼隊ニ工兵一小隊ヲ配屬シ其主力ヲ以テ八木ニ向ヒ追擊シ其大部ヲ八木東側地區ニ集結セシム

特ニ一部ヲ以テ騎兵隊ト協力シ櫻井附近ノ隘路口ヲ奪取セシム

四、中央隊ニ工兵二小隊ヲ配屬シ曾我、曲川ノ線ニ向ヒ追擊シ其主力ヲ曾我東北側地區ニ集結セシム

五、右翼隊ト中央隊トノ戰鬪地域ノ境界ヲ雲梯東端、今井西北端ヲ連ヌル線ニ延長ス

六、左翼隊ヲシテ笛堂及曲川ノ各西北端ヲ連ヌル線以西ノ地區ヨリ曲川(含マス)、松塚村ノ線ニ向ヒ追擊シ敵ノ右翼ヲ包圍シ且其退路ヲ遮斷セシメタル後其主力ヲ松塚村東南側地區ニ集結セシム

七、砲兵隊ヲシテ一部ヲ以テ八木町附近、主力ヲ以テ曾我、曲川間ノ地區ニ交通遮斷射擊ヲ實施シテ各翼隊ノ追擊ニ協力シタル後今井町ニ向ヒ前進セシム

山砲兵一中隊ヲ卽時師團豫備隊長ノ指揮ニ入ラシム

八、工兵隊ヲシテ其主力ヲ以テ砲兵隊ノ前進ヲ援助セシメ各一部ヲ前記ノ如ク配屬セシム

縱隊追擊ノ爲ノ腹案

一、右翼隊ノ主力(歩兵二大隊、山砲兵二中隊、工兵一小隊)ヲ右側支隊トシ八木—櫻井—名張—上野道ヲ上野ニ向ヒ追撃シ敵ノ退路ヲ遮断セシム

二、右翼隊ノ一部(歩兵一大隊、山砲兵一中隊)ヲ右追撃隊トシ櫻井—榛本—東山—廣瀬—上野道ヲ上野ニ向ヒ追撃シ敵ノ退路ヲ遮断セシム

特ニ中追撃隊ト緊密ナル連絡ヲ保持セシム

三、中央隊ノ歩兵三大隊及山砲兵一大隊、工兵二小隊ヲ中追撃隊トシ八木—二階堂—奈良道及月ノ瀬街道ヲ上野ニ向ヒ急追セシム

特ニ左右兩追撃隊ト協力シ敵ヲ捕捉スルニ勉メシム

四、師團主力(歩兵五大隊、野砲兵一大隊、山砲兵二中隊及工兵大隊主力)ハ中追撃隊ノ後方ヲ續行ス

五、大行李及輜重ハ五條—御所—八木道ヲ明拂曉迄ニ先ツ八木ニ前進セシム

六、歩兵第五聯隊ハ紀ノ川河谷ヲ八木ニ向ヒ急行セシム

(左追撃隊及騎兵隊ハ前任務ヲ續行スルモノトス)

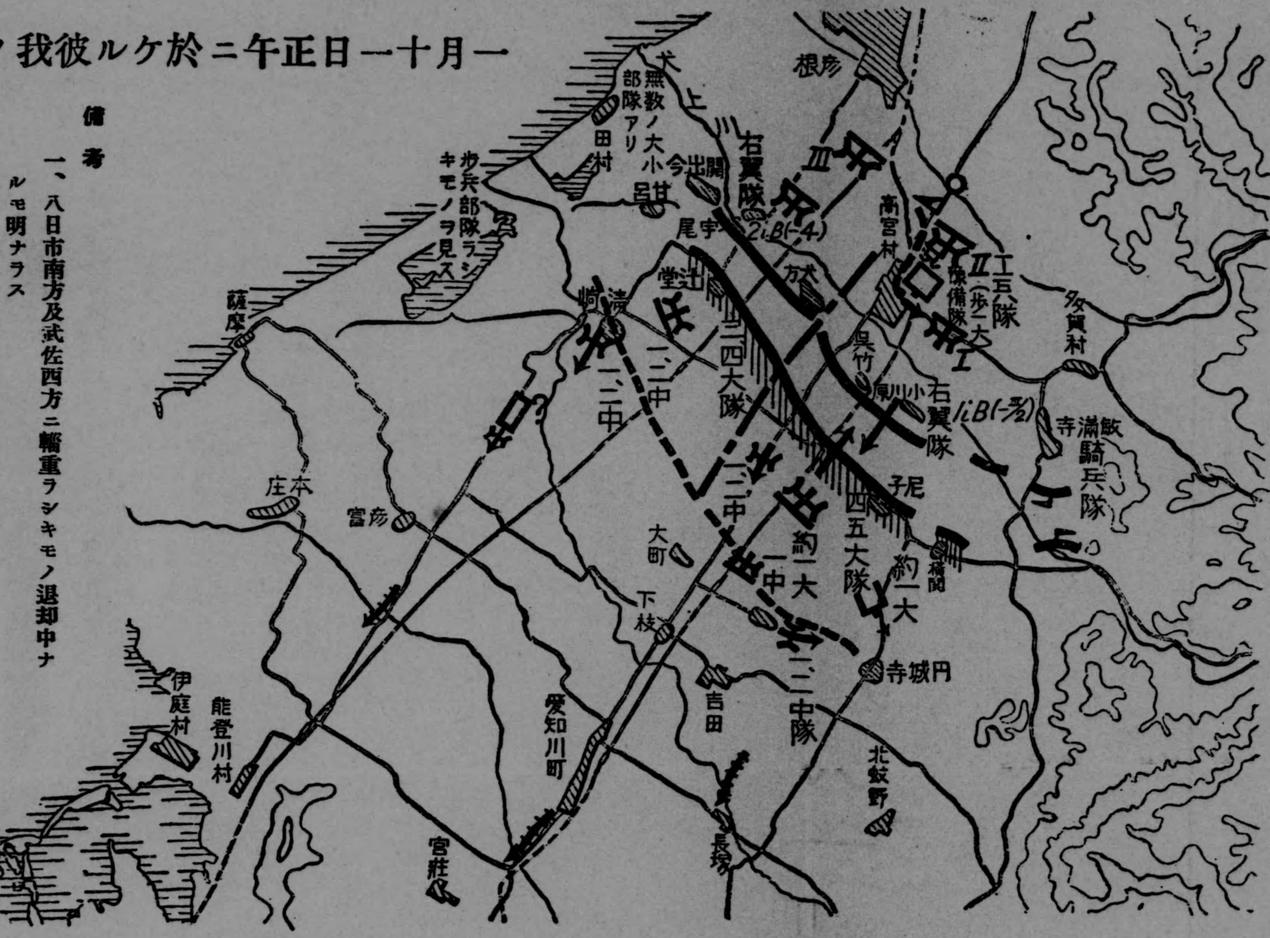
附圖第一

彦根町附近彼我態勢要圖

十二月一日午後三時頃ニ於ケル

附圖第二

一月十一日正午ニ於ケル彼我



一月十一日正午ニ於ケル彼我ノ態勢

備考

一、八日市南方及武佐西方ニ輜重ラシキモノ退却中ナルモ明ナラス

二、大行李及輜重ハ長濱町及馬渡以北ニ在リ

注意

兩翼隊ノ配備及狀態ハ適宜考定スヘシ

師團防禦ノ爲青野ヶ原附近地形判斷要圖

備考

一、前進部隊ハ本日晝間主陣地ナル如ク僞騙シ且明拂曉迄該陣地ヲ保持セシム但赤山北方高地ハ之ヲ固守セシム

二、騎兵旅團ニ歩兵一大隊ノ支援ヲ附シ速ニ當面ノ敵ヲ擊破シ遠ク美濃川河谷ノ敵情ヲ捜索セシム

附圖第三

判決

師團ハ饅頭森附近ヨリ高岡廢舍及新田北方高地ヲ經テ高倉附近ノ高地ニ亙ル間ニ陣地ヲ占領シ敵ノ青野ヶ原臺上ニ進出スルヤ歩、砲兵ノ協同困難ナルニ乘シ主力ヲ以テ左翼方面ヨリ攻勢ニ轉スルヲ要ス

右判決ニ基ク砲兵用法ノ概要

砲兵隊ハ本二日晝間青野ヶ原臺東端ニ近ク陣地ヲ占領シ敵ノ近接行動竝攻撃準備ヲ妨害シ本夜青野ヶ原西端附近ニ陣地ヲ變換シ明拂曉其主火力ヲ隨時大門西方高地竝高岡東北方地區ニ指向シ得ル如ク準備セシム

南軍第一師團長作戰指導要圖(於四月十六日午前九時以後)

附圖第四

彼我兩軍態勢要圖

（於三月一日前半夜）

備考

一、1Kノ各一小隊ハ鈴鹿峠及勅旨（大戸川河谷内長野ノ北方）附近ニ在リテ稍〻劣勢ナル敵騎兵ト相對峙シ師團ノ兩側翼ヲ警戒シアリ

二、1KBハ瀬田川左岸ニ在リテ本日午後四時頃瀬田川右岸地區ニ到著シタル歩兵三、四大隊、山砲七、八門ノ敵ノ渡河ヲ警戒シアリ

三、飛行中隊ハ長濱ニ飛行場ヲ有ス

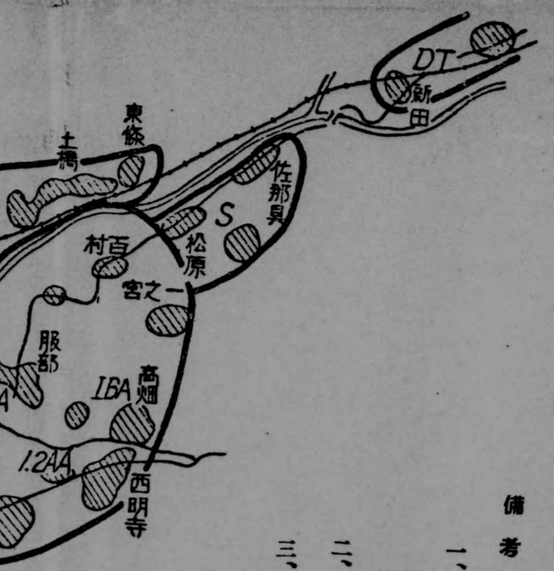
四、1FLハ水口ニ、2FLハ日野ニ開設シアリ

五、大行李ハ石原（日野西北方約三粁）ヲ、輜重ハ八日市北端ヲ先頭トシテ停止シアリ

附圖第五

上野町附近第一師團

（四月五日午後八時



備考

一、$1K\left(-\frac{2}{4}\right)$ハ桐山（奈良市東方約三里）附近ニ宿營シアリ

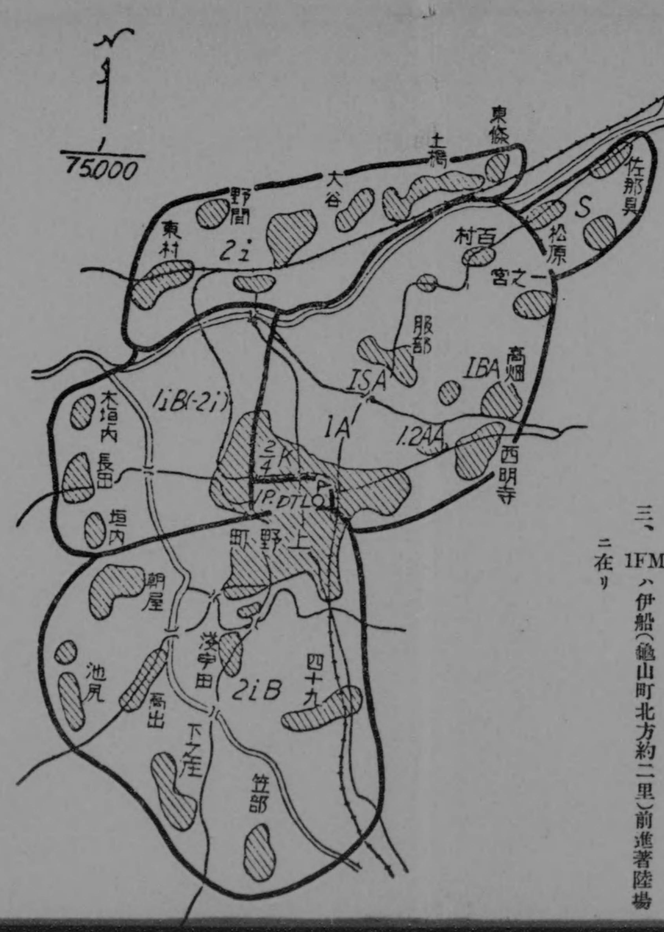
二、DTハ新田、上柘植間ニ宿營シアリ

三、1FMハ伊船（龜山町北方約二里）前進著陸場ニ在リ

附圖第五

上野町附近第一師團宿營位置要圖

（四月五日午後八時ニ於ケル）



備考

一、$1K\left(-\frac{2}{4}\right)$ハ桐山（奈良市東方約三里）附近ニ宿營シアリ

二、DTハ新田、上柘植間ニ宿營シアリ

三、1FMハ伊船（龜山町北方約二里）前進著陸場ニ在リ

備考

一、1Kノ各一小隊ハ鈴鹿峠及勅旨（大戸川河谷内長野ノ北方）附近ニ在リテ稍ミ優勢ナル敵騎兵ト相對峙シ師團ノ兩側冀ヲ警戒シアリ

二、1KBハ瀨田川左岸ニ在リテ本日午後四時頃瀨田川右岸地區ニ到著シタル歩兵三、四大隊、山砲七、八門ノ敵ノ渡河ヲ警戒シアリ

三、飛行中隊ハ長濱ニ飛行場ヲ有ス

四、1FLハ水口ニ、2FLハ日野ニ開設シアリ

五、大行李ハ石原（日野西北方約三粁）ヲ、輜重ハ八日市北端ヲ先頭トシテ停止シアリ

附圖第六

南軍第一師團長作戰指導要圖（於四月十六日午前九時以後）

一、方針

師團ハ敵ヲ攻撃スル目的ヲ以テ見瀨、川西、御所町北側ノ線及八木町、高田町ノ線ニ於テ所要ノ戰鬪準備ヲ整ヘタル後重點ヲ中央ニ保持シツツ丹波市、二階堂、額田部、法隆寺ノ線ニ向ヒ前進ス

二、指導要領

一、騎兵聯隊ニ歩兵第二聯隊第一大隊、野砲兵第一中隊ヲ附シ高田町附近ニ在ル敵歩、騎兵ヲ擊破シテ敵情ヲ捜索セシム

二、左縱隊前衛ヲシテ要圖ノ線ニ陣地ヲ占領シテ右縱隊及師團主力ノ隘路進出ヲ掩護セシメ以テ敵ノ攻擊ニ備ヘタル後師團ハ要圖ノ如ク縱隊區分ヲ變更シテ八木町、高田町ノ線ニ進出ス

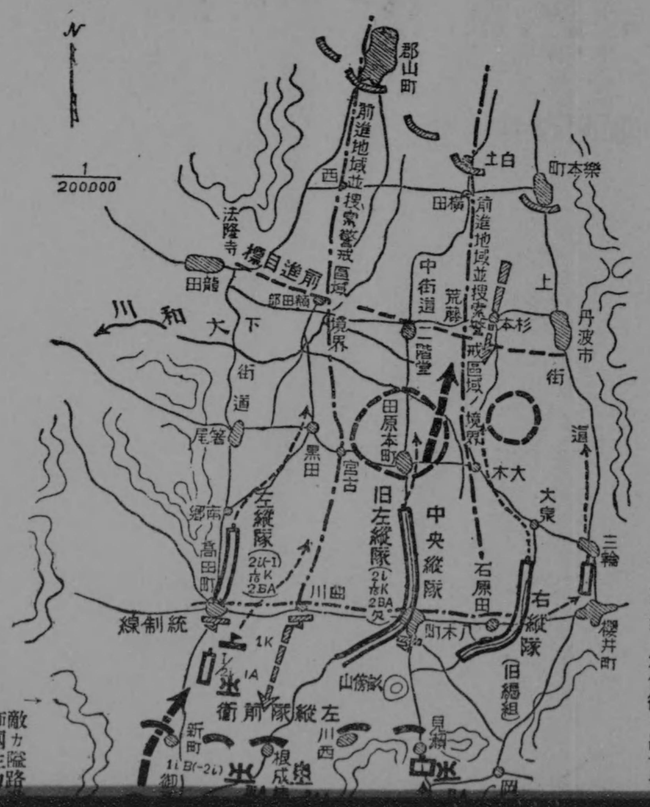
八木町、高田町ノ線ヨリノ前進ハ更ニ規整ス

三、前進間各縱隊ハ前進部隊ヲ先遣シテ迅速ニ敵ト接觸ヲ保持シ敵情ヲ捜索セシム

四、砲兵ハ各縱隊毎ニ攻擊準備ヲ整ヘテ前進セシム

五、工兵主力ハ師團長ノ直轄トシ主力砲兵ノ陣地進入ノ準備ヲ爲サシムル外機動的企圖ノ用ニ供ス

六、高射砲隊ハ要圖ノ陣地ニテ隘路進出ヲ掩護シタル後八木町、田原本町附近ニ躍進シテ防空ニ任セシム



備考

一、戰鬪ノ爲ノ前進間八木町及田原本町ニ情報

二、飛行隊ハ天候回復後敵後方ノ捜索ニ任セシ

三、先進輜重ハ先ツ西持田ニ、大行李ハ住川ニ停止セシム

四、通信ノ件略ス

附圖第四

彼我兩軍態勢要圖

（於三月一日前半夜）

備考

一、1K ノ各一小隊ハ鈴鹿峠及勅旨（大戸川河谷内長野ノ北方）附近ニ在リテ稍々先勢ナル敵騎兵ト相對峙シ師團ノ兩側翼ヲ警戒シアリ

二、1KB ハ瀬田川左岸ニ在リテ本日午後四時頃瀬田川右岸地區ニ到著シタル歩兵三、四大隊、山砲七、八門ノ敵ノ渡河ヲ警戒シアリ

三、飛行中隊ハ長濱ニ飛行場ヲ有ス

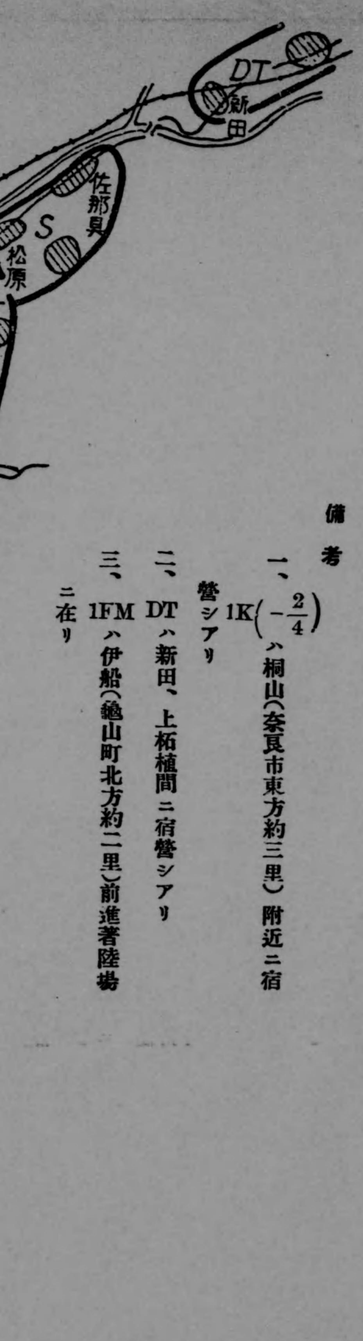
四、1FL ハ水口ニ、2FL ハ日野ニ開設シアリ

五、大行李ハ石原（日野西北方約三粁）ヲ、輜重ハ八日市北端ヲ先頭トシテ停止シアリ

附圖第五

上野町附近

（四月四）



備考

一、1K(-2/4) ハ桐山（奈良市東方約三里）附近ニ宿營シアリ

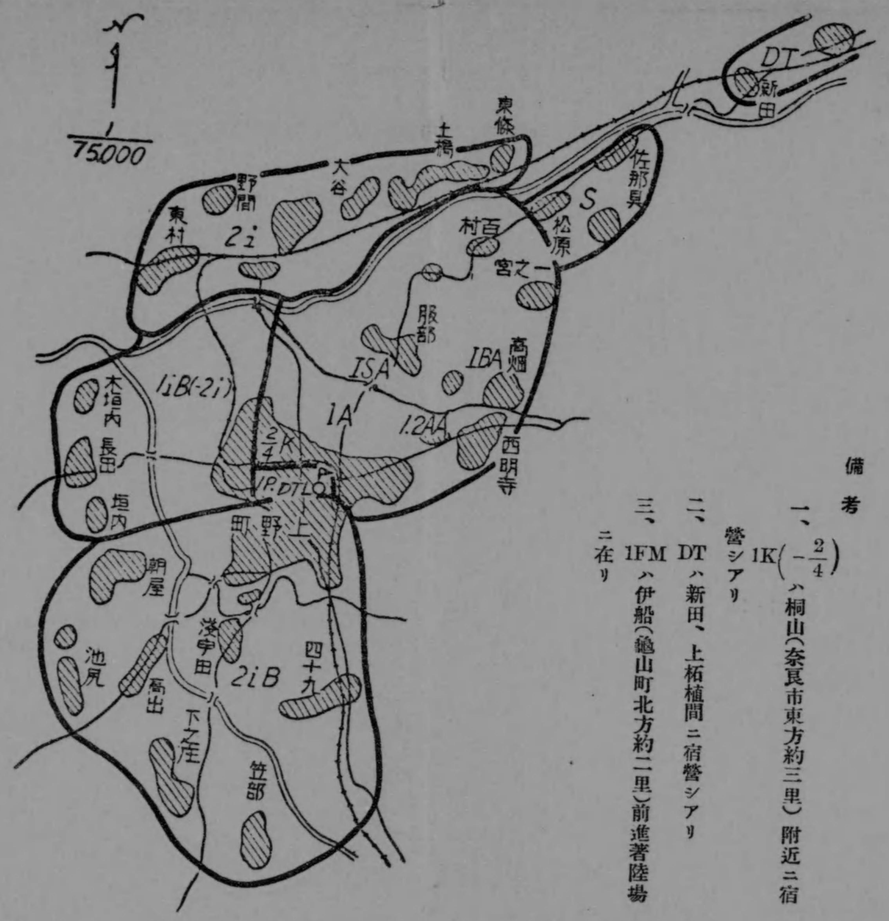
二、DT ハ新田、上柘植間ニ宿營シアリ

三、1FM ハ伊船（龜山町北方約二里）前進著陸場ニ在リ

附圖第五

上野町附近第一師團宿營位置要圖

（四月五日午後八時ニ於ケル）

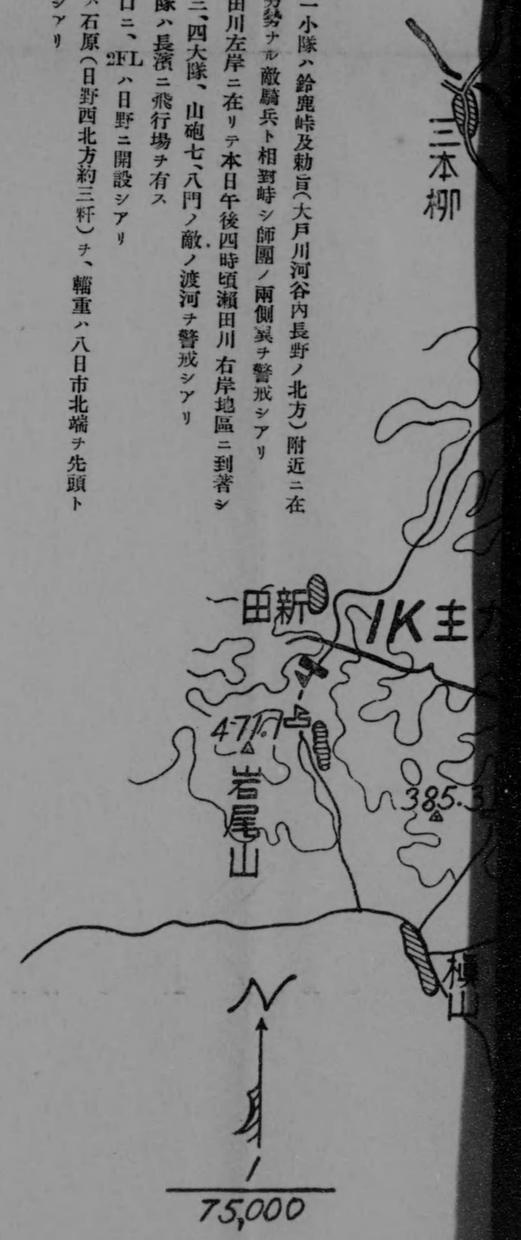


備考

一、1K（$-\frac{2}{4}$）ハ桐山（奈良市東方約三里）附近ニ宿營シアリ

二、DTハ新田、上柘植間ニ宿營シアリ

三、1FMハ伊船（龜山町北方約二里）前進著陸場ニ在リ



附圖第六

一、方針

師團ハ敵ヲ攻撃スル目的ヲ以テ見瀬、川西、御所町北側ノ線及八木町、高田町ノ線ニ於テ所要ノ戰鬪準備ヲ整ヘタル後重點ヲ中央ニ保持シツツ丹波市、二階堂、額田部、法隆寺ノ線ニ向ヒ前進ス

二、指導要領

一、騎兵聯隊ニ歩兵第二聯隊第一大隊、野砲兵第一中隊ヲ附シ高田町附近ニ在ル敵歩、騎兵ヲ撃破シテ敵情ヲ搜索セシム

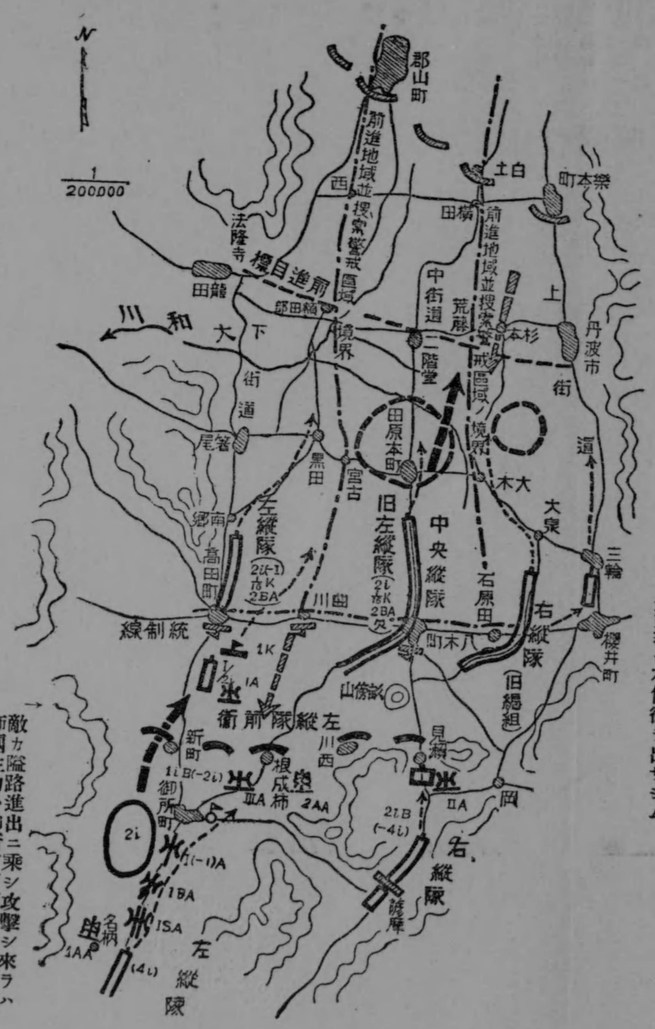
二、左縱隊前衛ヲシテ要圖ノ線ニ陣地ヲ占領シテ右縱隊及師團主力ノ隘路進出ヲ掩護セシメ以テ敵ノ攻撃ニ備ヘタル後師團ハ要圖ノ如ク縱隊區分ヲ變更シテ八木町、高田町ノ線ニ進出ス八木町、高田町ノ線ヨリノ前進ハ更ニ規整ス

三、前進間各縱隊ハ前進部隊ヲ先遣シテ迅速ニ敵ト接觸ヲ保持シ敵情ヲ搜索セシム

四、砲兵ハ各縱隊毎ニ攻撃準備ヲ整ヘテ前進セシム

五、工兵主力ハ師團長ノ直轄トシ主力砲兵ノ陣地進入ノ準備ヲ爲サシムル外機動的企圖ノ用ニ供ス

六、高射砲隊ハ要圖ノ陣地ニテ隘路進出ヲ掩護シタル後八木町、田原本町附近ニ躍進シテ防空ニ任セシム



備考

一、戰鬪ノ爲ノ前進間八木町及田原本町ニ情報收集所ヲ設ク

二、飛行隊ハ天候回復後敵後方ノ搜索ニ任セシム

三、先進輜重ハ先ツ西持田ニ、大行李ハ住川ニ、輜重主力ハ五條ニ一時停止セシム

四、通信ノ件略ス

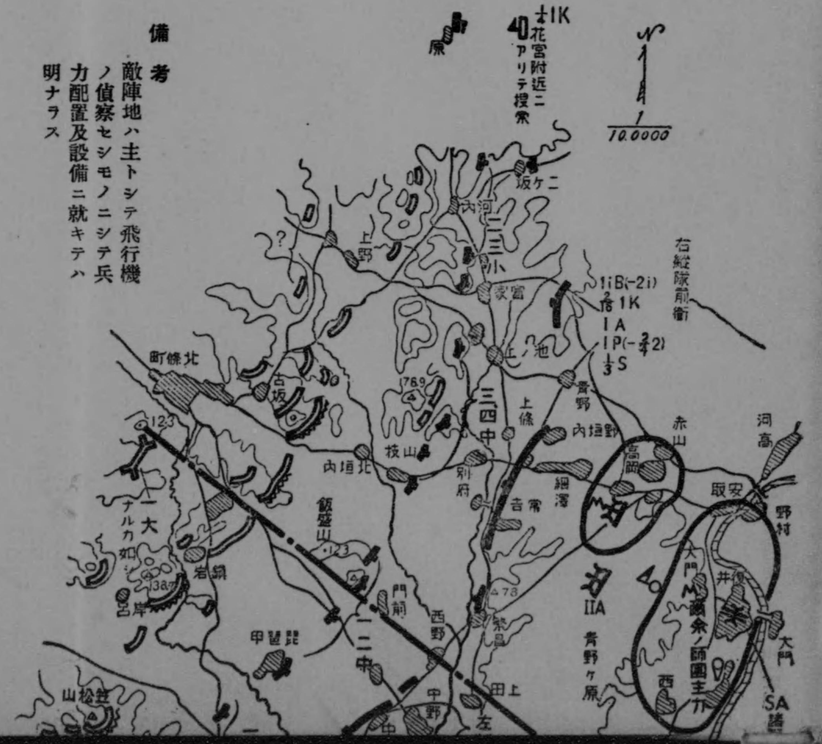
←上街道ヘ右側衛ヲ出サシム

→敵カ隘路進出ニ乘シ攻撃シ來ラハ師團主力ハ御所町西側地區ヨリ進出セシメ右縱隊ハ前面ノ敵ヲ撃破シテ畝傍山東方地區ヨリ進出セシメ兩翼包圍ヲ企圖スル腹案ナリ

一月十一日正午ニ於テハ彼我ノ

附圖第七

敵陣地ノ狀況竝東軍第一師團態勢要圖



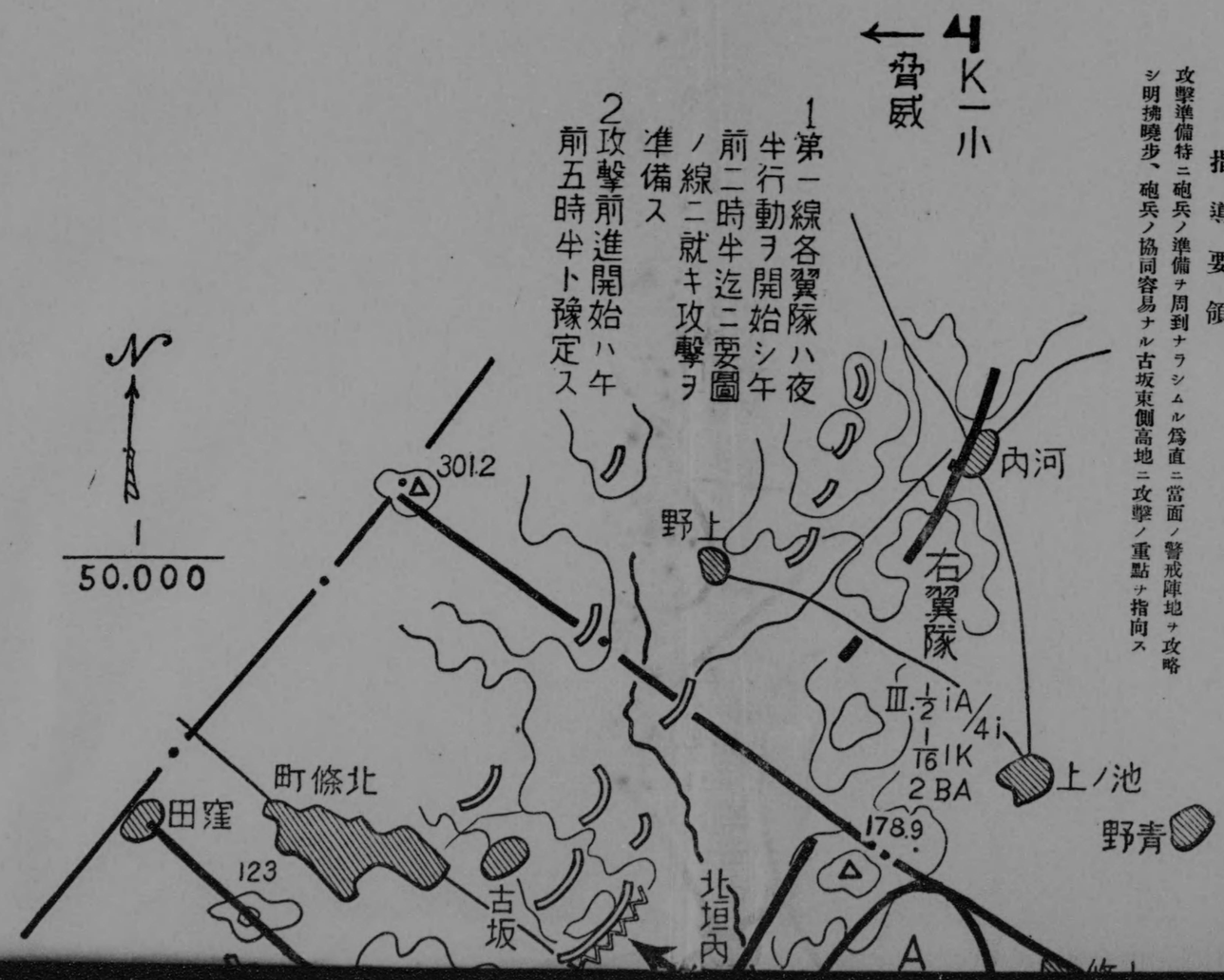
附圖第八

指導要領

攻撃準備特ニ砲兵ノ準備ヲ周到ナラシムル爲直ニ當面ノ警戒陣地ヲ攻略シ明拂曉歩、砲兵ノ協同容易ナル古坂東側高地ニ攻撃ノ重點ヲ指向ス

附圖第九

砲兵使用上ノ見地ニ基ク師團攻撃指導腹案要圖



附圖第九

犬上川左岸地區彼我兩軍態勢要圖

（七月一日午後四時ニ於ケル）

備考

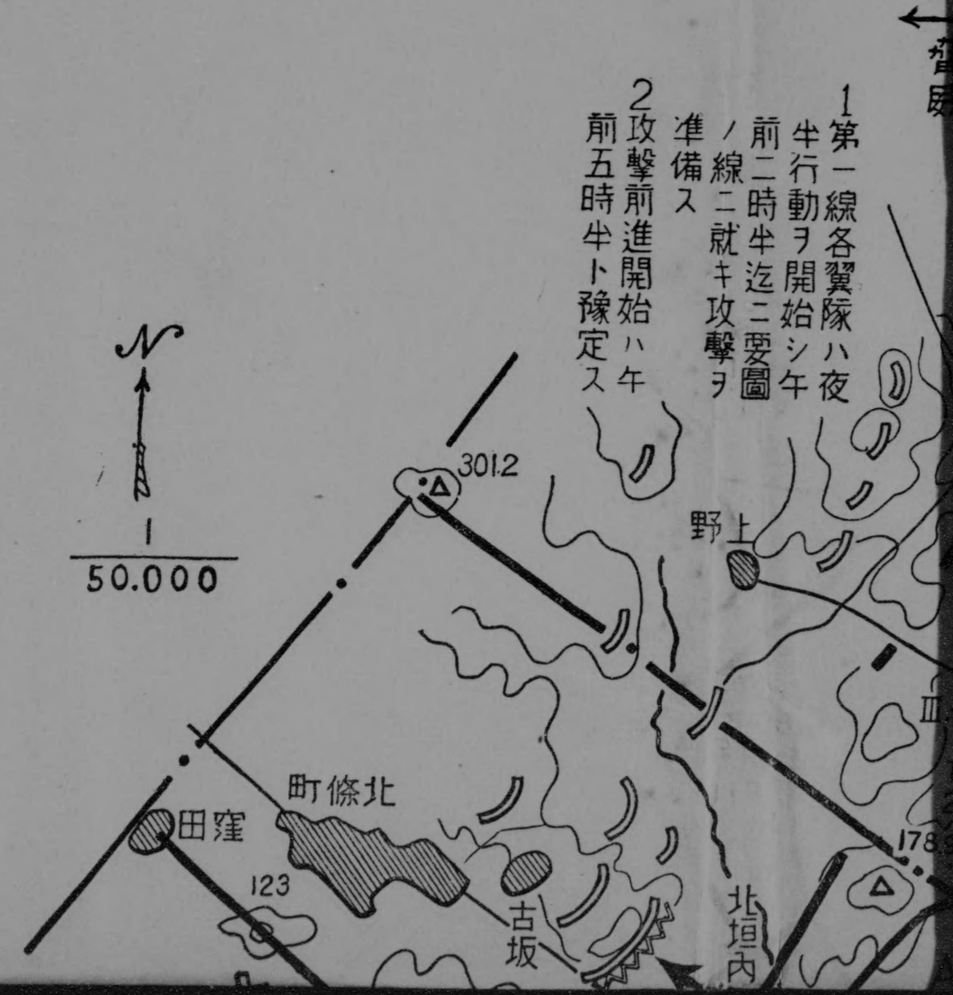
一、飛行中隊ハ八日市飛行場ヲ前進著陸場トシテ利用シアリ

二、衛生隊、野戦病院其他輜重ハ省略ス

三、騎兵旅團内ノ聯隊號ハ第十三、十四トス

師團長ノ企圖ニ基ク部署要圖

上ノ見地ニ基ク師團攻撃指導腹案要圖



1第一線各翼隊ハ夜牛行動ヲ開始シ午前二時半迄ニ要圖ノ線ニ就キ攻撃ヲ準備ス

2攻撃前進開始ハ午前五時半ト豫定ス

附圖第十

一、方針

師團

警戒陣地攻撃部署ノ大要

1、III.½iA/4i
2BA
ヲ青野北方地區ニ增加シ直ニ池ノ上以北ノ警戒陣地ヲ攻略シ當面ノ敵情、地形ノ偵察

2、前進開始午後三時三十分トス
右縱隊ハ各〻當面ノ警戒陣地ヲ攻撃

3、重砲諸隊ヲ大門廠舍及西森附近ニ陣地ヲ占領セシメ主トシテ右縱隊前衛ニ協力セシメ且敵ノ攻勢ヲ阻止スル準備ニ在ラシム

砲兵隊ニ與フル任務

天明ト共ニ效力射準備射撃ヲ開始シ午前五時迄ニ之ヲ完了シ續イテ敵砲兵ノ制壓竝障害物ノ破壞ニ任スヘシ

歩兵ノ前進開始ト共ニ中央隊ニ三大隊ヲ、左翼隊ニ一大隊ヲ直接協同セシメ決戰ニ際シテ更ニ各、約二大隊ノ火力ヲ增加スルノ準備ニ在ルヘシ

飯盛山、大村ノ正面ニ對シ隨時四箇大隊ヲ以テ敵ノ攻勢ヲ阻止シ得ルヲ要ス

附圖第十

師團長ノ企圖ニ基ク部署要圖

（七月一日夜ニ於ケル）

一、方針

師團ハ本夜一部ヲ以テ常安寺附近ノ高地ヲ奪取セシメ主力ヲ愛知川町北方地區ニ集結シテ明早朝ノ攻撃ヲ準備ス

二、指導要領

一、歩兵第一旅團（第二聯隊欠）、歩兵第三聯隊第一大隊、騎兵一分隊、工兵一中隊ヲ夜間攻撃部隊トシ歩兵第一旅團長ノ指揮ヲ以テ三角點二〇三、六高地及常安寺高地ノ敵陣地ニ對シ正子ヲ期シテ奇襲シ此等ヲ奪取セシム狀況ニ應シ砲兵ノ一部ヲ之ニ協力セシム

二、騎兵第一聯隊（二中隊）ヲ師團長ノ直轄トシ日沒ト共ニ之ヲ右翼隊方面ニ移動シ該隊ト交代セシメ夜間攻撃部隊ノ行動及師團主力ノ集結ヲ掩護セシム

三、歩兵第二聯隊（第三大隊欠）、同第四聯隊第一大隊（師團長直轄トス）ヲ以テ要圖ノ線ヲ占領シテ師團主力ノ集結ヲ掩護セシム但歩兵第二聯隊ハ日沒後速ニ一部ヲ以テ雨降野ヲ奪取シテ夜間攻撃部隊ニ協力セシム

四、騎兵隊（支援歩兵大隊及騎兵第一聯隊ヲ除ク）ハ一部ヲ以テ荒神山ノ奪取ニ勉メシメ主力ハ明朝敵ノ右側背ニ向ヒ攻撃スル如ク準備セシム

五、諸隊ノ戰鬪及捜索、警戒ノ地境ヲ要圖ノ如ク變更ス

六、砲兵隊ハ一部ヲ以テ夜間攻撃ニ協力セシメ主力ヲ以テ午前一時迄ニ石橋、圓城寺（石橋西北方二粁）間ノ地區ニ陣地ヲ變換シテ明朝ノ攻撃ヲ準備セシム

七、歩兵第二聯隊第三大隊、同第四聯隊（第一大隊欠）ハ午前一時迄ニ、歩兵第三聯隊（第一大隊欠）ハ正子現在地ヲ發シテ成ルヘク速ニ要圖ノ位置ニ集結セシム

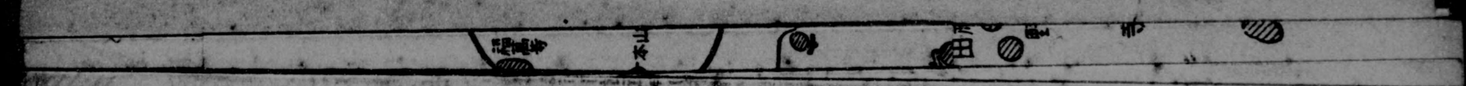
八、飛行隊ハ極力敵後續隊ノ狀況ヲ捜索セシム

砲兵隊ニ與フル任務

天明ト共ニ效力射準備射撃ヲ開始シ午前五時迄ニ之ヲ完了シ續イテ敵砲兵ノ制壓並障害物ノ破壞ニ任スヘシ

歩兵ノ前進開始ト共ニ中央隊ニ三大隊ヲ、左翼隊ニ一大隊ヲ直接協同セシメ決戰ニ際シテ更ニ各、約二大隊ノ火力ヲ増加スルノ準備ニ在ルヘシ

飯盛山、大村ノ正面ニ對シ隨時四箇大隊ヲ以テ敵ノ攻勢ヲ阻止シ得ルヲ要ス



五條町附近第一師團防禦ノ爲地形判斷要圖

附圖第十一

判決

師團ハ決戰ノ目的ヲ以テ金剛山ヨリ五條町東北側地區、下市町西南方高地線及高嶽ヲ經テ櫃ヶ嶽附近ニ亙リ陣地ヲ占領シ主力ヲ吉野川右岸地區ニ配置シ火力ヲ發揚シタル後五條町東北方地區ニ向ヒ攻勢ヲ取ルヲ要ス

初期ノ戰鬪指導

一 飛行隊等ヲシテ速ニ敵ノ前進狀態ヲ偵知セシム

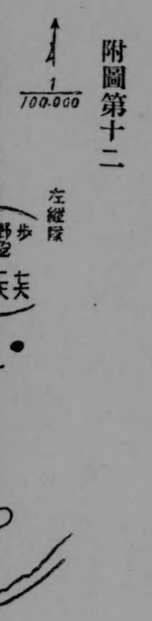
二 大和支隊ヲシテ勉メテ永ク敵ノ前進ヲ遲滯セシメ併セテ師團ノ陣地占領ヲ掩護セシム

三 騎兵隊主力及右地區隊ノ有力ナル一部ヲ以テ當初遠ク前方ニ進出シ敵ヲ該方面ニ分離セシメ又上市町附近ヨリ下流ノ吉野川橋梁ヲ破壞セシム

四 砲兵隊ヲシテ其火力ノ大部ヲ五條町東北方地區ニ對シ指向シ得ル如ク準備セシム

五 狀況ニ依リテハ吉野川左岸地區ノ兵力ヲ更ニ減少スルコトアルヲ豫期ス

附圖第十二



附圖第十三

戰鬪經過ノ概要

一、展開時期　展開時ニ於テ師團ハ

二、爾後ノ戰鬪　我カ砲兵逐次ノ戰頃右翼隊ハ愛知川左岸ニ壓迫セラニ至ル

三、夕刻時ノ狀況　夕刻時敵ハ

右地區隊　2iB(-1/-i.4i)　軍

中地區隊　1iB

左地區隊　4i(-1)

騎兵隊　1/-

砲兵隊　爾

豫備隊　4i

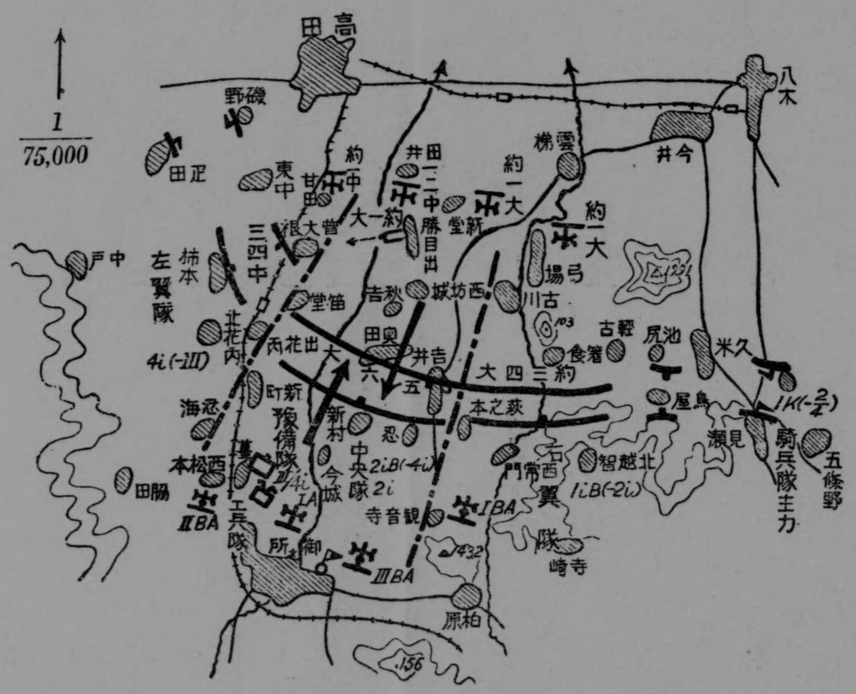
一、右前進備

二、左前進其兩側警力ヲ相等

三、工兵隊修ニ任ス

附圖第十四

十一月十日正子ニ於ケル彼我一般ノ態勢



備考

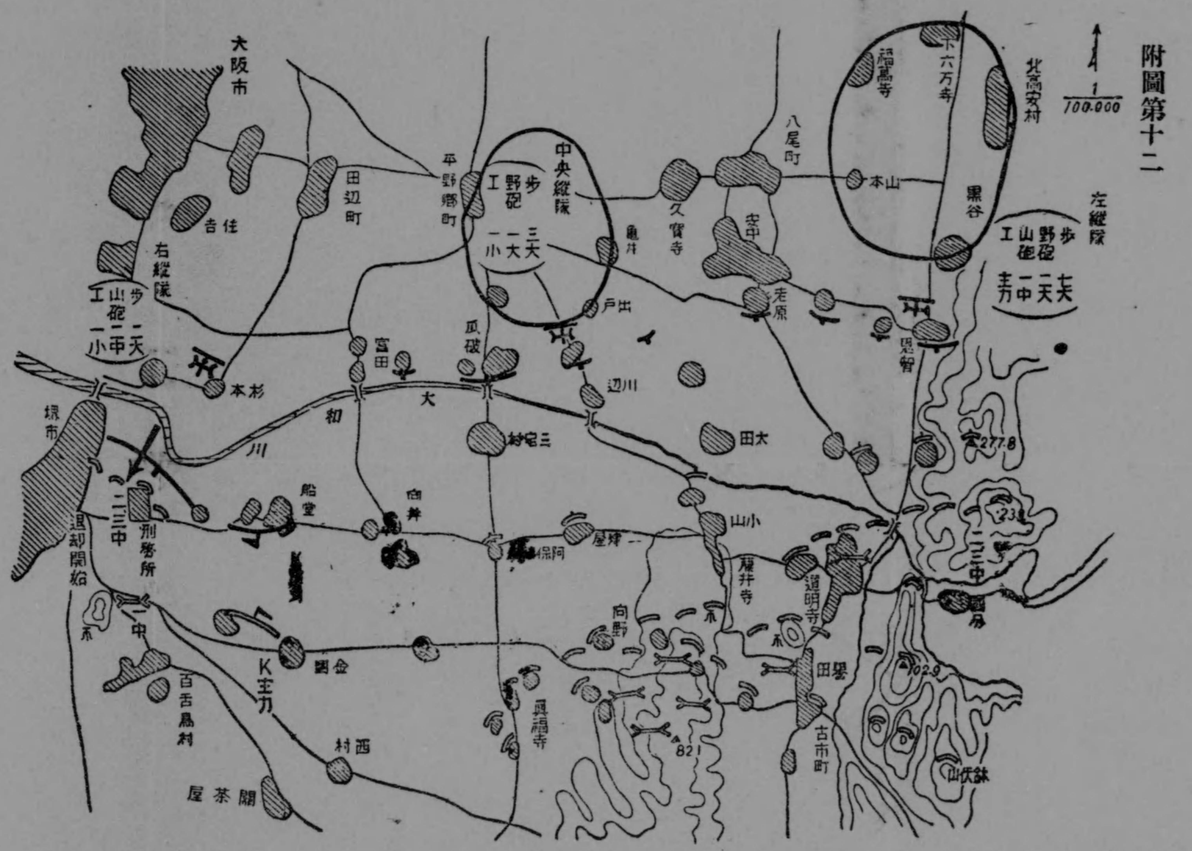
我カ大行李及輜重ハ住川（御所西南方約八粁）ヲ先頭トシテ停止シアリ

注意

左、右翼隊及中央隊ノ配備及狀態ハ適考考定スヘシ

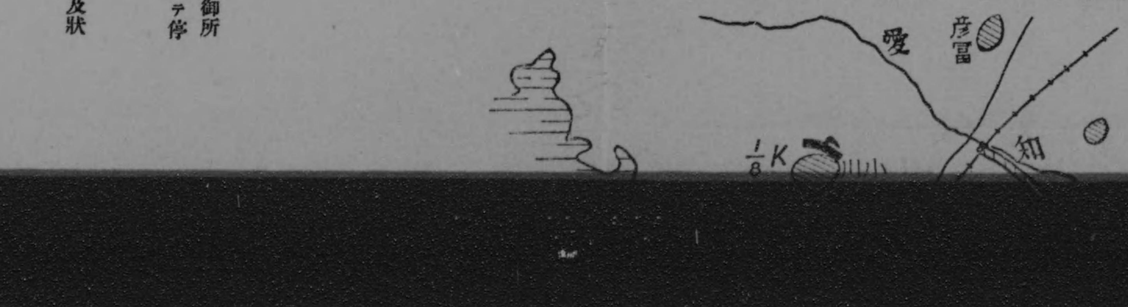
附圖第十四

大和川附近彼我態勢要圖



彼我兩軍態勢要圖

（於十月一日午後八時頃）



附圖第十三

戰鬪經過ノ概要

一、展開時期　展開時ニ於テ師團ノ

二、爾後ノ戰鬪　我カ砲兵逐次ノ戰頃右翼隊ハ愛知川左岸ニ歷道セラニ至ル

三、夕刻時ノ狀況　夕刻時敵ハ奥附擊シ來リシモ我カ第一線部隊ハ一於テ師團長ハ八日市、旭、小幡、增援隊ノ到著ヲ待チテ後圖ヲ策ス

四、夜ノ狀況　夜ニ入リ

テ師團ハ要圖ノ線ヲ確實ニ保持シ第一線ヲ堅固ニ爲シツツアリ

左翼隊正面ニ於テハ敵ハ午後七時頃和田山ニ向ヒ攻擊シ來リシモ我ハ之ヲ退擊セリ敵ハ爾後積極的行動ニ出テス隊勢整理中ナルモノ如シ

工兵大隊ハ主力ヲ以テ旭附近ニ、一部ハ右翼隊豫備ト共ニ八日市町附近ニ陣地構築中ナリ

騎兵ハ彼我兵力相伯仲ス

經橋本至和歌山

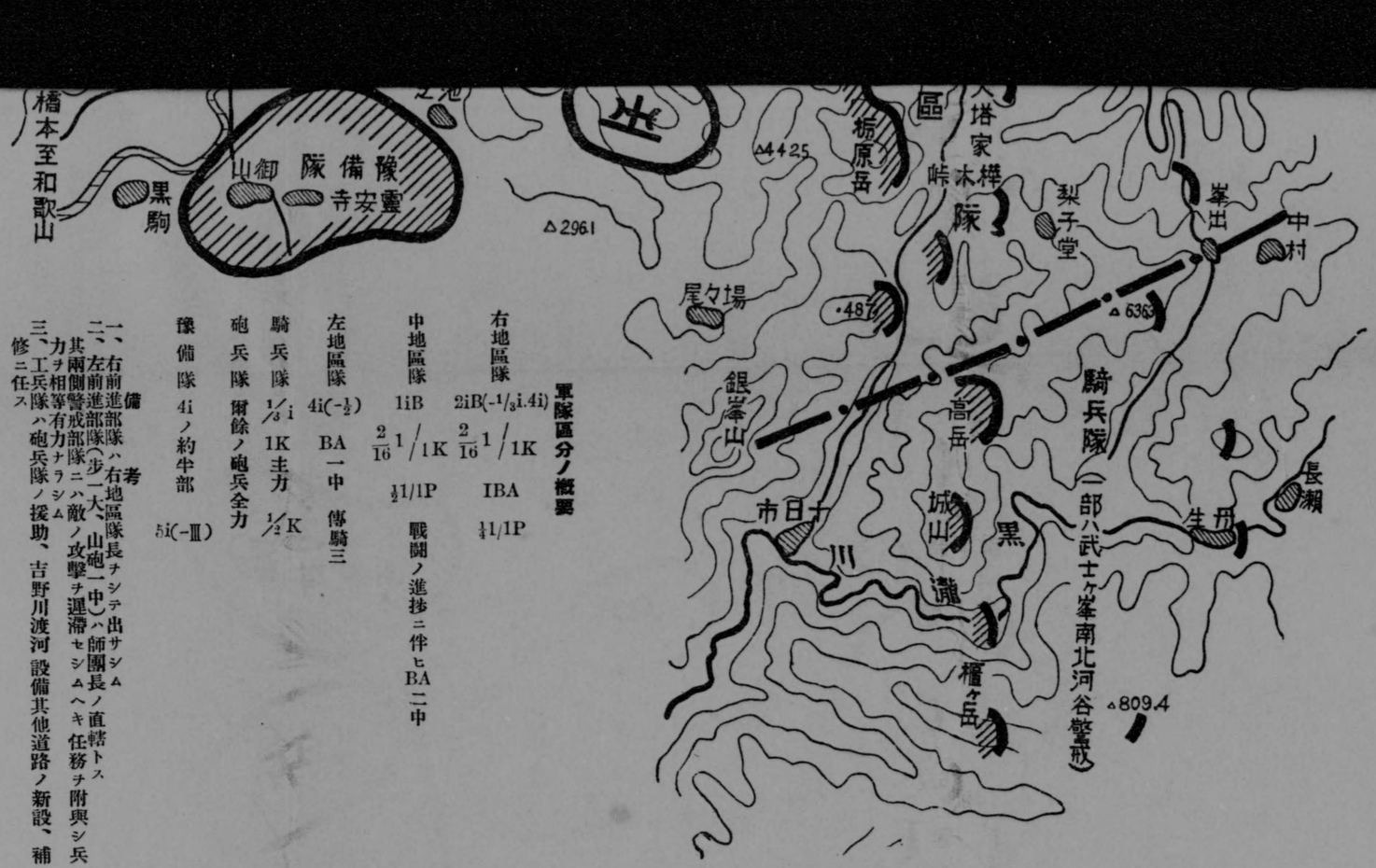
カヲ相當
三、工兵隊
修ニ任ス

戰鬪經過ノ概要

一、展開時期　展開時ニ於テ師團ハ稍〻不利ノ立場ニ在リ逐次戰鬪加入ヲ爲シ重點ヲ右翼ニ指向シ

二、爾後ノ戰鬪　我カ砲兵逐次ノ戰鬪加入ニ依リ稍〻戰勢ヲ立直シタル感アリシモ敵ハ漸次我カ右翼ヲ包圍スルニ至リ午後四時頃右翼隊ハ愛知川左岸ニ壓迫セラルルニ至リシモ砲兵ノ協力適切ニシテ敵ノ猛攻ヲ阻止シ夕刻ニ至ル

三、夕刻時ノ狀況　夕刻時敵ハ奥附近、下野附近ニ攻撃シ來リシモ我カ第一線部隊ハ一時之ヲ擊退スルヲ以テ師團長ハ八日市、旭、小幡、今村ノ線ヲ保持シ增援隊ノ到着ヲ待チテ後圖ヲ策スルニ決ス



約一大